

---

# 流水の宴（一） 旅立ち～イサク編

じょーもん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

流水の宴（一） 旅立ちのイサク編

### 【Nコード】

N0123E

### 【作者名】

じょーもん

### 【あらすじ】

平凡な日常がかけがえのないものだということを、普段私たちは忘れている。同じような毎日が二度と来ないものだと思い付いていない。

失われて突然、人はそうだったのだと実感するのだ。

中世風の架空世界を舞台に、日常から投げ出されて流浪の人生を余儀なくされた人たちが集った『アレクトー傭兵団』の一部隊を率いることになる青年と、彼に関わった人たちの物語。

第一部ではその傭兵団の一部隊で『女神』と呼ばれた青年が、生まれ育った故郷を追われた経緯<sup>いきよつ</sup>を描きます。

#### 警告

中世風価値観を採用しているため、男尊女卑的な記述が散見されます。人類史の中で女性というものが権利を持っていなかったという事実を見たくない方は、触らないに越したことはありません。

勿論、私個人は、権力を行使する側に女性もいたということと、世の習いとして女性差別が有ったことに、何ら矛盾はしないと確信しております。

ルビ多め、I E、C h r o m、縦書き推奨。

## 序の前 宴（うたげ）（前書き）

架空世界であっても一から想像するのは限界があり、風土やその他、現実世界から借用しているものも多々あります。

名付けのパターンを始め、気になる点もあるかとは存じますが、細かい点はお見逃しいただき、おつきあい頂けると幸いです。

## 序の前 宴（うたげ）

なあ、不思議だと思わないか？

この河は一掬い<sup>ひとすく</sup>一掬いが全く別の水が集まってできてるんだ。  
昔から流れている同じ名前の河なのに、同じ水は二つとしてないんだ。

不思議だね。

いつもそこにあるのに……

いつも同じに見えるのに……

本当は違うんだ。

まあ、人生みたいなものかな？

自分はずっと自分なのに、同じ時間は二度と過ぎせないんだよね。  
もっとも、普段はあんまり気にしてないけどな。

なんだか、そんな言い方されると

今ここにいてるってことも、確かなことじゃないみたいだね……。

この河が今ここにあることは、少なくとも確かだろう。  
お前と私だって、間違いなくいるさ。

でも、僕はこんなに大きくはなれないよ。

向こう岸が見えないくらいまで大きくなったこの河だつて  
水源ではささやかな流れなんだって聞いたことあるか？  
信じられないよな。あらゆることから、物凄い数の水滴が集まっ  
てきてるんだ。

水滴が小川になるだけだつて、物凄いことだと、思わないか？

とんでもない数のせせらぎになって……  
律儀に ここに集つてきてる……。

みんなで集まって宴つてわけだ。  
なんだか洒落てるだろ？

海に交わっていくよ。

どこからが海？  
どこまでが河？

河はどこが終焉で……  
海はいつの間に始まつたてたの……？

始まりと、終りは…… いつでも集<sup>つど</sup>っているのさ。  
始まるってことは、終りが生まれるってことだ。  
だからね…… 終りも怖がらなくて良いのさ。  
なにかが始まる徴<sup>しるし</sup>だから。

じゃあ、始まることも…… 怖がらなくていいね。

もちろんさ。

格好つければ、摂理<sup>せつり</sup>って奴かな。  
ここにいるから、いつも何かが変わっていくけれど…… 素直に流れ  
て……

あることをできるだけ愉しめばいいと…… 私は思っけどな。

生きるって…… 楽しいの？

出会えるからね。

お前と私のように、誰かといっただって。

だから、天地の狭間<sup>こゝろなとこ</sup>で毎日が流水の宴<sup>うたげ</sup>ってわけさ。

残念ながら、ご馳走はいつもあるって訳じゃないけどね。  
悪くないだろ？

うん。  
なんだか粹だね。



## 序章 発端

夏至祭りの翌朝のことだった。

母なる河セハヌーに舫もやった小舟の傍らに少女の屍が漂っていた。清らかな水の流れとは程遠い生活排水で濁った水でも、彼女に哀れを感じたのだろうか。水はあらゆる汚れを　死のおぞましきまでも　洗い晒していた。彼女を見つけた老人は、嫌悪するより先に憐憫を覚えた。全ての血が凍りついたような青白い肌は、既に命が彼女の体から抜けて行ってしまったことを証明していたけれど、死体に触れる忌避感より、か細く哀れな体を冷たい水から出してやりたいという思いの方が強かった。

ここ、北の大国イサクは夏であっても日が長いというだけで、暑さとは無縁だった。首都を守る城壁は高く堅固で、セハヌーで漁をして暮らしを立てているこの老人は、頼もしさと誇らしさをそれを見上げるたびに感じていた。もっとも、壁の向こうの王都という世界は、彼のその日暮らしの日常からは遠く隔たっていた。

城壁には壮麗な彫刻が施された門が多数くあり、きらびやかな正装を身につけた衛兵が常に背筋を伸ばして誇らしげに立っている。王都への出入り口はそれらだけだと思われがちだが、実際には王都の交通の要である運河にセハヌーの流れを導き入れたり、生活排水が混ざった水が吐き出されて行く穴のような小さな門が目立つことなく無数にあいている。

老人が小舟を係留している辺りにもそんな排水口があり、ゴミや汚物を浮かべながらヌルヌルと粘性を帯びて見える水が吐き出され続けている。けれど、お天道さまのご機嫌が悪いときには向こう岸すら見えない程の大河セハヌーにとっては何のこともないのか、直ぐに清い流れに呑み込まれていく。

老人はいつものように早朝に漁に出るべく住居すまいしている小屋をでた。汚水域をぬけてセハヌーの清流まで漕ぎだして魚を捕りにいくのだ。帰って来る時間を見計らってやってくる仲買人に自分の肴を残して売りさばけば、あとは長い一日をどう過ごしても他人様に文句を言われる筋合いは無い。気楽な独り暮らしだ。

そして、舫ふない綱を解き放とうとしたとき、それが大河に流されて吞まれてしまうことを断固拒否するかのように、綱に絡まって在ったのだ。

老人の気の遠くなるほど長い生涯でも見たこともないほど精緻な刺繡を施されたドレスだった。初々しい女の膨らみを身にまとう前の幼い体に、その豪華さは不似合いだった。

「こりゃあ、ええとこのお嬢様だろうて……。別嬪さんもこうなっちゃ、気の毒なもんだ。親御さんが、泣きはるやろな」

老人は聞く者としてないのに、いつもの癖でブツブツと声に出して言う、小舟に冷たい骸むくろを引き上げた。おそらく殺されてから運河に打ち捨てられたのだろう。稚いとけない者に酷い仕打ちをした何者かは、このものがセハヌーの流れにのって永遠の旅に出ることを望んでいただろう。少なくとも普通ならば水の中で死んだものは、水底深くに引きずり込まれ、臓腑の腐れが進んでからでないと浮いてこないものだ。

沈んでしまう前に自分の舟に引つ掛かったのだろうか。老人には少女が家族のもとに帰りたくて自分の舟に縋り付いたように思えてならなかった。顔は冬の月よりも白かったが、水の中で過ごした時間が多くなかったことを物語って、未だ美しく引き締まってみえた。

水から引き上げた老人の目に、大きく引き裂かれたドレスと醜く深く抉られた女の部分が映った。どんなに恐ろしい外道が、ここまでの仕打ちを、聖なる祭りの夜に加え得たのだろうか。老人は豪華な衣裳の裾を掻き合わせて、その凌辱のあとを隠してやった。自然

に手が合わさった。

「可哀相に。怖かったやろな……」

幼子を寝かしつけるように、動くはずのない少女の肩をあやす様に叩いてから、老人は川の流れへ入り漁をするのとは反対の、運河の入り口へ向かって小舟を漕ぎだした。取排水口とは別に設けられている、漁や小荷物を運ぶ船が出入りできる城内に張り巡らされた運河への出入り口を目指す。河と運河の境に必ずある川役人の詰め所に届けるのだ。

財産を十分に持っている家の、愛された娘であれば、この手間は何程の事もない。我が子の生死がわからぬ程の苦痛が親にあるだろうか。きっと、それなりの礼が届くはずだ。この娘には悪いが、今日の一日の漁で得られるものよりは遥かにましな謝礼が期待できるだろう。

この朝、黄泉の国に嫁いで行ったのは十三になったばかりの、大国イサクでも十指に数えられる豪商カルラーラの一人娘だった。容姿に難があつたとしても、財産目当てに求婚者が門前市をなしただろつが、彼女は美貌で鳴らした母親譲りの顔で十五にでもなつた暁には傾城と呼ばれるだろうと噂されるほどの器量良しであった。実際、貴族の姫様ならならまだしも、たかが商人の娘で、普通であればもう少し年が行かなければ結婚の話もでないところ、既に幾つもの縁談が持ち込まれていた。けれど男児を多くもつけたカルラーラにとって、紛れもなくたつた一人の娘であり、当主は掌中の玉として溺愛してそのような話を門前払いにしていたのだった。

カルラーラの嘆きがどれ程深いものだったか、怒りがどれ程激しいものだったか、押して知るべし。そして愛しい娘を凌辱し殺害した獣への厳罰を望んだのは、むしろ自制された大人の態度であつた

と称賛されることになる。自ら制裁に走ったとしても、誰もが止むなしとしたことだろう。

少女の細い頸に動かぬ証拠であるスカーフが食い込んでいた。それは王立学校の学生の持ち物であり、有り難いことに名前が入っていた。その名が、譬え<sup>たと</sup>五大家といわれイサクの軍事の一翼を担うロキメン家に連なるものだったとしても、カルラーは刺し違える覚悟で王に直訴するに及んだ。

イサク王イルディスは冷酷王と渾名<sup>あだな</sup>されるほどの人物だが、法を遵守して訴えてきたカルラーを憐れみ給い、ロキメン家に連なる人物であれば平民の娘一人の命を奪ったところで何の咎めもないのが通例であるところを曲げて、国外追放の英断を下し、その共犯とされた留学生、カイ・ユーレリアスに極刑である死罪を命ぜられた。

首都ザッティバークは、王の決断を喝采<sup>ちゆうさい</sup>を持って迎えた。王の座を得るために弟妹<sup>いまい</sup>悉くを誅<sup>ちゆう</sup>し、冷酷王と呼ばれ恐れられているイサク王ではあるが、一方で、老獪<sup>いさか</sup>な隣国マヴァル王と互角に外交して侵略の脅威を取り除き、諍<sup>いさか</sup>い絶えない国境を頑として守り抜き、取り敢えずの平穩<sup>せいたん</sup>を齎<sup>もたら</sup>しているのだ。王への国民からの信頼は絶大であつた。

伝統ある大家の威を笠に着、皇太子の側付きである故の奢り故か、罪もない少女の未来を奪った青年が、死罪は賜らないまでも当然の罰を得、学びを得るためにこの国に来ながら愚かな罪を犯した青年に死刑を　　というのは、冷酷王にしてはごくまっとうな判断である。

エアリア・ロキメン。永久国外追放。  
カイ・ユーレリアス。断首、及び、梟首<sup>せうしゅ</sup>。

尚、貴族の断罪を平民が訴え出ることの不届きについては、その心情を察するに無理なきこと故、今回は特別の配慮をもって咎めなしとする。

父は当然だというように頷き、母はエアリア・ロキメンの追放処分を貴族にはこの国は甘すぎると、そのような罰はミアーヌの死に値しないと泣き崩れた。特にカイ・ユーレリアスは息子の学友として幾度と無く家に来たことがあったのだから、その犯した罪の重さは測り知れない。そんな父母の様子は、妹の死と同じくらい唐突で現実感に乏しかった。二人の様子を見ながらも、カルラーラの長子テオドールは泣くべきか怒るべきか迷い、途方に暮れたままミアーヌが納められた柩の前に座り続けていた。

エア。

カイ。

恨めばいいのか。怒ればいいのか。泣けばいいのか。狂えばいいのか。

ミアーヌ。兄ちゃんに教えてくれ。お前を、可愛いお前を手にかけたのは、本当にあの二人なのか？ 俺には……、俺には信じられない……。

柩は沈黙を宿したまま、その問いに応えることをしなかった。礼拝堂の天に吸い込まれるほどの高い天井と、静かに揺らぐ蠟燭の炎。泣き女のすすり泣く声。泣くために雇われている女たちの堂に入った泣き方がテオドールには羨ましかった。あんな風に、ただ泣くた

めに泣いてやりたい。可愛かった、たった一人の妹の為に。けれど、彼は半分に引き裂かれている。半分は親友と呼びたい青年たちの死や追放という王の処断の理不尽さに切齒扼腕し、残りの半分は肉親を穢した者たちへの怨嗟に焼かれていた。

## 第一章 越境

馬に拍車を入れる。ここ北国の夏は暮れかけたと見せて闇を受け付けぬままに時間だけを追い立てていく。遙か街道の前方に見えてきたあの影は、音に聞こえた真玉関しんぎよくかんの威容だろうか。自分は間に合ったのだろうか。青年の疲労は激しい。目はかすみ、空腹は鉋キリを臍にねじ込んでいるかと錯覚するほどまでにきつく、既に朦朧としている意識そのままに、世界は混沌としてきていた。彼はそれでもいま休むわけにはいかないのだ。国境を越えさえしたら、思いつきり体を延ばして眠らせてやる。だから、もう少しがんばれ。

\* \* \*

カイ……。いや、エアリア・ロキメン殿。……これを

頭の中に繰り返し甦る、親友の顔。彼は苦みを噛みしめて己の名でカイを呼んだ。彼の手には巻かれた羊皮紙があった。追放命令書。

「国王の御名に於いて死刑を言い渡されたカイ・ユリウスが逃亡したのです。主だった街道の国境は、順次封鎖される筈。追手も主な街道毎に放たれるでしょう。幸いといっちゃなんですが、共犯者エアリア・ロキメン殿は、明後日の夜明けまでにこの国をでなければ永年禁固です。……追放処分も悪くありませんね。こいつのお蔭で安全に国境が越えられますよ」

「ダメだ。これはお前の」

彼は、顔は厳しく引き締まったまま、口許だけで不遜に微笑んで

見せた。

「見損なわないうください。私はこの国を知っています。どんな手段を使っても、抜きたいときに抜けてみせますよ。でも貴殿には無理です」  
あなた

そう話した青年こそが『エアリア・ロキメン』その名の持ち主だった。穏やかで、いつもどこか醒めているような、激するところのない友人だった。集まってはしゃいでいても、いつも落ち着き払っておさまっていた。過酷に訓練されてそうするように仕立てられていただけで、核には情熱が滾っていることを知るまで、自分は彼を年寄り臭いと敬遠していた。懐かしい。なにもかもが、夢のように駆け抜けてしまった。あの朝まで、穏やかな学生生活は続いていくのだと疑っていなかった。明日は今日の続きで無い事など、知ろうともしていなかった。

無理やり奪われて、遠ざかって行った学生時代は、もう二度とは戻らない。友の顔が不覚にも涙でぼやけた。

「……せめて。共に行こう。きっと何とかなる。俺の国に帰れば、なんとでも生き方を見つけれられる……。約束する。決して不自由などさせない」

青年は静かに頭を振った。

「まだ、やり残した事があります」

道々なされた彼の説明を聞けば、今回の事件はエアリア・ロキメンという人物を政治的に抹殺するべく仕組まれた事は疑うべくもない。仕掛けたのが誰かも、多分国王は知っているのだ。知っていてこの有能な青年を捨てたのだ。そう、彼を排除したい者を取ったのだ。恐らく、彼が自国に留まり禁固生活を選んだとしたら、彼が生きて恩赦を得るより先に、刺客が死を運んでくるだろう。

「ほとぼりが冷めるまで、ここから出るべきだ」

ほかならぬエアリア・ロキメンその人にロキメン殿と呼ばれた青



年は叫ぶように言っただけで、当人は静かに続けた。

「ウィルディーン様と、このまま別れるわけにはいかないのです。私が選んだ道ではありませんでしたけれど、もう他のものとして生きることは不可能ですから……。影に光を捨てる事はできませんし……」

青年の顔に怒りが浮かんだ。まだ、そんな甘いことをいつているのか。

「あんな奴、お前が命をかける程のものじゃ無いじゃないか。頼む。一緒に行こう。エアリア・ロキメンなら従者の一人くらい連れて出ても奇怪しくないだろ？」

偏屈で狭量で、取り立てるところの無いこの国の跡継ぎ。細く尖っていて誰も惹かせる事の出来ない少年。エアリア程の可能性を持った青年が、自分に命を捧げてくれるその事に、感謝どころか配慮すらでき無い少年。誰をも許さず、誰も愛さず、誰からも愛される事を求める才覚すら無い少年。

ああ、止そう。今更だ。何度も言っただ事だ。影がなんだ。使命がなんだ。お前の人生は、お前のものじゃないか。

何度も繰り返したそれは、いつも強く聳え立つこの青年の忠誠心という壁に跳ね返され、受けとられた事は一度としてなかった。年不相応に知識も有り、感情を制御する事を得ていながら、この一点についてだけは、余りにも頑なでとりつく島がない。

幼いころから、そうあるべきと叩き込まれてしまった価値観は、覆す事が出来ないのだろうか。

エアリア・ロキメンは体格的に恵まれているこの青年に比べると、華奢といってもいい。彼の頑健な幅のある体に馴染む肌触りも極上な上質の服は、細かい事まで気付き彼が特別に調達してきてくれたのだろう。けれど丈の足りないマントは、エアリア自身のものに違

いない。なぜなら襟の留め具に使われている釦ボタンには白抜きされたロキメンの猪が輝いている。厚手のどつしりと重いそれは、門外不出の染色技術によって独特の色合いをもつイサクの名産、ロッシ毛織に違いなく、イサク五大家に数えられるロキメン家、その長子の持ち物として不足はない。馬を駆ればの身を切るほど冷たい北国の大気も、そのマントを纏えば骨身に堪こたえはしない。耳を切りつけてくる風の刃。その切っ先が鋭いほど、エアリアのマントの優しさが身に染みる。

エアリアが用意してくれた馬は、気性が柔らかいことで、何度もへボな乗り手にしか成れなかった彼の馬術の試験に天恵を与えてくれたブランカだ。一刻も早く出国しなければならぬ乗馬が不得手な友のために、この馬を学校から持ち出すのはさぞかし手間だったに違いない。けれど頻繁に拍車を入れずとも急ぐ乗り手の気持ちを感じ、風のように大地を蹴ってくれるブランカなしに、ここまでの道程さえこなせなかっただろう。

なんと広い大地だろう。なんと平らな道のりだろう。馬の乗り手この国での名乗りはユリウス・カイは、遠い南の祖国に思いをはせた。東国と西国を結ぶ『海の道』のほぼ中央に位置する港町。イサクのような大国から見れば一つの町に過ぎないほどの規模の公国を称する幾つもの国が存在し反目し合いながらも、他の地域に対しては連合して一つのそれなりの規模を持つ勢力として振る舞う。モノとヒトが流れ込み、流れ出で、何もかもがいつも変わっていて、いつも混沌としていて、活気づいている。山は迫った海に落ち込んでいて、金持ちの家といえどもこじんまりとして犇き合っている。カイが乗馬を覚えたのは、遠いこの国に留学するため初めて生まれ育った街を旅立ってからだ。

のんびり馬の足どりにまかせて旅をした。なんと幼く希望と野心に満ちていたことだろう。この国での学びが、こんな形で終わると

は想像もせず。

肩に食い込んだ指先が白くなるほどに力を込めて、エアリアはカイの肩を両手で掴んだ。

「いいですか、是が非でも死なないで下さい。必ず生き延びて……」

「お前もだ。頼む。一緒に行こう」

自分の言葉が虚しく響くだろうことを知りながら、カイは両手で彼の肩に有ったエアリアの手首を握りしめた。そのまま力を込めて引き寄せる。細身の体はカイの胸の中に、まるで少女のような量で収まってしまふ。まるで他の男に恋している乙女を口説いている道化男のような気分になりながらも、もう一度繰り返す。

「一緒に行こう……エア」

けれどエアリアは少女には出せない断固とした態度でカイの抱擁を押し戻すと、怒ったような目で睨み付けた。それから、ふっと表情を変え　カイを通り越して空を見上げた。

「この国は……、厭な国ですね……。お天道さまの恵みが少ないからですか？　なぜこんなに醜く荒れてしまふんでしょう。……私のために酷いことになりました。すみません。本当に厭な国です……」  
カイは首を振った。

「俺はここで過ごせたことを誇りに思う。お前やテオドールと過ごせて、学問が成ったのかは些か心許ないが、それでも此処で学んだ日々は俺の生涯の宝になるだろう。沢山のものを学べた。楽しかった」

エアリアは自分やテオドールを魅了してやまなかった極上の笑顔で微笑んだ。

「ありがとう。カイ……そういつてくると、少しは心も軽くなります」

「この馬は気性が真つ直ぐで頼り甲斐があります。カイ程度の腕なら下手に操ろうとしないで、任せてしまった方が楽だと思いますよ」  
エアリアの口調がきつぱりとしたものになっていた。共に行くとは決して言わないだろう。この国に留まるつもりなのだ。あんなつまらない皇太子なんぞの為に命をかける気なのだ。カイはあきらめるしかない。エアリアという奴は何時だって、温和そうに見えて、気弱そうに見えて一番頑固だった。

それにしてもエアリアの雑言には腹が立つ。確かに自分は結局乗馬は上手には成れなかった。この国の生まれだったならば子供でも持っている能力だろうし、自慢できる習熟度でないことは承知しているが、とにかく、走らせられるようにはなつたのだから、この局面ではカイ程度などと貶める暇があつたら煽ててもらいたいものだ。山と海とに挟まれた可愛らしい規模の故国と違って、この国はとにかくやたらと広いのだ。国境までの道のりはあまりに遠い。一時に駆け抜けるといふのは、自分程度の馬術の腕前の者にとっては、はつきりいつて暴挙以外の何ものでもない。

「わかった、ありがとう」

それでもカイは素直に頷いた。これ以上時間を無駄にしては、エアリアの苦労が全て台無しになる。彼はミアヌ・カルラーラの無残な死を自分の存在がもたらしたものと、重く受け止めている。自分まで処刑されてしまえば彼はどんな風にその事を乗り越えられるだろう。王立学校で名を轟かせているとはいえ未だ自分と変わらない年頃の青年に過ぎないのだ。期限に間に合わず越境できなかった場合、永年禁固に服させる為、カイはイサクの首都ザッティバーグに戻されるだろう。そうなれば、彼がエアリアではなく脱走したカイ・ユリウスと判明するのは時間の問題だ。そうなってしまった場合、カイが安全に越境できる頼みの綱であるエアリア・ロキメンへの追放命令書と、襟の留め具に彼の紋章が入ったマントは、今度カイを脱獄させた犯人が紛れもなくエアリア・ロキメンであるこ

とを証明してしまう。彼を葬りたかった連中が舌なめずりする姿が目に見えかぶ。五大家のロキメン長子ともなれば、ミア・ヌ・カルラーの死をもつてすら国外追放が精々だが、王命に反したとなれば死刑を言いつかってさえ不思議でない。

自分が生き延びるため、エアリアへの国内での追及を避けるため、何かなんでも期限までに国境を越えなければならない。

颯爽と馬に飛び乗りたかったがそんな芸当ができる筈もなく、カイは鞍にやつとこさとよじ登ると馬首を　一番近いとはいえ遙か遠くにある　南の一部国境を共にしている隣国マヴァルへと向かわせた。もはや振り返ることは無い。

「では、行く。祈安」

旅立つものへの故国の言葉を唇に乗せた。ここから出発するのは確かに自分だけれど、彼も又、日常から否応もなく追いつられてどこかに向かつて行くのだから。多言語に堪能なエアリアならば苦もなく理解するだろう。

「祈安君感謝、亦君安祈真……どうか無事で……」

驚くほど訛りの無い言葉が音楽のような響きを持つ母語で返され、それに聞きほれる間もなく穏やかなこの国の言葉が続いた。明日が今日の続きで無い事など疑わなかった、学ぶこと、研鑽し合うことが日常の全てだった日々は、過ぎ去ってしまった。エアリア・ロキメンとして越境することが、今は何よりもの使命だ。生まれて初めて拍車を入れた。馬の突然の走りにカイは手綱にしがみついた。

漸く馬の走りというものに体が馴染んだとき、カイは未練がましくもう一度だけと振り向いた。そのときにはもう街道には見知らぬ人影がぼつりぼつりとしみを作っているだけだった。

さらばだ。北の巨大な王国イサク。運良く存ながらえて生涯が遠く続い

て行つたとしても、二度と足を踏み入れることは無いだろう、凍てつく北の大地。……二度と。

\* \* \*

馬に拍車を入れる。ただ、国境を目指して。

若く体力に恵まれているとはいえ酷な道のりだった。ミアヌ・カルラーラの死をもたらした者として拘束されて三日。睡眠も食事もまともにとつていない身に必要なのは、体を伸ばして眠ることだけだ。だが、ここで休むことは許されない。喉は渴いて唾も出ない。腹は空腹を通り越してキリキリと痛んだ。カイは長くもない自分の生涯で一番の苦しみ味わっていた。国境を越えるまでだ。国境を……。こんな苦行が待っているなら、絶望して牢の石壁とにらめっこしたり、出された食器をひっくり返したりするのではなかった。しっかり食べて眠っておくべきだった。本当にいい教訓になった。人生のこの先で、どんなに屈辱的な扱いを受けようとも、寝られるならば眠り、食べられるなら必ず喰らってやる。息をしている限り、二度と絶望などしない。カイは何度目になるだろう、心の中で宣言した。

エアリアへの探索がなされないためにも、自分はロキメンとして追放命令書を提示した上で国境を越えなければならない。急げ。一歩国境を越えさえしたら、背中を伸ばして絶対に寝てやる。だから、いまは急げ。

遙か目前に霞んでいるあれは、関所だろうか。田畑や村々、森や

林、町並みさえも押し分けて、傍若無人なまでに真っ直ぐ幅広く伸びてきた主街道を遮るように、巨大な影が道を塞いでいる。影は恐ろしいまでに延々と両腕を広げていた。あれが、音に聞こえた長城だろうか。この塊に比べたら、カイが入国した時に通った東側国境の関所は只のあばら屋だ。

（そうか、本当にイサクとマヴアルとは、五十年と空けず戦争が繰り返されてきたのだっとな）

カイの頭の中にあつた知識が、現実として迫ってきていた。白夜の極北からずっと南下してきた為、夜中を走り通していながら、明け方に近くなっている筈なのに、周囲は暗さを増して行った。カイの疲れた頭と体が、時間の感覚を完全に奪っていた。夜明けに果たして間に合うのだろうか。夜明けまでまだ充分に時間が残されているのか、それとももう殆ど猶予はないのか、全く知る術がなかった。ただ、走り抜けるしかない。今は。

マヴアルとの国境に聳える真玉関。そして両腕を広げるように果てし無く続いている塙のような長城。遠目にも分かる名高いその建物の威容に気押<sup>けお</sup>されて、一瞬でも見入ってしまった己に、カイは舌打ちした。時間はもうないのかもしれないのだ。こんなところでお上<sup>のぼ</sup>りさんしていてどうする。

何か心配がした。

戦士としての訓練を幼いころから積んできた自負のあるカイの本能と言つていい繊細な感覚だった。背後に自分を追っている何もの達かがいた。間違いない。何か圧するような、項<sup>うなじ</sup>の毛が逆立つような。

「まずい」

カイは声に出していた。一つや二つではない馬蹄の響きが、まだ暗く沈んだ街道を迫ってくる。脱獄した死刑囚、ユリウス・カイへの追手か？ エアリアの国外追放を取り消して拘束するための使者か？ 全くそれらとは別件で国境に急いでいる軍人か？ 彼らがなんであっても、あの響きに追いつかれる前に、真玉関を抜けねばならない。疲れがどこかに吹き飛んで、カイは拍車を再び入れた。

カイの頭は冷静に今、己がすべきことをしていると信じていたが、彼の体は己で把握しているより遥かに疲れ切っていた。馬は急かされて素直に走り出したのだが、手綱を握っていた乗り手の握力は既に弱り切っていた。掴んでいたつもり革の手綱が指をすり抜けて行った。己の失態を悟るより先に天地が逆立ちした。

まず、息が詰まった。それから徐ろに背中に激痛が走り　カイは地面で体を丸めて転がり回った。転がると痛みは益々激しくなつたが、そうせずに居られないほどに背骨が痛んだ。馬が　エアリアがくれた馬が真玉関の影に向かって軽々と走っていく。失敗したのだ。越えられない。自分はエアリアの信頼に応えられず、自分の未来をもつなぎ損ねてしまった。捕まって、首都ザッティバークに戻されるのだ。きつと。カイは大きな体を持て余すように丸めて地面に突っ伏し、込み上げてくる嗚咽に肩を震わせた。情けない。馬蹄の響き大きく迫ってくる。地面がゆれているようだ。どうにでもしてくれ、やれるだけのことはした。結局エアリアにとって益することは何もできなかった。疲れただけだった。

ほんの少し前まで、二度と絶望しないと誓っていたのも忘れ、カイは押し寄せる無力感に咽び泣きそうになった。だが、この国の連中から見たら異国の馬の骨に過ぎないが、母国では名家であるユーレリアス家の男子であるという矜持を掻き集め、その涙を無理に押さえつけた。この首が落ちる瞬間まで、自分は何ものにも羞じるものは無いと毅然とした態度を示さなければならぬ。父母や兄たち、そして故国で待つ親友のためにも醜態を曝すことだけはしたくない。



「兄さん、兄さん！」

大きな手が抱きしめるようにカイの肩を引き起した。カイは思いがけない聞き覚えのあるその声に、観念して固く閉じていた目を薄く見開いて顔を上げた。やはり思った通りの顔だった。明るい銀色に近い軽く巻いてうねっている黄金の髪。深い湖のような碧い瞳。やさしげな顔だちに似合わない、いかつい肩には、カイがいま着ているのと同じ色合いのどっしりとしたマントが、白く輝く猪の飾りボタンで留められていた。

「……キリー……？」

呼ばれて、大きな手の主はカイ以上に驚きの眼を見開いてつぶやいた。

「……ま……さか。そんな……。兄さんじゃなくて、……カイ先輩？！」

カイは、自分を抱き起こそうとしていた大柄な青年の背後にも、見知ったいくつもの顔をみとめて、呆然とその一つ一つをみまわした。彼らも言葉もなくカイを見つめていた。

「なんで、カイ先輩が……。兄さんのマントを……」

## 第二章 剣の会

「兄さんと、カイ先輩が、なぜミアー又ちゃんを殺すんだ？ 意味がない」

机を叩き壊さんばかりの勢いで叩いて、キリアン・ロキメンが毒づいた。

石造りの堅牢な建物が連なるイサク王立学校の学舎の外れの一角に、冬の雪に閉ざされた季節に体育活動を行うための屋内闘技場があった。夏はひっそりと打ち捨てられたように人の流れから置き去りにされる建物であるが、『剣の会』に連なる面々だけは、夏でもここに足を運んだ。

闘技場そのものの横にある、多分当初は大会などの折りに控室として使われるべく設置されただろう四方に備えられた部屋の内、学内を取り囲むようにある径みちに面したところにあるそれが、剣の会が占領している部屋だった。南に面した窓からは陽がふんだんに降りそそぐ、一等地を占めるのは、数ある武でならした集団の内でも、今一番勢いがあるという証明だ。

いつもの顔触れが屯しているが、その中に当然いつもいる顔が三つも無い。いつものような賑やかさは消え、誰もが押し黙る沈黙に堪えかねたのだろうキリアンの頭にそつと大きな掌が乗せられた。

「落ち着け。キリー。お前がここで机を壊しても、何も事態は変わらない」

太くやわらかな声はガイア・デュカス。『剣の会』などという穏やかでない名前の集まりの要かなめである。デュカスはそのまま大きな掌で宥なだめるようにキリアンの頭を撫でた。子供扱いするのは勘弁してくれというようにキリアンが首を振ってその掌を嫌った。

「だってそうでしょう？ 名前入りのスカーフ？ ふざけるなっと思いませんか？ どのどいつが『私がやりました』看板付けたまま、

殺した女を運河なんかに放り込むっていうんです？　どこの間抜けだってそんなことやりやしない。よりによって頭が回り過ぎるのが難点みたいなあの兄貴ですよ。カイさんだって、馬術と古典文学の成績だけはいただけじゃないけど、文武両道に抜きこんでいる人だ。あの二人がやったなら、ミアー又ちゃんは行方不明が良いところですよ。あんな風に見つけてくださいって、捨てられてること自体が、あの二人でない証拠でしょ？」

デユカスが頷いた。

「問題は、カイとエアが犯人だってことじゃない。あの二人がやったなら、もつとスマートな犯罪になつてるといふのは俺たちには、キリーに今更言われなくても分かりきっている事だ。あの日は、夏至祭で門限が無い唯一の日だから校内に居なかった奴の方が多いから、エアがどこにいたか証明できないのが辛ところだな。そんなことより、なにより、エアのスカーフがミアー又ちゃんを殺したのだとしても、奴はあれを持っていなかったんだ。つまり奴には使えようが無かった。証拠とされてる奴のスカーフは剣の会のメンバーにあるまじき事に、前の『合戦』の時に奪られちゃってる……。手元に無いスカーフじゃ頸は絞められない」

イサク王立学校は基本的に全寮制である。寮単位の自治会のような組織とは別に、同好の士同志で自主的に連帯している集まりが無数に存在する。皇太子兄こうたいしけいという妙な立場に置かれているサーシア・デル・ヴィランが所属する『数学府すうがくふ』のような智慧を磨くことを愛好する会もあれば、将棋やカードといったゲームの愛好会のようなものもある。もちろん、武道を通して友好を深めると謳う『朋友会ほうゆうかい』や、ここに集う面々が結成している『剣の会』など武張った連中が屯たむろすものもある。

デユカスがいった合戦とは、武を愛好する会対抗の親睦会のようなもので、スカーフを首くびに見立てて奪い合うことで勝敗を決する一種のイベントである。どこかの会が『合戦だ』と宣言して誰かのス

カーフを手始めに奪えばゲームが始まる。血の気の多い若者たちが自主的に行っている瀉血しゃけつのようなもので、当然荒っぽい展開になる。

デユカスたち中心にいる者たちだけで秘していたが、肉弾戦に弱いというか、剣の扱いにからきし素養が無いにもかかわらず『剣の会』に堂々と所属している変わり種のエアリア・ロキメンは、つい先だての合戦に於いてスカーフを奪われるという失態を演じていた。年度始めに所属寮が決まってから支給されるスカーフは、イサク王立学校の正装には必須の小物であり、正装での参加を求められる朔ついたちの朝会にスカーフ無しで参加するのは当然叱責の対象になる。もちろん、それが無いというのは恥でしかない。エアリア・ロキメンは、参謀という会創設以来のけったいな待遇で、剣をまるで良くしないにもかかわらず、構成員となっている。彼が武に拙いつたなのは周知であるが、そうであっても所属している以上、首を盗られたというのは『剣の会』の沽券にかかわってくる。

参謀がやられるような守りしか敷けなかったというのは、デユカスにしてみれば我が身の落ち度であるし、剣の会もたいしたことはないと噂がたつのは業腹である。幹部としては、会員にすら秘して来月の朔朝会までにエアリア・ロキメンのスカーフをなんとかして奪回するべく計画していた最中であつた。エアリアがかのスカーフを持っていなかったのは明白なのだ。

「まったく、兄貴のやつ、スカーフ盗られてたんですか？　いくら頭しか武器になるものがないって言つたつて、剣の会の看板背負つて、そんな、情けない……」

言いかけながら思い至つたのか、キリアン・ロキメンが嬉しそうに顔を輝かせた。

「じゃ、兄貴のスカーフを盗つた奴の中に犯人がいるってことじゃないですか。デユカス先輩。盗つた奴を締め上げて吐かせて、国王に訴えればいいんじゃないか」

苦々しげにデユカスが首を振つた。

「だから、もはやそんな単純な話じゃないと言っているんだ。キリ」

「兄貴はスカーフを持っていなかったんですよ。あれを盗られるのは恥ずべき事だけど今回は盗られていてよかったんだ。それが証明できれば処分を撤回していただける」

「だから……キリ」。国王が……決断なさった。その事が致命的なんだ。あの方はご自分が一度された決断は、決して覆くつがえされない。エアリアの国外追放と、カイの断首は決定事項なんだ。このあとどんな証拠を出したところで、それは王のところまで届かない」

エアリア、キリアンという兄弟を生み出したロキメン家と同じく、五大家と呼ばれる伝統ある家柄に生まれ育ったデュカスの言葉は重く低く響きわたった。

「……でも……でも、デュカス先輩は、兄貴はやってない……って……」

往生際悪く繰り返したキリアンの瞳にうつすらと涙が滲んでいた。現実を把握することが何よりも必要という信念を持っているデュカスは、僅かに首を振った。

「だから、やってなくても何でも、国王がそう命ぜられた以上、カイは死ななければならないんだ。俺は……カイの首が落ちるところなんぞ、絶対に見たくない。エアは……まだいい。国外追放だ。どれほどの汚名が生涯付きまತ್ತたところで命があればやり直すことはできる。死んでしまったら……おしまいだ。……それにしても」

そう言いながら、年には全く似合わないが、その態度には大いに合っている重々しい所作で腕組みをすると、のっそりと付け加えた。「テオの妹のミアーヌちゃんが、セハヌーで浮かんでいるのを漁師に見つけられたのが二日前の朝。目撃者が出て、スカーフが証拠もくとなってエアとカイが捕縛されたのが、その日の午後。拘束と審議に一日……。今朝の処遇決定。カイが単独犯と目もくされてるなら分からんでもない話だが、ロキメンであって皇太子殿下の『影』のお役にあるエアが入っているにしちゃ……速過ぎる……」

キリアンがガクガクと震えはじめた。

「カイ……先輩は……何もしていないのに……死ぬのか？ この国に得るところがあると信じて、遙か南の国からここにきた学徒に、そんな非道を行うことが……許されるのか？ 顕かに非がない者の首を落として、この国に正義はあるのか？」

「それでも、ロキメンのお前には分かてるだろう？ この国に、イルデイス現国王陛下のお言葉に勝る正義は存在しない」

言う必要がないロキメンの名を出して、デユカスは止めを刺した。

「それでも……カイの首が落ちるところを……俺も見たくない」

聞き慣れた声がして扉が開く。そこにはこの僅か三日の間に憔悴しきった青年が瘦身を重い扉に預けるようにして立っていた。蒼白いこけた頬に、深く皺を刻んでしまった眉間という恐ろしく様変わりしたテオドール・カルラーラの姿だった。

「テオ。お前……学校に来て大丈夫なのか？」

氣遣ってデユカスが言うのに軽く頷き、テオドールはどこか覚束ない足どりですぐの出入り口に向かう。ここに浅く腰掛けて背中中日溜まりを背負っているのが彼の定位置だ。けれど、テオドールはそうせずに、いつもは自分が尻を乗せる場所に手について深く溜息をついた。

「俺は……もし犯人がカイとエアなら、俺は自分自身を百万遍だつて呪うしかない。あの二人と過ごした時間を……この六年を俺は全て失くしちゃう……」

テオドールが僅かに顔を上げた。温かい夏の日差しがその顔を照らした。北国のイサクでは、夏といえども灼熱の太陽に焼かれることは無い。

「妹の顔を見ていると……妹に危害を加えた奴を引き裂かねば済まないと思う。だけど、あいつら二人の顔が思い浮かぶと……怒りだつて萎えちゃう」

「テオ先輩」

キリアンが決然とした表情で窓際に歩み寄り、その背中に対峙した。

「兄さんには……」

ふっとテオドルが振り返った。そのやつれきった顔は、キリアンの予測に反して穏やかに微笑んでいた。

「できない。だろ？」

兄エアリア・ロキメンの手に彼のスカーフはなかったのだと言うとしていたキリアンは言葉を続けることができず、ただテオドルの言葉を肯定して頷いた。

「俺は考えたよ。なぜ妹が殺されなければならなかったのか。女は生きていてこそ価値がある。俺が言うのも可笑しいが、妹ほどの器量があつて、カルラーラの財布が漏れなくついてくるとしたら、普通の男は一度やったくらいで、果たして殺して捨てたりするだろうか？　むしろ手込めにして辱めたという事実を盾に父を脅してミア―ヌを妻にする方が美味しいのじゃないだろうか……。もしくは、金を巻き上げるとかね……」

テオドルはいつも広い視野で状況を把握し、理路整然とそれを分析できる。こんな中であつても、ただ妹の死を漫然と歎いていた訳では無いらしい。あの兄と言葉で互角にやりあえる数少ない男だけのことはある。

「ウチの制服を着た学生が、豪華なドレスを着た娘を無理やり馬車に連れ込んだのを見たとか言う証言だつて、奇怪しいだろう？　エアがロキメンの猪の紋章を付けてその辺の若い娘を馬車に連れ込んだなら、誰だつて黙っているしかない。五大家の紋を付けてる男が、ウチみたいに多少の金がうなつてるつてだけの平民の女を犯したつて、罪に問われる訳はない。けどな、制服を着てたならエアがロキメンだつて誰に分かる？　夏至祭で浮かれた学生が、どう見ても金持ちの娘に不埒なふるまいをしようとしていたら、謝礼を期待して娘を助ける方を普通は選ぶだろう。街中じゃ馬車だつてとばせる訳じゃない。別にあの二人と直接やり合わなくても、後をつけて『恐

れながら』と訴えるだけでいい」

その聡明な瞳が、大柄な体に似合わない涙が残っている瞳を瞬<sup>しばた</sup>かせながら一生懸命を体現しているキリアン・ロキメンを愛しそうに見つめた。

「問題は、その目撃者だ。黄昏時などというものはそうでなくても見間違いが起きやすい時間だ。エアとカイみたいなデコボコのカツプルだって、あいっただけじゃないだろう？　なぜ、どうして、あの二人だったと証言できたのか……」

「そうだ。その見たという連中をとっ捕まえて吐かせれば」  
キリアンは直ぐに腕力に任せた解決方法をとったがる。

それがまあ、可愛いといったら、可愛いんだが……。

エアリアの声がテオドールの耳の奥でもう一度穏やかに響きわたるようだった。テオドールも思う。一本気なキリアンが自分の弟だったら、自分もあんな風に語るに違いない。苦笑混じりに愛しさを込めて。

「無理だ。二人とも既に……喋れないから……な」

「どうということだ？」

二人に会話を任せていたデュカスが、聞きとがめて口をはさんだ。「昨晚、彼等が行きつけの酒場で火事があった。もちろん不審火だよ。一番燃えてるのが客がいたフロアで、客の多数が刺し殺された拳<sup>たち</sup>句、燃やされている。質<sup>たち</sup>の悪い強盗事件だとして捜査が始まっている。多数出た哀れな焼死者の中に、二人とも含まれていたそうだな。不幸なことだね……。よりによって、このタイミングでだ。考えられることは、一つしかないだろう」

「一つ？」

いつもはそういう間拔けた答え方をしないデュカスのいらえに、



丁寧にテオドルが説明した。

「口封じ……」

その言葉に沈黙がおちた部屋の出窓にもう一度向かい、テオドルは続けた。

「それを知って、疑いが確信になった。証拠は無いし、妹を失って気が狂った上の妄想だと思ってくれても良い。妹を殺した奴が、エアとカイでないと、まず仮定する。今回の王がくだされた処分は、あの二人の未来を完全に摘むものだ。だったら考えれば良い。二人の将来が事実上消えることで、得をするのは誰か」

テオドルは窓の外を睨んでいるのか、それとも見えていない何者かを見据えているのか、厳しい表情のまま語り続けるのを止めなかった。

「カイは……取り敢えず問題外だ。奴は、遠いチエヌス沿岸諸国のなんたら元首国とやらでは、そこそこの家柄の子息かもしれんが、国王の裁断が必要になるほどの事件まで起こして陥れる必要があるほど、この国で重要人物ではない。自ずとターゲットは一つに絞られる。エアの失脚……」

キリアンがその豪華な金髪と、胸板が厚く見事な体軀に似合わない、迷子のような表情を浮かべて、助けを求めるように部屋に集った面々に視線を泳がせた。

「兄貴……は、既に『影』に召しあげられることで、ロキメンの長子として当然得るべき権利を……俺に奪われている。この部屋に居る時間と、授業を受けている時間以外の全てを……皇太子殿下に……奪われている。『影』として勤め続ける以上、妻帯も許されず、私財の確保も許されていない。あの人の将来は……もう、奪われ尽くされて、跡形もなく踏みにじられちまつて……この上、誰が何を奪いたいって、いうんです？」

「だから、一つだよ。ロキメンと……皇太子殿下の繋がりを完全に

絶つこと。殿下から全ての後ろ楯に成り得るものを排除することが、おそらく今回ミアーヌに死をもたらした原因で間違いないと……俺は思う。この事件を仕掛けた奴が徹底的に奪いたいものは、ミアーヌの命でも、エアリアの権利でもない。皇太子殿下の将来へ繋がる全てだ」

テオドールの口調は、どこか哀惜を帯びて淡々としていた。

「陛下は、ご聡明な兄君殿下をことのほか大切になされている。元正妃でいらしたローレシア様への御寵愛も、久しく変わらずにあらせられる。あの皇太子殿下ではなく、兄君殿下にマーシヨをと望まれるのは自然な事なのだろう」

「ミアーヌちゃんを殺して……、カイ先輩の首を落として、兄貴をこの国から追い出して、そこまでしなくても、皇太子殿下の将来なんかとも無いじゃないか」

キリアンは皇太子殿下ウィルディーンと、この王立学校で同室になっている。そこにはきつと執拗なまでの皇太后タチアナの意向というものがあるに違いない。だが、ウィルディーンその人は、狷介でとっつきにくく、癪癪持ちで、キリアンが親和感情を寄せるには全く値しない少年だった。

気に入らない事があると予告もなしに手当たり次第にモノを回りにいる人間にぶつけてくる。たしかにイサク王立学校の校訓は言う。『学舎の内に身分は存在しない』と。けれどそれを鵜呑みにして皇太子を殴り返す馬鹿がいるだろうか。反撃を自らの名前が封じていることも気付かないほど愚鈍であれば、周囲が言うように聡明なサーシア・デル・ヴィランが国を治めていく方が、ましな世の中になるに違いない。

サーシア・デル・ヴィランと対抗すべく、学業などで見るべきものがあれば救いがあるのだが、文の方も武の方もさっぱりというお

粗末さで、キリアンにとっては見るのも汚らわしい許しがたい存在だった。

何よりも苛立たしいのは、武の方は色々な意味で濃淡があるから、一概に使い手と表現するには難があるものの、文の方というより言語能力に抜kindでた才を持ち、誰からも一目おかれる兄エアリア・ロキメンが、そんなウィルディーンに這いつくばるほどの愚かさで尽くしている事実だった。ウィルディーンがするどんな不始末も黙って尻拭いをし、どれほどの癩癩も正面から受け止め、恐ろしいほどの忍耐力で微笑みを絶やさない。忠誠を誓う相手が、サーシア・デル・ヴィランの半分ほど器量のある男であればいいものを、ウィルディーンは卑小すぎる。あんな子供に平伏しているエアリアを目にする事は、この上ない苦痛だった。

「しかしな、エアが……付いていれば、皇太子殿下は、そこまでのボロを出さないで大過なくいける。キリアン、お前に言うのは酷だが、お前の父上は……とてもお人が宜しい方だから、ギース・マニと比べて遥かに御しやすい。才氣溢れるエアが殿下のボロを隠してくださるなら、ロキメンが後ろ楯ある、ある程度愚かな皇太子殿下の方が、やはり才氣煥発な兄君殿下より扱いやすい……と考える輩が出てくるのは時間の問題だ。エアが王立学校（こく）を出て本格的に『影』として動きはじめてしまえば、やはり侮れないだけの人間は自ずと集まってしまうだろう。あいつの『人たらし』ときたら……既に芸に近いからなあ。そうなる前に……エアを殿下から遠ざけようというのは……。殿下を孤立させ続けたいと願っているのは、兄君殿下の母君ローレシア殿が、その祖父にあたるギース・マニが、おそらく陛下ご自身……」

「あんな奴を……」

キリアンが拳をギリギリと握り込んだ。

「あんな奴を……そんなに手をかけてまで疎んじる暇があつたら、さつさと廃太子でもして、兄君殿下にアル・マーシヨをくれてやればいいじゃないか」

テオドルがそんなキリアンを慰める様に続けた。

「陛下が本当に恐れてらっしゃるのは、未だにマヴァル王その人だけだ……ということだろう。あの方がもう少し老いばれてくださっていれば、妹は殺されることはなかった。俺は、殿下を恨むことはできない。エアに毒されているって嗤ってくれて構わない。全てを奪い尽くされているのは殿下だ。エアはいつも、あの方が多少扱いにくいのも、あの方が望んでそうされているのではなく、あの方がそうせざるを得ない様な境地に追い込んでいる周囲の所為でしょう……と、殿下を愚かと笑う人は、真実が何も見えていない……と、そう言っていた。だから俺が憎むのは……」

キリアンは眼からウロコが落ちる心地がした。影としての当然の義務として、愚かで救いようがないウィルデーンに、卑屈に媚びへつらっているのが、兄の武術のお粗末さと並ぶ大きな欠点だと思っていた。けれど、兄は、全てをしつかりと把握した上で、そうせざるを得ないほどに幼い皇太子殿下を愛しんで……いたのだろうか。兄は自分より二つ年長であるに過ぎない。自分から家族を取りあげられ、全ての将来を一人皇太子殿下に捧げることを強制された上で、尚もその人を愛せると言うのだろうか。分らない。

「テオ……。お前は、なぜ、今日ここに来たんだ？ そんな風に殿下を庇うためなんかじゃないだろう？」

デユカスがテオドルの話の腰を折った。思い出したというように、テオドルが一同を見渡した。『剣の会』を名乗るだけ有つて腕に自信があることを隠そうとしてもしていない、猛者たちのたくましい顔が並んでいる。その顔が穏やかなものからきつく引き絞られたものに変わった。

「最初に言っただでしょう。デュー。俺は、カイの首が落ちるところ

なんぞ、見たくない。エアは取り敢えず後回しだ。奴の命は今のところ安堵されている。だから……急がなくちゃならないのは、カいの救出」

デュカスが大きく目を見開いた。

「カいの……救出？」

テオドールが頷いて周囲を見渡した。

「剣の会は……仲間を見捨てない。剣の会は仲間のために命をかけることができる。剣の会は、危険を闇雲に恐れない……そうだったろう？ デュー」

「俺もカいの為なら命をかけて悔いはない。が、何ができるって言うんだ。牢破りでもしようって言うのか？」

そのデュカスの言葉に受けたようにテオドールが少し声を立てて笑ってから首を振った。

「牢破りは俺たちの手には余る。場所は分かっているが中が全く分からない。が、明朝の処刑は公開だそうだ。俺には遺族の当然の権利として……、カいを鞭打って辱めることが……許されている。そして、俺の友人であれば、柵の中に入って、憎き犯人に石を投げることができる。カいに……近寄れるチャンスはそこだけだ」

デュカスの顔が一瞬明るく輝いた。

「確かに、近寄ることはできる。そこで、どうする？」

「エアは嚴重に動向が監視されるだろうが、たかが留学生のカいの処刑はもちろん、エアが犯した恥ずべき非道は、平民であつたら死罪に当たるほど重いのだということを領民に印象付けるためだけの生贄だろう。特にカいは外国人だ。助けがはいるなどとこれっぽっちも疑っていないはず。つまり、それほどの嚴重な警戒はされていないと見て間違いない。だから皆で暴れれば、カいを奪い返すことは十分可能はずだ。馬を手配して待機させ……カイを守りながら一番近いマヴァル国境の真玉関しんぎょかんに向かって走る。カイごときを捉えるのに関所が封鎖されるものかどうかまでは分からないが、その指令をもっていく伝令より早く駆け抜ければいいだけの話だ。国境を

越えさせれば、陛下が恐れるマヴァルにまで追手をかけるほどの労を、たかがカイに対してとらないとみて間違いが無い。陛下のご機嫌が宜しくなければ一年くらいは檻に入れられるかもしれないが、騒ぎを起こすとき死人さえ出さないよう気をつければ、そこまでの罪には問われないだろう。仲間を守るために若者が愚かなふるまいをするのは、別に珍しいことじゃない」

デユカスが立ち上がって鞘から剣を抜きはなつた。

「独りでも、俺は行こう。カイの命が助かるなら……」

その行動に促され、力をようやくとりもどしたというように、一人一人がデユカスに倣<sup>なま</sup>ってそれぞれの得物を捧げる礼をとった。デユカスは頷いて微笑んだ。

「仲間は多い方が良いが、今回は身分が平民であるものと外国人は抜けてもらう」

その差別的な響きを帯びた言葉に、盛り上がっていた顔から失望をあからさまに示す声があがった。それをデユカスは鞘に剣を戻しながら制した。

「俺は別に平民の身分のものは頼りにならないとか、ガイジンは嫌いだとか言ってる訳じゃない。俺たちが喧嘩をふっかけるのは……テオが正しいなら、陛下とマニ家ということになる。俺はデユカスだ。キリーお前はロキメンを背負っている。あとはそうだな、ミカエル、お前と、アルフォンス……」

デユカスの指が五大家と言われるまでの力はないが、名の通った貴族の家柄を好と好まざるにかかわらず背負って生きていかざるを得ない人間を指していく。

「あとは……セナ。この位までがギリギリだな……」

「デュー。何を言っている？」

「処刑執行人と、警備人が万一命にかかわるような怪我をしたとき、咎めがこないラインだよ。テオ。お前が思い出させてくれたんだろ。危険を闇雲に恐れない。これは我が校の校訓でもあるが、つまり闇

雲に恐れはいけないということで、危険に配慮するなという愚かを推奨している訳じゃない。カイを逃がしておきながら、殊勝に追手に捕まることで罰を軽くする計画なら、陛下といえど気軽に断罪できない身分が保険になる。イサク貴族という免罪符がない者は悔しいだろうが堪えてくれ。俺はカイの首が落ちるのを見たくないのと同じくらい、お前たちの首が落ちるところも見たくない」

テオドールが俄然抗議する。

「俺はいく。俺は……発案者だ。行く権利がある」

デュカスが慕われるのは、強いと同じくらい細やかで優しい配慮がきくからだ。キリアンがテオドールの同行に口添えしようとするのをさせず、首を振った。

「テオ。今日はミアー又ちゃんの事でつらいだろうに、カイのために来てくれて本当にありがたいと思っている。けどな、お父上とお母上殿には、ミアー又ちゃんのためにも恨む相手が必要だ。お前がミアー又ちゃんを殺した者を助けようとして縛ってしまったら、お二人の地獄はどれほど深く辛いものになるか、分かるはずだ。妹の命より悪友を庇おうとするお前に絶望するだろう。それに真実を告げることはもつと残酷だ。魅力的な娘が、五体家の愚かな若様の毒牙にかかって儚い命を散らしたという方が、陛下とマ二家に口キメンが邪魔だったからなどという雲の上の勢力争いで、無実の男を陥れるために……、おそらく取るに足らない報酬をもらって酒場で火に焼かれるような、真正正銘のならず者に凌辱されたなんて事実より、ずっとマシだろう……。エアとカイには……申し訳ないことだが……」

テオドールの瞳に、じんわりと涙が浮かんできた。

「……俺のミアー又は……そんな、酷い最後を遂げた……んだ……な」

やつれた面を感じさせない、いつもの聡明さを余すことなく発揮していたテオドールの瞳から、誰も見たことが無いほど大量の涙がどつと溢れて、足元も覚束なくなるほど体を震わせる。デュカスは

ゆつくりとテオドールの肩を引き寄せて抱きしめた。

「怖かった……だろう……。悔しかった……。痛かった……だろう」

デユカスはテオドールの背中をゆつくりと二度ほど叩いてから、そのテオドールの体をソファに導いて休むように座らせた。

「あいつは……、妹は……、カイに惚れてた……。あいつに憧れて……、いつか奴の国に、南の港町に行きたいと……夢みたいなことを、ほざいてた。オヤジの船に乗って、オウムを見に行くんだ……。カイの故国を納めている君主殿は……なんと……光り輝くばかりに美しい女性なのだ……。と。真珠を散らしたドレスを華やかに着こなす、かの国の女元首を……。一目見たいんだと……。女の元首なんてブサイクにきまつてるのに、カイの軽口はなんでも額面通りに信じて……。ほんとに馬鹿丸だしに信じて……。懂れて……。いた。見たことが無い果実をたわわにしならせた木がある庭で……。クジヤクが羽を広げているのを……。見たいんだ……。って。筆跡も……。知らないくせに。カイの奴が凶悪に汚い字しか書けないって、綴りだって無茶苦茶いい加減だって……。そんなことも知らない癖に……。夏至祭の日越えを花のような貴方と……。なんて、綺麗で上手すぎる手紙なんかに……。騙されて……。馬鹿な奴。カイに恋文なんて芸当ができる訳がない……」

夏至祭の夜が深まり、その日付が変わるとき、恋する人と接吻をする……二人は必ず婚姻の絆で結ばれる。取るに足らない、愚かな言い伝え。男が目当ての女を口説くため、初な乙女に甘いお菓子をチラつかせるように使う為の、下らない伝説。そんな言い伝えをカイが知るはずが無いのに。カイの筆跡とは似てもつかぬ美しい文字で認められた手紙をミアヌの文机の小箱に見つけたときの悔しさ、今更のようにテオドールの心を刺した。妹は騙されているとも知らないで、カイと約束の接吻を交わす夢を見て、独りで家を抜け出したのだ。小間使いもつれず。たったひとりで。



＊　　＼　＊　　＼　＊　　＼　＊　　＼　＊　　＼　＊　　＼　＊　　＼  
＊　　＼

夏至祭の日越えを花のような貴方と過ごしたい

その高き門からその足を私の所に運ばせてください

貴方がそうしてくれたら、恋する僕は、きっと貴方を見つけます

ああ、貴方が、その高き門から、一歩でも出てきてくれたなら

美しき君　　愚かな願いを叶え給え

カイ・ユリウス

　　＊　　＼　＊　　＼　＊　　＼　＊　　＼　＊　　＼　＊　　＼　＊　　＼  
＊　　＼

日越えなんて言葉をカイは知らない。あいつは手紙にだって『私』なんて書かない。それに……奴は……署名には絶対に名前から書くなんてこの国のやりかたをとることは無い。どう読むのかも分からないのだったような彼の母国の字で、ユーレリアス・カイサリオンとかいう発音に従って綴るのが普通だ。よしんば、この国の文字を使ったところで同じこと。必ず姓の方のユリウスから綴っていく。ユリウス・カイと。

カイ・ユリウスじゃ、他人の名前みたいでケツが落ち着かないとか嘯きながら。名簿がそうなっていて教師がいくらそう呼ぼうと、試験の答案用紙にはかならずユリウスから。狭量な教師からそれで減点を喰らおうとも頑なに。

夏至祭に浮かれる通りからは華やかな音楽が絶え間なく流れていただろう。カイに会えるかもしれないという喜びに胸をときめかせ

ながら、ミアー又は念入りにドレスを選んだのだろう。金糸で細かい刺繍が施されたあのドレスは、誕生日にミアー又は彼女には殊更に甘い父親にねだって特別に仕立てさせたものだ。幼い少女の精一杯の背伸び。その少女の一途さが滑稽だといって誰が笑えるだろう。暗闇に引きずり込まれ自由を奪われ、犯され、縊り殺されるまで、どれほど恐怖の時間を味わったのだろう。貞節のために舌を噛み切るほどの度胸も、あの小さな胸にはなかったに違いない。

その時間をきつとミアー又は、カイの助けを切実に欲していただろう。カイの名を虚しく呼び続ける妹の声が聞こえてくるようだ。その妹が求めていた男を、父母の怒りの捌け口として差し出すことが、ミアー又はの魂を安らがせるとはとも思えない。カイに濡れ衣を着せたままではミアー又はが誰よりも怒るだろう。けれどデュカスが言う通り、両親にしてみればそんな救いようがない現実よりエアリアやカイに弄ばれたというほうがマシに違いない。

狡い考え方だが、陛下が内心でどこかにカルラーラに負い目を感じているほうが、真実を俎板にのせるより余程安全だ。表立っての謝罪が得られない替わりに、陛下もマニも、そしてロキメンもカルラーラを引き立てるに違いない。償いのために。

焼き殺されたならず者には、カルラーラに仕事をまわすほどの器量すらない。カルラーラほどの商人になれば、使っている人間の数は膨大である。カルラーラを継ぐということは、その人たちの生活にも責を負っていくということだ。

真実に気付いているということを、この茶番劇を仕掛けた者が知れば、カルラーラなぞひとたまりもない。テオドールは唇をギリと噛みしめて涙を塞ぎ止めた。エアリア、カイ……許せ。

「……デュカス、恩に着る。一生をかけて、カルラーラはお主に……」

テオドールが言いかけたが、デュカスはゆっくりと首を振って穏やかに微笑み、続けることを阻んだ。

「一生などと……気軽に口にするな。できるか分からないことは、約束しないというのも、剣の会の鉄則だ……」

テオドルは口の端でいつものように笑おうとして見事に失敗した。僅かに震えるだけでちっとも定まらない。けれど中途半端な情けない表情とは違い、心の中は生涯をかけてデユカスに酬いていくという確固とした決意で引き締まっていた。

### 第三章 キリアン・ロキメンの記憶

命懸けで刑場からユリウス・カイを助け出そうと悲愴な決意をした剣の会の面々は、彼らの溜まり場である屋内闘技場の南控室で深更こようを迎えようとしていた。イサクでは人死に出たとき、埋葬までの日々を、生前を偲なびその亡骸なきがらに親交のあった者たちが付き添うのが習わしである。亡き人、ミアーヌは経済に余裕がある豪商カルラーの一人娘であるから、貴人の殯もがりほどには大袈裟にはないにせよ、その死出の旅を飾るのに、両親は出費を惜しまいに違いない。かの人は豪華絢爛たる花々に彩られて横たわり、雇われた多くの泣き女たちが悶えんばかりにして泣き続けているだろう。

そんな哀しみの場へと戻って行ったテオドールの姿が部屋から消えると、あとに残された青年たちは、深い悲しみ溜息とともに抱えるしかないやり場のない怒りと共に、白々と闇に沈むことのない夏の夜をただ過すごすに任せるしかなかった。

ユリウス・カイを助け出した後、どう行動するか。カイに投げられるはずの礫つぶてをいかに無力化できるのか。果たして、カイがそうでなくても不得手の馬をかって、国境までの長い道程を一気に駆け抜けることができるのか。考えるほどに不安ばかりがガイア・デュカスの胸を過よぎっていった。しかし、万全を期するほどの時間も余裕もない。ただ、たった一つ残された可能性に賭けるだけなのだ。

少し眠っておくべきだろうと、自身が行動班に選び、部屋に残した皆に言い含めたのだが、体を休める体勢をとってはいても誰一人として眠れてなどいないということは分かっていた。けれど、寝たふりだけであろうとも、体を横たえていることは疲れを多少なりとも癒してくれるはずだ。

その時 ユリウス・カイを助けるために、後回しにしてしまったエアリア・ロキメンのことがふいにデュカスの胸を突いた。死を不当に賜ってしまった友を助けることが最優先課題というのは『剣

の会』の頭としてはまちがっていない筈だ。だが、たった一人だけは、彼を後回しにしてはいけなかったことを思い出したのだ。

「キリー……」

その言葉を発すれば、張りつめた神経が妨げたとにしても、時間と共に訪れてくれるかもしれない皆の眠りを邪魔するだろうことは分かったが、デュカスはそう口にせざるを得なかった。

「……なんですか？ デュー先輩」

沈黙の中、皆の注意が自分に集中しているのがデュカスには分かった。

「お前は……やはり、先に馬を使って、真玉関を目指した方がいい……いまからでも、行け」

「なぜですか？ 俺はロキメンだし、人手は一つでも多い方がいいでしょう？ 乗り継ぎの馬の手配とか、カイ先輩の旅支度なんかは……、行ってくれているミホールたちに任せておいて充分だと思います」

キリアンの口調が尖ったものになった。

「カイを逃がす手筈を整えるのは……ミホールたちに任せておけばいい。第一、お前みたいな、細かいことに気付かない奴なんかが今更行っても役に立つはずもあるまい？ 俺が心配しているのは……エアリアだ。やつは今頃たった一人で……国境を目指している筈だ」

「……兄貴？……」

忘れていた。キリアンの背中にどつと冷や汗が出てきた。

夏とはいえ、この辺りの夜は冷える。その中を馬を走らせている孤影が、キリアンの目の前に突如として現れた気がした。

ミアーヌ・カルラーラを殺害した罪で拘束されて二日、碌に休息などとれている筈もない。だというのに明後日の夜明けまでにこの国から立ち去れば、お構いなし。国内に留まっていた場合は永年禁

固。それが兄、エアリア・ロキメンに下された裁きだった。裁きの場に同席した父は、赦しがたい罪を犯したとして兄を罵倒し、しらを切りつづける厚顔に怒りを爆発させ、そして下された国外追放という温情には感謝しつつも、床に額を擦りつけてカイ・ユリウスと同等の死を賜るようにと訴えたという。一度下した決定は覆さないという国王イルディスが、それを受け入れることは無かったが、目の前で己の死を願う父を見て、あの兄は何を思っただろうか。ロキメン家の長子に生まれたにもかかわらず、兄は『影』として捧げられてしまった。その時、一度捨てられたも同然だというのに、それだけで足りず、父は兄の死を願ったのだ。

一方的な情報のみ信じて罪人とされる者の死を願うというのは、人としても赦されないが、ましてや息子なのだ。父としてならば決してあつてはならないことだ。全ての証拠が揃い、誰もが兄の罪を糾弾したとしても、それを庇う愚かさがあるのが、肉親としての甲斐性というものではないだろうか。兄、エアリア・ロキメンという男がどれほどの存在か知りもせず……。

その時、ふと、嘘寒くキリアンは思った。自分もここで、この学校で、この剣の会で兄を直接知る機会が無かったとしたら、父と一緒に兄を糾弾していただろうか。兄の行いを羞じて、怒りに震えたのだろうか。

ここに来るまで、キリアンにとって、エアリア・ロキメンという存在は、いつも胸を押さえつけてくるように重いものだった。彼を理解することも、愛することも、ましてや誇りに思う日が来ることも、キリアンには思いも寄らないことだった。全てを手にする権利を持っていた長子を差し置いて、不当にロキメンの嫡子ちやくしであることは、キリアンにとって堪えがたい苦痛だった。

\* \* \*

うつすらとキリアン・ロキメンには覚えている風景がある。半狂乱になって父に食らい付き、エアリアを行かせまいとする母と、母の手に必至に縋り付く幼い日の兄。その幼子は悲鳴のような泣き声をたてている。父が母を殴る。知らぬ異国の言葉で罵り喚く母。

それまで穏やかだったキリアンの世界が一変した。父を初めて憎んだ。兄の泣き声を押し込んで走り去っていく馬車。血を滴らせたように紅い夕日。

母はその夜、兄の服を抱きしめて泣きつづけた。キリアンがその背をどれほど撫でても、その嗚咽は容易に止まる事はなかった。キリアンが諦めかけたとき、母はふいに彼をあのたくましい胸に……絞め殺されるのではないかと恐怖が過るほどの強さで抱きとった。ごく幼い日の記憶は入り組み乱れ、正確に想起することは不可能だが、あの怖いほど紅い夕日と、恐ろしかった母の力と、幼いエアリアの絶叫を飲み込んだ馬車が走り去る音は、決してキリアンの中で消えることが無い。

長ずるまで、なぜ、兄が夕暮れの中で黒々と見えた馬車で連れて行かれたのか、キリアンには見当もついていなかった。今も、全ての経緯を明快に理解している訳ではない。が、全てはこの国の悪しき、そして素晴らしく有効な制度『影』というものを知らなければならぬ。その概要を知ったとき、その過酷さに、キリアンは震えた。そして、その頃は遠い存在となっていた兄の怨みを思い、真剣にそれを恐れた。

皇太子領マーシヨは概ね厳寒な、凍てつく大地に広がる森林で占められるイサクには珍しく、温暖な地域で、肥沃な畑地が広がり、イサクの食糧庫と呼ばれてるほど、自ずと富が約束された土地である。皇太子領としての歴史も古い。その名前にアル・マーシヨとたされて呼ばわれれば、その者は皇太子であるということで、現王イルデイスも若き頃は、イルデイス・アル・マーシヨと呼ばれていた。現王も時代に翻弄された半生を余儀なくされてきている。若くして父、先王ダナエ・アル・イサクが病に逝去した時、彼はまだ二十歳にも満たず、同腹、異腹の多くの同年代の弟妹があり、それぞれの後ろ楯を自認する勢力がせめぎ合い、国は乱れると思われた。ダナエと覇を競った隣国マヴァル王は壮年。まさに人生が盛り。イサクが乱れれば、当然の権利として国境を侵してくること必至であった。

そんな中、若いイルデイスは周囲が仰天する行動をとる。母を異にする弟妹全てを謀叛むほんの恐れありと肅清しゅくせいし、老獺ろうたけいな勢力者たちが担ぐ御輿みこしを壊滅させた。そして自身も五大家のマニと繋がるために娶めとっていた正妃のカレンを、婚姻の誓約書に不備があったと言いがかりをつけて離縁し、独身の若き王者として、イサクを狙う隣大国マヴァル王の息女を正妃として迎えたいと使者を走らせたのだ。脆くも瓦解し、隣国から攻め入られ、蹂躪の軍靴が響くことを懸念していた国民の戦火への恐怖を見事に取り除いたのだ。

弟妹を殺し、妻を捨て、異国の姫を娶ることはどう考えても、尋常な人の道において決して讃えられるべき行動ではないが、イルデイスは稀に見る名君として国民から喝采を浴びた。この時期から現王は一度口にしたことは徹底するという前例を作り上げ、それを曲げたことは無いと言われている。

しかし、イルデイスはマヴァルから嫁いできた輝くばかりに美しい乙女を正妃に祭り上げ、現皇太子であるウィルディーン・アル・



マーシヨを産ませたが、それで体裁を整えると、王都ザッティバールにほど近い穏やかな気候の場所にある離宮ローレシア、別名『花の宮殿』に、皇太子より二歳年長の息子とともに離縁したはずのカレン・マニを住まわせ、マーシヨ領に決してひけをとらない王領ヴィランを化粧領として与えた。

一層皮肉なことに、カレン・マニがもうけた男児サーシアは、髪の色、瞳の色、その秀でた目鼻たち、年に似合わぬ智慧の光を溢れさせる愛くるしい少年であり、誰もが認めるほどイルディスに似ていた。

比較して長年戦渦を交える間柄であるマヴァルの皇女が産んだ皇太子は、内心ではイルディスが蛇蝎たかつの如く嫌っている現マヴァル王その人を彷彿とさせる面差しをしていた。

住まいをとってローレシア殿と呼ばれるカレン・マニこそが実質の正妃であり、イルディスが盲愛しているのはカレンが産んだサーシア・デル・ヴィランであり、五大家の一つマニが変わらぬ忠誠をイルディスに捧げていることは、傍目はためにも顕あきかであった。名ばかりの正妃は首都ザッティバールの王宮に住みつづけてはいたが、最早イルディスが通うことも無い。ただ母国マヴァルの誇りをだけをたよりに、傲然と孤独な胸を張って敵国で生きている彼女のもとに、イルディスの不快を恐れることなく顔を出すのは、やはり政略結婚で前王に敵国から嫁ぎ、イルディスを生母皇太后タチアナのみであった。妖精宮と名付けられた御所に住むことでセレン殿と呼ばれる彼女は、前王がかのノキアの民を蹂躪した折りに、ノキア併呑へいどんの証として、あの王族の血筋を入れるために奪ってきた花嫁であった。

皇太子であり、その名にアル・マーシヨを付けて呼ばれるウィルデーンは、その身の回りの世話をするものには不自由していなかったが、彼を当然として愛するものは皆無だった。ファイルディスは生まれ落ちたその日に一目彼を見ただけでその容貌を嫌い、名付けの儀式と立太子式のときだけしか、息子の前には出なかった。

そして母も又、ウイルディーンに無関心だった。温暖な故国から北のイサクに嫁がされたという事実だけで十分なほど、彼女はイサクそのものを嫌っていた。三つも年下の年の若すぎる夫が、神に誓ったはずの妻を離縁しているということも、彼女にとっては剛腹だったにちがいない。結局彼女はごく順当に国王の妻としての当然の仕事として子を孕み、産むことこそはしたものの、一目で赤ん坊を嫌ったウイルディーンの父と同様、それを見ることも抱くことも拒絶した。女兒であれば、尚もイルディスと褥を共にしなければならないうところ、男であってくれたことだけが、この子がなした唯一の善行とまで言い放ったと、まことしやかに語られる。

母と同じ宮殿に住みながら、皇太子ウイルディーンは母に抱かれることも無く、父に顧みられることも無く成長した。普通であれば皇太子と繋がることは末の富貴への手形である。とりまきに不自由することは本来無いはずのウイルディーンを政略上必要とするものもなく、彼はほぼ生きている事以外の要求を他者からされることはなかった。欲しいものは全て手に入ったが、温かい手を当然として必要とする年にそれに恵まれることはなかった。

惜しみなく愛を注がれて、その才の煌きを放ち、誰からも囑望される皇太子兄サーシア・デル・ヴィラン。疎外され、無気力と癩癧のみを成長させるしかなかった、皇太子ウイルディーン・アル・マ―シヨ。

ここで再び皇太后タチアナが、二人の皇子の祖母として登場する。祖母という生き物の彼女にして見れば、孫は無条件に可愛いものだ。愛されることを当然として愛されるべく振る舞うサーシアを愛しく思うと、一方への不憫さもまた募る。

彼女は軍事の長としてイサクを守り、ついでに無骨一辺倒で政治力が皆無のロキメン家の当主、ダン・ロキメンに目をつける。彼が

損得に疎い性格であること、その妻が正妃と同じマヴァル人であること。長子がウィルディーンより二年年長で、次子も男児でウィルディーンと同じ年であること（忠義に篤いダン・ロキメンといえど、あの時点で男児が一人であったとしたらタチアナの申し入れを拒絶しただろう）。ロキメン家から皇太子の為に一人の子を召し上げるには全て都合がよかった。

イサク王族には『影』がある。その身边を世話し、その施策を扶け、命の全てを主に捧げるべく特種な教育を施され、生涯をその主に捧げることを義務づけられる存在である。普通、影となるものは、王族に連なる者が生まれた時に、二歳未満であるそれなりの血筋の子供がその教育機関であるラジェイラ家に預けられ、そこで徹底的に影としての教育を施される。影自身から全ての権利が剥奪される見返りに、影候補の子供をラジェイラ家に預けたものには相応の配慮がある。身分ばかりが高く、収入に乏しい家にとっては、子供を影にとられる事は貴重な財源が保証される事になる。

己の命より、忠節を捧げる主の命を大事にするという価値観を徹底的に刷り込まれる幼児の悲劇さえ除けば、誰にとっても上手いシステムである。エアリア・ロキメンがタチアナのたつての希望で『影』として召しあげられたのは五歳という年だった。その年では価値観はすでに出来上がっている。己より大切なものを作るといふ影の教育を受けはじめるとは致命的に遅い。ラジェイラ家は最初、皇太后の願いを拒否したという。しかし、タチアナは頑として譲らなかった。

普通ラジェイラ家で影として育てられる者たちは、だれがどう優秀に育つか、不肖のまま終わるか測れないため、ある程度長ずるまで、その光である主人には会うことがないらしい。けれど、兄は皇太后タチアナが、全てから見捨てられた不憫な孫にロキメンという飾りを与えるためにごり押ししたものである。最初から、お側付き

のような形で、マーシヨの皇太子宮にあがったという。穏やかなマーシヨで、誰にも顧みられることがない五歳と三歳の少年たちが、どのように育ったのかをキリアンには知る術がない。ただ、自分が過ごしてきたような温かく穏やかな日々では無かつたろうことだけを想像するのみだ。

あの夕暮れの馬車の車輪が軋む音が、時折キリアンの中で鮮やかに蘇る。今まで競うように兄と奪い合っていた母の胸が、己一人のものになった瞬間覚えた感情がある。その時のキリアンにそのような語彙を扱う力はなかったが、あの時の気持ちは勝利や独占できる喜びではなく、兄に対する罪悪感だった。妹が生まれ、母の腕が自分を抱きとるために伸ばされる事が激減したとき、何故かキリアンはホッとした。母を奪われた兄の寂しさを、少しでも自分が味わうことによって、少しだけ後ろめたさが割り引かれるような気がした。

十二歳になった時、名家の子弟の当然の選択として、キリアン・ロキメンはイサク王立学校の門をくぐった。創立者である三代王の理想を体現したとされる、世界に名を馳せているこの学校は、『学び』というものは『師』の下に謙虚であらねばならず、全ての身分は、『学びの門の内』では斟酌しやくさくされないという信念に基づいて伝統的に営まれている。平民や外国人と寝食を共にし、平等に交わることを嫌って、家庭教師を雇って素養を得させたり、私塾を好む向きもあるにはあったが、王家に生まれた男児はかならずイサク王立学校に学びを得る不文律がある所為で、王家の血筋のお側付きを虎視眈々と狙ったり、あわよくば学友として親交を深めようとするものはやはりこの学校を好んだ。

しかも、並び立つものがない磐石の現支配者の愛児と、隣国マヴアル王家の血筋をも受け継ぐ紛れもない皇太子と、王族どころか直

系の男児が二人もその学齢期にあつては、貴族という貴族がこぞつて王立学校に押し寄せているといつても過言でない。

入学許可の典の時、出自・家柄を誇らないことを誓わされ、教授陣への礼をとる。やはり十二歳であつた皇太子、ウィルディーン・アル・マーショも当然の如く同期生の顔触れの中にあつた。二歳年長の兄を上級生たちの中に見つけたときのことを、キリアンは鮮明に覚えている。思い出の中の幼子の姿ではもちろん無かつたが、その北国には珍しい夜色の髪と、同じような夜色の瞳。兄の顔たちはあまりにも自身の母によく似ていた。けれど、山野をこよなく愛し、よく鍛え上げた逞しい腕を持つている母とは比べ物にならないほど華奢な細い肩をしていた。手足がやたらとひよる長く感じられる年頃の少年たちの中にあつても、エアリアは一際ひととき纖細に、まるで陶器の人形のようにあり、見るものを落着かなくさせる何かがあつた。彼が無骨な男の匂いをさせはじめた青年たちの中にいると、まるで騎士たちに取り巻かれていた乙女のようにすら見えたものだ。大体、エアリアという名前が女のそれだ。

無骨なのだが、纖細なのだから、いま一つキリアンにも掴めていない、どこか普通とズレている父が溺愛した初子、生きていればエアリアとキリアン兄弟の姉に当たるその人が、天に召された朝に生まれたてしまつた所為で、兄はその名前を引き継がされてしまつたらしい。

夜を纖細に彩る三日月のように可憐な兄というものは、体を動かすことがなによりも好きで、自身も武人である母から、軍門であるロキメン家の跡継ぎとして相応しいよう日々鍛えられてきたキリアンにとって、反吐へどが出そうなほど厭いとわしかった。

身分によつて左右されない平等が謳われているものの、礼節や年功序列を重んじるイサク王立学校ではあるが、年功序列という学年の差が全てという露骨な上下関係が存在した。同じ派閥に入ったり、同じ学寮の部屋に当たるかでもない限り、上級生を知る機会は少

ない。

最初の頃キリアンには親しく交わることもない上級生の兄が、猛者が集まっている『剣の会』にいること自体が謎だった。第一、美人揃いで名高いコザの民であった母によく似た兄のその繊細に整いすぎた造作は、ただでさえ女と見紛うほどのだから、体格に勝る青年たちの中にこやかに微笑んでいる姿はとてつもなく違和感があり、異様に目立っていた。

キリアンとエアリアは似たところがまるで無い。その上、身分は関係ないという建前になつてはいても当然口キメンの跡取りであることは周知の事実だったから、同級生の誰もがキリアンに兄などというものが居ると思ってもいない。エアリアが彼の兄であると知る由もない同級生たちが、エアリアを後ろ指さして、きつと剣の会の『女』だと噂しても、それを否定することもできなかった。

第一、まず、キリアン自身がそれを疑っていた。イサクという国では、衆道は騎士たちにとって珍しくもない嗜好の一つだ。しかし、騎士たちが同性を愛するのは、女には分らない男の世界を共有できる同志であるからだ。戦で命を預けあう男たちの強烈な絆が彼らを別ち難く結びつける。もちろん、女性は子どもを産むものだから、家を繋ぐために神の前で婚姻を誓うことは、名家を背負って立つ男の義務であるが、心を預ける恋人は女性である必要は必ずしも無いというのが、イサク騎士の流儀である。エアリアが紛れもなく優れた男であり、剣の会の誰かと恋仲であるなら、キリアンにも納得いったのだが、精神的なことはさておいて、女日照りが日常の年頃の青年たちの生理的欲求の単なる捌け口では、あまりにも情け無い。勝手に誤解して、勝手に羞じて、勝手に忌み嫌っていた。

そしてあの『合戦』の日がきた。噂には聞いていたが、それでも

唐突に凄まじい嵐が起こったような混乱に肝を潰した。打ち鳴らされる太鼓の音。荒々しい時の声。刃を潰した剣や、木刀、棍棒などを振り回して雄叫びを上げる青年たち。

その時はまったく知らなかったが、新年度が始まって最初の合戦は、全ての武闘派集団が申し合わせて、各会派の新人狩りを目的に一斉に開始するものなのだ。普段の合戦よりも数段物々しく鳴り物が打ち鳴らされる。通称『奴隷狩り』と言われているその合戦の時、体格も良く、ロキメンの看板をひっさげているキリアンは、最初から色々な連中に狙われた。いちいち相手をしているときりがないので、逃げるが勝ちとばかりに上手く寄せ手をかわして、植え込みに身を潜めた。

キリアンはその大雑把な性格には似合わずに、気配を殺すことには長<sup>た</sup>けていた。必要に応じて気配の一切を消す事は、弓の名手であり、狩りが好きな母（それだけで、イサクの貴族階級の女たちとは決定的に違う）について幼少から森に出掛ける事が多く、自身も狩りに親しんできたキリアンには習い性ともいうべきものだった。

キリアンの母・タマラは、マヴァル王の娘にしてこの国の王イルデイスの正妃アンヘラのお側付き護衛の長をしていた剛の者である。母は、かつてマヴァル王がアンヘラに求婚し、マヴァル王の快諾を得て花嫁を迎えにかの国に赴いた折り、イルデイスの供をした父と恋に落ちたらしい。細かい経緯<sup>いきさつ</sup>はキリアンの知るところではないが、普通、皇女が他王室に嫁ぐとき、供回りの侍女はもちろん、装身具から小物一切に至るまで故国のものとは絶縁するのが習わしである。普通であれば赦されるはずが無い縁組であった。が、主従としてではなく、多感な年頃の娘同士という立場でタマラを愛していたアンヘラが、ダン・ロキメンとタマラのこと赦されないのであればイサクへは嫁がないと駄々を捏ねたことで、両国の王が不承不承<sup>ふしょうふしょう</sup>許さざるを得なかったらしい。当然タマラは、ロキメン家でも、イサク社交界でも歓迎されることは無かったが、陽気で堅苦しいことが大

嫌いな彼女もそれを幸いと煩わしい付き合いから逃れて、嫁いでくるなり皇太子領マーシヨに近いロキメン所有の莊園に引っ込んでしまった。

母・タマラは何事につけ自国が世界で一番だと信じて疑わない、傲慢ともいえるイサク<sup>かたぎ</sup>氣質<sup>いちじ</sup>が著しい父親、ダン・ロキメンが所有する唯一の外国産モノである。派手好きのイルデイス王が好むことで上流階級に流行している緋色のコザ織物には目もくれず、肩掛けから、タペストリー、イスカバーついでに玄関まわりに敷かれているマットさえ、高価ではあるがどこか素朴なロツシ織ばかり。貴婦人がたを虜にしているだけでなく、男たちにも人氣が高い南洋の真珠より、無骨な印象さえあるルーガ彫りで愛剣の柄<sup>つか</sup>を飾り、はるか東方にあるらしい大国で作られる、見事な絵が焼き付けられた陶磁器よりも、ぼつてりとした辰砂釉を用いた赤い陶器を好む。

普段は王都ザッティバーグの屋敷に住む父・ダンは、幼い日のキリアンには遠い存在だった。兄を手許から失った日に母を殴った印象ばかりが強い父のことを、どちらかというと嫌っていたように思う。

あの時、植え込みの陰で息をひそめていたキリアンの前に湧いて出た剣の会の面々は、スカーフを額に鉢巻きにして、それぞれの得物を携えていた。混乱の最中<sup>さなか</sup>でも、その大柄な体を柔軟に使いこなしながら、先頭に立って積極的に突っ込んでいくデュカスは、華やかに際立っていた。

今でこそ会を率いる強面<sup>こわもて</sup>のデュカスにも、あの時はまだ頭が上がない上級生が何人もいたはずだ。けれど、初めて目にした彼は、見事に会を中心にいるかにみえた。



「デュー」

端麗な容姿とはかけ離れた、ざらつくようにかすれた声が、そうデュカスと呼んだ。剣の会ではカイと呼ばれているカイ・ユリウスと紛らわしいため、ガイア・デュカスは仲間うちではその姓の方を親しみを込めて短く詰めて呼ばれていた。

「走りすぎだ。囷としてはお粗末すぎるよ。あと、左脇が詰まりすぎてるね。バランスが崩れている。早いとこ修正かけないと、痛めるよ」

その声の主が、兄、エアリアだった。

「どうも今日は上手く体重がのつてかないと思ったけど、こんな感じか？」

デュカスが基本姿勢を取り直すと、兄はその細い指をズイと伸ばして正しいデュカスの二の腕にはしらせ、肘をとって位置を直した。「ここまで。これ以上胴によっちゃうと受けたあとの衝撃を受け流せない。相手が非力だからって力で押さえつけるのは君ならできない相談じゃないけど、意外と負担になってるものだ。第一、次の動きに繋がりにくいだろう？」

確かに、僅かな違いだったが、キリアンが見てさえ、その後、空にむけて振り出したデュカスの一撃の切れ味は、それまでのデュカスのものとは違っていた。それからエアリアはデュカスから、別の青年に向きを変えた。

「ミカ……、君はデューの後方を詰めて位置を作れといったらう？ デューが走りすぎても、君ならついていける筈だ。『奴隷狩り』は『合戦』ほど厳しくないけど、だからといって手抜きをする言い訳にはならないね。もう少し気張れ。アル、君は敵と間合いが詰まると視野が狭くなる癖がなかなか抜けないね。背中がガラアキだったよ」

「そうだったか？」

アルフォンスが頓狂な声を上げると、エアリアはにっこり微笑ん

だ。

「デュー、アルに詰めて」

その一言で、デュカスのすべらかな撃がその青年に向かった。デユカスに負けない見事な体捌きで体を捻ったとき、その首もとに、エアリアが手刀を横薙ぎにつきつけた。なんとかバランスを保って踏みとどまるのが精一杯だった青年が少し顔を歪めた。

「ほら……ね。」

「デューをけしかけるのは……反則だとは思わないか？ エア」

「世の中には、デュー以上の化物だっているでしょ？ 私如きの手がそこまで届く事態は拙いと思うでしょ？ この手がそこに至った時点で……恥を知れて……感じかなあ」

「うーっ、剣の一つも持てないくせに、相変わらず口だけはだなあ」

あの兄が、剣の会の猛者たちの輪の中心に居た。その様子にも、的確な指摘にも、なによりアルと呼ばれた男の喉元に手刀を打ち込んだ手際のよさに驚いた。動きかたを見ていれば、そのものがどの程度にできるか位はキリアンにも分かる。兄は非力は間違いなさそうだが、だからといって剣の会に容姿で囲われている訳ではないらしい。

「そうそう、ロキメンの……キリアン欲しいですか？」

自分の中で兄をどう捉え直そうか戸惑っている時、己の名前がその口から飛び出した。

「ああ、あのお前と違って、幅もしっかりしてて、剣の会に名実ともに相応しそうな奴だよな。もちろん他のとこにとられるくらいなら欲しいぞ。けどなあ、なかなか隠れるのも上手いらしい。見つからないとどこの会派のやつもばやいてたぞ」

デユカスの応えに、兄は親指を立てて肩ごしにぴったりと自分が潜んでいる茂みを指さした。少なくとも自分は兄の視線すら感じていなかった。隠れるのが上手いということは、狩人なら獲物を、

狩られる獲物なら狩人そのものの視線を、対象より先に察知することができるということだ。つまり、ここから自分が見ていることに、エアリアは気付いていたということだ。背中に悪寒がはした。

「要るなら、あそこですよ。私は狩りは無理ですから……欲しいなら精々よろしく気張ってください」

兄の言葉が終わるまで待たず、剣の会の塊が茂みに攻め込んできた。団子相手なら複数にかかれても立ち会える自信はあったが、腕に覚えのある剣の会の精鋭集団相手では分が悪すぎる。キリアンは新人として（又の名を奴隸として）めでたく剣の会に狩られた。

あの日を境に、兄とは否応なしに関わってきた。剣の会という狭い社会に入ってみて驚いたことに、エアリアはあの時の主軸だった者たちからも、今の最高学年で会を仕切っている兄と同学年のデユカスたちからも格別に信頼が篤いようだった。

エアリアは、丁寧な言葉遣いをするが、辛辣な内容のものも平気でさらっと口にする。普通なら敵を山と築きそうなものだが、言い方に芸でも含まれているのか、それとも神の特別な恵みでもあるのか、言われた方が激怒するような状況には至らない。むしろ、彼の言葉に従う方がなにかと上手く行くことが多く、結果として感謝される。そんなささいな多くの感謝の積み重ねが、いつのまにか絶対的信頼を勝ち取っていくのだ。そんな様子を幾度と無く目にした。剣の会に狩られた同級生たちが、最初嘲っていたにも関わらず、いつの間にかエアリアに心酔していたり……といった事も幾度と無くあった。

キリアンにしても、自分を弟だと公言しないし、挨拶らしきものすらくれた覚えもないのに、身内の気軽さでズケズケものを言うエアリアに最初は不快だった筈なのだが、いつのまにか彼が兄がああいう存在であることに慣れていた。兄は砂糖をまぶした辛子みたい

な男だった。いつもにこにこ陽気な微笑みでまぶして、きつい言葉をさらつと吐き出す。その言葉をもらった本人が、無視することとできないのは、彼が見るべきものをいつもよく見た上で発言するからであり、そして、発されるのも実に絶妙なタイミングでなされるからだ

自信過剰な向きが屯している剣の会は、学内でも伝統ある集団であるが、かつてはさらに細かい派閥に分解して角付き合わせることも多く、他の会派との合戦で苦杯を飲むことも少なくなかったそう  
だ。けれど、エアリアが要の<sup>かなめ</sup>様に、あるいは<sup>にかわ</sup>膠の様に上手く機能して、今の剣の会は誰も文句をつけられないほどに強固な集団となっている。よく喋るわりに意外と聞き上手で、本人の悪口は堂々と言うがその場にはないものを貶めるような発言は決してしない。非力を補って余りある存在感があった。

デュカスが口癖のように言う。

エアの凄いところは眼。無くてもいいのは口。

\* \* \*

デュカスは、いつものゆっくりとしたいつもの口調で続いていた。

「エアも、馬一頭と簡単な旅装だけが赦されたのみで、殆ど何も持つことなく追い出されたと聞いている。奴が人たらしの口先男で充分にタフだったのは分かってるが、だからって一人、誰も彼も……  
ついでに自慢の弟にも誤解されたままだと誤解したまま……分かり

にくい表現だな……独りで国を追われていくなんて、理不尽だとは思わないか？ キリー」

キリアンはカイに気を取られてたとはいえ兄のことをすっかり忘れていた自分に、愕然となった。兄はたった一人で、全てを奪われて失意の内に国境を目指しているのだ。それに今、デユカスはなんと言った？ 自慢の……弟？

「お……俺を、兄貴が……なんですって？」

「自慢だよ。あいつは、お前のことをいつも自慢してたさ。曲がった道だつて真つ直ぐにしか歩けないほど不器用な奴だし、生きにくいだろうけど、すれて変わって欲しくないってな。風を切って歩くのを止めないで欲しいなって……いつもだ。なあ……、アル」

アルフォンスは同意して頷いた。

「お前……奴を嫌ってたろ。最初の頃」

躊躇いがちにだが、キリアンは頷いた。今更とりつくる必要があるな<sup>なげう</sup>いことだ。自分が兄を嫌っていたこと。そして、今は全てを抛つても構わないと思えるほどに心酔していること。兄という人を直接知ったら、殆どの人間は、簡単に魅せられてしまう。自分も例外ではなかった。そして、例外だった人間は……いつも必ず兄を徹底的に疎む。

「あの頃でも……やつは、お前をいつも見ていたよ。かわいくて堪らないって目でな。やつをあんな目にさせられんのは、学内広しといえど、お前だけだ」

いつも他の剣の会の後輩に対するのと差がない扱いでしか接してもらった覚えがない。それは、反発をどうしようもなく抱いていた頃も、心酔している今でも変わることがない。そんな目で見てもらった覚えはない。が、そういえば視線の殺し方は兄が一枚も二枚も上手だった。最初に狩られた時から知っていた。あの人はいつも俺をみていてくれたのだろうか。キリアンはもう一度目頭が熱くなるような気がしてきた。

デュカスがその心情を慮るかのよう<sup>おもんばか</sup>に、優しく頷いた。

「カイのことは上手くいくかは保証できかねるが、俺たちに任せてくれ。お前は、エアを追っていけ。せめて……お前だけでもやつを送ってやれ。ここからなら、俺たちがカイを逃そうとしているマヴアル方面が一番近い。奴も当然、真玉関を目指してるだろう。お前のヒューペリオンなら今からでも充分に追いつくだろう。明朝、向うで会おう」

キリアンは一つ頷いて、デュカスにはもう少し深く頭をさげてから、部屋を走り出ようとした。

その時。乱暴に扉が蹴破られる勢いで開いて、剣を携えた大人たちが、どやどやと部屋の中に押し入ってきた。広くもない部屋が、体を常に荒く使いこむのが生業の男たち特有のむっとする体臭で、瞬時に満たされた。

「全員。その場に。動くな」

峻烈な声が轟いて、その部屋に居た皆に強く動きを禁じた。続いて、その男が信じがたい言葉を口にした。

「カイ・ユリウスが、この会の者であつたというのは、調べがついている。仲間同士で庇い合うのは美しいことかもしれないが、諸君にも将来はある。速やかに差し出されるならば、罪には問われない」  
デュカスがそういった男を驚いた目で見つめてから、肩をわざと聳<sup>そび</sup>やかせた。

「我々が何を庇っていると言つのですか？」

「カイ・ユリウスをだ。おそれ多くも、卑怯にも、やつは陛下のご裁断を足蹴にして逃げた」

「カイが……、逃げた？」

「どうやったら、カイなんかに、この国の牢が破れるのだろうか、疑問がない訳でもないが、それでも顔が綻んできそうになる。カイ、やったな。俺たちが手出しをするまでもなく、お前は自力で逃げたのか？ 凄いぞ。」

「いつ？ どうやって？」

「諸君らに応える義務はない。それに君らが結託すれば、全く不可能という訳ではないだろう？」

デュカスはずんとわざとらしく、從容と首を垂れて言った。

「ここでは友の妹に降りかかった不慮の死を悼み、肉親を失った友のために夜を徹して祈っていたに過ぎない。そして、刑に服して罪を償うことで、もう一人の友が神に許されるようお願い、国を追われた友のこれからを案じていた。陛下のご裁断で、罪を償う機会を与えられた友に、逃亡の罪を重ねさせるほどに我々が愚かだと思われるなら、どうぞどこでもお探してください」

## 第四章 ユリウス・カイ

石が組み上げられた壁も、敷き詰められた床も冷たかった。暖かい南の故郷では、石の冷たさは涼をもたらし恵みであった。けれどこれから一年で一番暑い季節を迎える筈のこの時季にも関わらず、夜半から朝にかけての冷え込みは、若い柔軟な肉をも強ばらせ、逞しい骨をも軋ませた。

疲れは極限までたまっている筈だが、横になろうかという気にはなれなかった。この首の上に頭を乗せておけるのも、あと数時間らしい。あまりにバカバカしすぎて笑いそうになる。俺はこの国で子供から大人へと至る季節を過ごした。その総仕上げが断首とは如何なる冗談だろう。この国でのあの厳しい学びも、かけがえない友となった者たちとの深い親交も、ただ徒花を咲かせただけで、一つの実さえ付けず、一粒の種さえ残すことなく終わるのだというのか。

何のために？

鮮やかに記憶が蘇<sup>よみがえ</sup>る。幼い一つの顔。弱々しく蒼白いのは、南国に産まれながら陽に当たることさえ体力を使い果たしてしまうほどにか弱い体と、それに引き換えるかのように貪欲で旺盛な好奇心を塊でもつていた幼い日の友の顔だ。距離があることで書簡だけによって細々と交流は続いている。文字の綴り方も、文章で使われる表現も、その内容さえも、自分よりも数段と濃い成長を感じさせる友だったが、記憶の中にいる姿だけは年をとることができていない。彼は相変わらずに少年のまま微笑んでいる。

見えてきてよ。僕のかわりに。灰色のセハヌー河の水面に羽を休める白鳥の群れを。



学びの門の中では、本当に身分に縛られない、自由な親交が実践されているのか。

本当に冬がきたら、河も湖も凍ってしまうのか？

春の花は、どつと何もかもいつぺんに咲くのか。

ねえ、見てきてよ。街の市だバザールって、海の彼方みたいな僕には、決して行くことの叶わない、北の都を見てきてよ！

\* \* \*

初めてこの国をユリウス・カイが訪なつたとき、もう五月だといふのに北国の大気は、南国育ちの浅黒い肌を持つ少年には冷たすぎたものだった。驚くほど薄着になっているこの国の人たちを、物珍しげに忙しくみまわしながらも、少年は旅装のマントを外す気になれなかった。音に聞こえた大国だけ有って、イサクの首都ザッティバーグの主要な道には、石畳が敷き詰められていた。目抜き通りはただ広々と町そのものを碁盤目状に切り分けていた。その道に沿って築かれた延々と続く塀には、あちこちに枝のように延びていく細い道へと入り込める門が、穴のようにぽっかりとあいている。その名も直截な『枝道』に一步足を踏み入れれば、その枝道毎に全くの異世界が広がっているというのを、故国に居たときにイサク王立学問所に学んだことのある人からから何度も聞いたのを思い出していた。

本当に穴の様だった。恐る恐る幾つかの穴にちよつとだけ片足だ

け突っ込んでみたが、市場のような世界が広がっているものも、怪しげな煙が立ち込めているようなものも、洒落た植え込みが園芸の腕を競い合っているような住宅地が連なっているものもあった。早速、異国情緒を味わい尽くすべくそのどれかに突入したいという誘惑もあったが、天下の四大学府の筆頭に常に挙げられるイサク王立学問所に入學許可され、国費留学生として来ている身には、遊ぶより先にそこに行かなければならない義務感があつた。

好奇心に心を躍らせながら、漸く辿り着いた安堵感と期待に満ちた興奮を抑えきれない紅顔の少年には、長旅を一人でこなしてきた故の逞しさ添えられていた。この未来を拳に握り込んだ少年のこの国での学びの仕上げが、陥れられた上での断首になるうとは、その時の少年がどうやって想像し得たであろうか。

そもそも留學資格を得るための試験は壮絶な倍率であつた。年齢制限もある。学んでくる時間を人生の若芽の内にとらなければ、外交の最前線に当たれる壮年期に間に合わない。富を持たない若者が、自力のみを頼りに手軽な出世を望めば、道は軍か外交府にしか開かれていない。

富が集約する都市が略奪から己を毅然と守ろうとすれば、軍をもち、町自身が揺るぎない武力を誇示することが必要で、交易によって富を得ている母国も同じだった。この少年　ユーレリアス・カイサリオンの父親も、己の才覚のみを頼りに軍で出世して揺るぎない地位を築いた。父は二人の兄たちと同じく、自分にも軍人の道を歩むように望んでいたと思う。幼いころから、この国の多くの人が好む太く反り返った刀を自在に操れるようになるべく、徹底した訓練を課されていた。そして、年の近い二人の兄たちよりも恵まれていたガツシリとした体格は、少年に課すには些かならず過酷な訓練をも易々とこなしていったのだった。

海軍沿岸警備隊の快速艇に、三男のカイサリオンが緋色のチョッキを着て颯爽と乗り込んでいくだろうことを、家族の誰もが疑っていなかった。海が好きで、泳ぎが達者で、大柄な体を持て余す事も無く身軽。大人でも振り回すのに苦勞する半月刀を器用に扱い、武一点張り。本を読んでいるところなぞ誰も見かけた事がない。

けれど、彼には家族の知らない秘密があった。外交府の首席外交官であるドーズ・マキアスの病弱な一人息子と、ひょんなことから親友の契りをかわしていたのだ。体を自由に扱えない彼を神は哀れみ給うたのか、その少年は優れた思考力の翼をもっていた。ドーズ屋敷から殆ど出る事がないドーズ・ハルーカーヤスは、幼いながらもカイサリオンにとって優れた教師であつた。刀を振り回す事にしか興味がなかった乱暴な少年に、広い世界に対する憧れと知識の種を、何気なく交わされる会話の中にしっかりと播きつつけていった。

ドーズ・マキアスという、この貿易立国、ネルガル元首国の外交府実力者は、その精力的な仕事態度と異なり、女性にはつましかった。正妻独りを置くのみで妾は囲わず、浮いた名を流すことも無かつた。その病弱な妻がもてる健康の殆ど引き換えにして産み落とし、母の病弱さをしっかり受け継いでしまった一粒種の息子を怒りと共に捨てるのでも、不憫さに溺愛するでも無く、父親として普通の愛情を注ぎ育てていた。

彼は病弱な息子に、頭を使うのに体力は要らないのだと、常に言い聞かせていた。

どれほどいつまでも守りたいと望んだとしても、親の方が先に死ぬことが多い。だから、お前のような弱い体でも、己の糧は己で稼ぎ取れる様に必ずなれ。

マキアスは、いつもハルーカーヤスにそう言っていた。親の務めは

子どもに命を与えた以上、それを繋ぐべく生きる手段を伝授するべきというのが、マキアスの考えのようだった。そういう点では甘やかされることの無かった少年は、父の口癖『智慧は大いなる力なり』を実践するべく常に、戦略的に勉強にいそしんでいた。ただ知識をむやみに詰め込むのではなく、常に疑問と思索を友としていた。

ドーズ・マキアス。彼もまた己が独りの力で地位を築いた男だった。外交官に国以外の守るべきものを持つ必要を認めない寂しい強さが、その切れすぎる外交手腕の源かもしれない、そういう種類の男だった。

マキアスは息子のところに足繁く通ってくる息子とは正反対の健康に恵まれた少年が、軍人一家のユーレリアス家の息子であることすら、長い間知らなかった。息子がどうやってユーレリアス・カイサリオンと知り合ったのかも、何故にこの正反対の二人が惹かれ合っているのかも、マキアスには興味が無かった。ただ、この見るからに将来有望な少年が、風に長く当たっただけで直ぐ発熱するような息子のただ一人の友であることが不思議だった。息子は羨ましくないのだろうか。カイは、眩しいまでの健康を友に見せつける事に戸惑いはないのだろうか。

家に帰ることすらが稀な激務に身を置くマキアスであったが、家に戻った時には必ず息子と過ごす時間を持っていた。正反対の二人の子どもたちではあったが、観察している内に二人は広い世界への尽きない興味と、好奇心という宝を共有している同志であることが、徐々に見えてきた。マキアスが買い与えた世界各地の地図や絵図面、特産や名産、気候や風物などが書かれた紀行書。異国の小さい置物や子供だましのみやげ品。そんなものを挟んで語り合う二人は見事な位同じ瞳の輝きを持っていた。

そうと胸落ちしてから、マキアスは異国の香りを漂わせる様々な文物を、子供部屋に持ち寄って、外国を見てきた一人の元少年として自分が見聞きしたことを話すようになっていった。子どもたちは、

話の色々なところで興味を示し、マキアスが思ってもいなかったような発言や質問をしてくる。

親馬鹿かもしれないが、息子ハルークヤスは、体の頼りなさを補って余りある頭の良さを持っているとマキアスは信じていた。体ばかり遅しく見えるカイがそのハルークヤスに決して引けをとらない頭の良さを持つている事に気付いたマキアスは、子どもの成長の頃合いを見て、子供部屋に家庭教師を面倒みが良い兄貴分を装わせて入れ代わり立ち代わり送り込んだ。

時間さえ許せば、マキアス自身も教師として、自分が見てきた世界のことを話して聞かせた。特に若いころに国費留学生として訪れ、学びを得たイスク王立学問所のことは、定番の話題だった。イスク王立学問所の事を話すときのマキアスは、心なしか若々しく、楽しそうで、外交官の巧みな話術も手伝って、二人の子どもにいやが上にも北の大国イスクへの憧れを植えつけてしまった。

「イスクに、行ってきてくれよ。僕の替わりに」

二人の特別気に入っているデイトナ版現代世界地図を眺めていたとき、突然冗談めかしてハルークヤスは言った。彼の抜けるように白い 本当に北国の人のような 指先はイスクの首都ザッティバーグを押さえていた。カイはその場では応えなかった。イスクは自分にとっても、既に憧憬の地である。貴族も平民も外国人も、その門をくぐれば学問の下に平等であるという王立学問所。二人が尊敬するマキアスの言葉によって、生き生きと与えられたイメージは北に似合わず明るく勇ましい。

東西南北の四つの寮によって、名誉ある銀星杯獲得の為に、毎年繰り広げられるらしい様々な駆け引き。派閥対抗で覇を競う『合戦』の夜。轟く太鼓の音。上級生も新入生も入り乱れて、校章入りのスカーフを命に見立てて、争奪しあう熱い夜。男子学生たちだけが六年の長い期間を、身分ではなく個人としてその身を寄せ、精進するために競い合う世界。イスク王立学問所はそれでもカイにとって、夢よりも遠い存在だった。

カイはそもそも学問を極めるつもりがなかった。父は読み書き計算位がこなせなければ、軍人としても兵隊しかできないといい、軍人の子弟が多く通うことで有名な私塾に、カイが十の年に入門させたが、カイにとっては詰まらなすぎた。今更綴り方で石版を埋めろというのか？ 反抗心も手伝って、一目で逃げ出した。カイが一日も机に向かうことができないと知ったカイの父、シュリ・ユーレリアスは溜息をつくしかなかった。仕方がない。長男も次男も、そこそこ知性の煌きを持っている。一人くらいは、只の凶戦士として戦場の華であつても良いだろう。華なればこそ散りやすい。散らぬ華であれと望むことの虚しさを知りつつ、そう諦めるしかなかった。カイは相変わらず、半月刀を嬉々として振り回して飽くことが無かった。

そんなカイの将来に、頼もしさと不安とを感じている父の思いも知らず、カイは漠然と将来を、父や兄たちと同じ軍人の道を歩いていくのだという思いだけは持っていた。国をそんな形で守ることに疑問は無かった。けれど、ハルーキヤスの一言が、自分の人生にそういう道もあるのだと示してしまったのだ。自分は自分の人生について己の足で立ち、己の頭で考えることをしてきていなかったのではないだろうか。親が軍人だから、兄たちも軍人として歩みだしているから、自分もそうするということが、果たして正しい道なのだろうか。

カイは自分の人生を天秤にかけた。もし、難関である国費留学生承認試験を通つたら、憧れのイサクに行こう。そして、かの地でかつてのマキアスのように生き生きと青春を謳歌し、友を作り、そこを卒えたならば、帰って親友ハルーキヤスにその全てを語ろう。試験に落ちたら、潔く敷かれてる軍人への道を歩いていこうと。

カイは自分の能力を正しく把握してはいなかった。マキアスがさりげなく子供部屋に届けていた家庭教師たちが、二人の子どもに与

えた教育は、その年齢においては充分に過ぎるものだった事を。

国費留学生の認可を得た子どもたちの名は、成績順にネルガル元首公務館前広場に掲げられる。ユーレリアス・カイサリオンの名が、首席でこそ無かったものの第三位という見事な成績で他の者より大きく名前が書かれているのを見つけた時、父や兄たちよりも、カイ自身が一番驚いていた。

半月刀を振り回し、よく昼寝をして、よく食えることだけが楽しみというようなカイが何時どうやって、そこまで揺るぎない学力を育てることができたのか。父親のユーレリアス・シユリは息子と呼んで問いただした。単に、不可解を解明したいだけのシユリの問いかけを責めと受けとったのか、カイは挑戦的に顎を上げて言い放った。

「軍人となることを嫌った訳ではありません」

カイは熟考の上の挑戦が通ったことへの自信からか、父の目を真っ直ぐに見つめて口にした。

身体の弱い親友と、何よりも自分の望みとして、北の大国イサクを見てきたい。そこで学問を修めたならば、その時に帰って新たに軍の門戸を叩くか、親友の父、ドーズ・マキアスのように経験を生かしての外交の道を歩むのか、学びをもとに、それ以外の道を選ぶかまではまだ分からない。分からないけれど、今は外からこのネルガルという国を見てみたい。

首席外交官ドーズ・マキアスの息子とカイが親友であるというのも、ユーレリアス・シユリには意外すぎる事実だった。氷の刃と異名を取る、文句なしの切れ者ドーズ・マキアスの息子が、その父に似ず蒲柳の質で、屋敷から足を踏み出すことも無いというのは周知の事実だ。マキアスの為にも、妾をとらせて、跡取りをもつけさせたいと、いつも元首アンヌマリー・ネルガルは溜息交じりに言う。

「外交官を世襲にすれば、国は滅びますよ」

微笑んで取り合わない潔さを、シユリは評価していたが、仲間うちではやせ我慢の格好つけと貶めて言う者もあった。

ドーズの息子について問いただしたシユリに、カイは誇らしげに答えた。

「ハルーキヤスは、きつと身体さえ丈夫であつたら、この国の支えとして活躍できるはずだったんです。でも、神は彼に健康な身体だけはお与えにならなかった。俺は、逆に身体だけは丈夫だから、彼が才を充分発揮できるよう、傍で支えてやりたいんだ」

傍についていたのなら、なぜイサクに行く？ その問いにもカイは迷わなかった。ハルーキヤスが見たがっている。彼はいけない。だから俺が見てくる。単純で揺るぎない親和感。この年頃の若者が、友に対して感じるそれは、親などがとめて揺らいだりするものではない。むしろ、息子が自分が損得で友情を選べと言つて、それを単純に受け止めたりしたら失望するに違いない。それでも息子がどの程度彼に入れ込んでいるのか知りたくて、ハルーキヤスとの交流を感心しないと仄めかしてみた。

「直接彼とお話になつてみるとよいのです。ハルーキヤスは私より二つ年上なのですが、本当に天才外交官ドーズ・マキアスの息子の名に恥じません。闘いが剣をとつてのみするものでないことは、父上ならばご存じでありましょう。知識の豊富さも、考えることの大胆さでも、私は彼の足元にも私は及びません。人は足りないところを補いあつて生きていけば良いのだとマキアス小父さんは言っていました。私は、ハルーキヤスの働き者の手足になりたい」

「ドーズ・マキアスは己の息子が頭になって、お前が手足になればいいと、そんなことを言つたのか？」

少し腹立たしくなつてユーレリアス・シユリは声を荒らげた。カイサリオンの答えは穏やかだった。

「父上、貴方は取るに足りないと思つている人物から手足になれといわれて、ハイと答えられるのですか？」



シュリが言葉につまる。

「私は、ハルーキヤスの手足になら、喜んでなりたい」

そう迷うことなく続けた息子に、シュリはあろうことか圧倒されるのを感じた。息子が、男になるのは存外早いものだ、彼は戸惑い一つも嬉しく思った。

「マキアス小父さんは、競い合い、高め合う関係ももちろん素晴らしく有効だけれど、足りないところを補い合う生き方も同じくらい素晴らしいと仰ただけです。知識を学ぶ事に精進すれば量ではハルーキヤスと競えるでしょうけれど、彼の様々な事象をつなげ合わせて大胆な発想に結びつけることなど、天性のものがあります。私はどんなに頑張っても彼に追いつかない。愚か者の手足になっては結果として、私の刀は無闇に人を傷つける物騒なものになってしまふ。父上が手足という言葉が気に入らないのでしたら、言い換えます。私はハルのような人間が自由に羽ばたくための翼になりたい」

\* \* \*

ごめん、ハル。戻れそうも無い。

ここで出会った友たちは、俺にとってかけがえのない仲間たちだ。ハル。お前がここに連れてきてくれた。ここで学び、ここで知己を得、帰ったら、一緒に、小さいけど金剛石みたいにとびきり輝いて

る俺たちの国で、なにかする前に、話してやりたかった。本当に、ここでは大河が凍ってしまうんだ。マキアス小父さんのホラ話でなく、ほんとうに暮れない夜があるんだ。ネルガルと……何もかもが違っているよ。

俺が愚かな罪を犯して、断首されたなんてお前の耳に届くのはいいつだろう。本当に俺が馬鹿をしでかして、故国にドロをぬつたと、お前は俺を羞じるだろうか。それとも、信じてくれて、濡れ衣だと信じてくれて、俺のために泣いてくれるだろうか。帰らなかった俺を怒るだろうか。それとも……ただ、この国に行つてこいといった己を悔やむだろうか。ハル。ハル。ハル。帰りたい。こんなに、こんなに帰りたい。お前のところに。

気軽に帰れる距離でない。強国の名を恣ほしにしているイサクのこと。

外国人と蔑まれようと、野蛮人とみなされようと、学びを得るために訪れる留学生などは引きも切らずだったが、それでも近隣諸国から来ている者たちは年に一度くらいの帰国はしていた。しかし、ユリウス・カイの故国は遙かに遠い。船を乗り継ぎ、街道を贅沢に駅馬車で乗り継いで、潤沢な資金にものをいわせての旅でも、半年以上を要した。王立学校に入学を許されて六年目。故国を出てからは七年近く、親や兄妹たちと会っていない。

父や母は。兄たちは。そして、まだ幼かった妹は、どう思うだろうか。信じてくれるだろうか。俺が親友としていた男の妹を無残にも凌辱して殺したなどという羞ずべき罪を犯したとして、一族の恥とするだろうか。それとも、俺を信じて、真実を知ろうとしてくれるだろうか。いや……イサクは遠すぎる。首をとりに来ることでもできず、ただ臍を噛むくらいがいいところだろう。

母は……母はおそらく泣いてくれるだろう。時折行方不明になっ

て届かない手紙もあったものの、しつこく近況を知らせる手紙を書き続けてくれた母だった。家族がどんな風に年を重ねて行ったのか、どんな風に過ごしたのか、何があったのか、カイにはなんとなく掴めている。でも、自分は帰ってから報告すれば良いと、碌に返事も書かなかった。報告することが叶わなくなった今、母は長年の親不孝を、許して下さるだろうか。

長兄がカイもよく知っている彼の幼なじみを娶って、既に二人の子持ちになっていることも、あの厳しい父親が孫娘には骨がなくなることもカイは知っている。腕自慢の次兄がチェヌスの武闘大会の無差別部門に母が止めるのも聞かず出場して、『紅の牙』とかいう通り名の狂人に殺されかかったことも、化膿した足は切断を免れたものの、予後悪く少し左足を引きずって歩いているらしいことも知っている。国を出たとき、兄弟のうちたったひとりの女であった妹は、十になるかならぬかぐらいの年だった。あの子は、どうやら武でならしたユーレリアスの血を色濃く受け継いってしまったらしく、同じ年頃の少年たちなど歯牙にもかけぬほど達者に弓を使うらしいけれど、どんなに想像力を逞しくしても、今どんな顔をしているのか見当もつかない。女元首の養い子などという身分でありながら、どうして姫様然と育たなかったのだろうか。

十五……いや、もう十六になるのだろうか。

記憶の中の妹はテオドル・カルラーラの死んでしまった可哀想な妹ミアーよりも幼かった。どんな乙女に……あるいは猛女に育っているのか、見当もつかない。

故国が遠いカイは、年越しや夏至祭、収穫祭などで学校が休みになるときも行き場所が無い。裕福な商人の息子であるテオドルは、よく家にカイを招いてくれた。小父さんと小母さんは……、ミアー

又を殺したのが本当に自分だと信じて、明日、俺を罵倒して石打つのだろうか。ミアー又は可愛らしく、少しませたところがある少女で、自分を慕ってくれていた。故国の友ハル（彼にだけは手紙を絶やしたことが無い）がイサクを語るときと同じ目の色をして、南の宝石のような故国ネルガルの話を喜んでくれた。孔雀なんて鳥は本当はいないのだと信じていた。帽子の飾りに使われるあの羽は、手の込んだ工芸品であって、絶対にあんな長い奇妙な羽をつけた鳥なんかは存在するはずが無いと言うから、ネルガル公主庭で一度見たことがあるあの鳥が、実家の庭にいとホラを吹いたことだって覚えている。

私。いつか絶対にカイさんの国に行くわ。

カイさんがお帰りになるとき、お父様のお船を使われればいいのよ。

私もネルガルに……いきたいわ。ねえ、連れて行って下さらない？

だって、カイさんのお庭にクジャクがいるか、確かめなくちゃならないもの。

いなかったら、当然お願い事を一つ叶えていただくの。

本当に居たら、私だってカイさんの願い事を聞いて差し上げてよ。

もちろん、孔雀なんて、ネルガルの業突張り商人のインチキに決まっていますけどね。

\* \* \*

「カイ。……カイ」

自分と呼ぶ声が聞こえた。誰だ。もう、朝が来たとしてもいいのか。いやだ。死にたくない。テオの小父さんや小母さんに、どんな眼で見られるのだ？ 何より、弁明の機会すらもう与えられないというのか？

「カイ。頼む。しつかりしてくれ。時間が無いんだ……」

肩が掴まれて、激しく揺さぶられた。自分を罵る牢番の野卑な声ではなく、泣きそうな懇願がはいった声。少し朦朧とした覚束ない視線を、自分の肩を掴んでいる手から腕、肩へとなぞり上げて、やつのことでその声を発した主の顔まで辿り着かせた。蒼ざめて、厳しく引き締まった強い光を宿した瞳が、カイの覚醒を促した。

「エ……ア……？」

見間違いに違いない。死ぬ前にもう一度逢いたいという願望が生み出した妄想だろう。奴は明後日の夜明けまでに国境を越えなければ二度と自由を得られない。永年禁固という処分が待っている。この国はとてつもなく広い。今朝の自分の死を見届けてから走ったのでは、期限にはとても間に合わないのだろう。だから、彼は今頃自分と同じよう濡れ衣に腸を煮えくり返らせながらも、馬上の人であるはずなのだ。

こんなところに、いるはずが無い。

カイはもう一度目を閉じて、妄想を追い出そうとした。が、妄想にしては小気味いいくらいの音が響いたと思ったら、頬が激しく痛んだ。

「可哀想な死刑囚になんてことするんだ。痛いじゃないか」

頬を撫でながら文句を言うと、わざと大きくついたのだろう溜息が狭い牢の壁に響いた。

「いい加減にしてください。それでも、剣の会の国土無双ですか……情け無い」

相変わらず口が悪い。看守の目を盗み、死刑囚の牢に忍び込んで来るなど、口達者なだけを取り柄のエアリア如きにできるわけがない。絶対に実物な筈は無いが、最後の別れに出てきたにしては愛想も劣りもまるでない。しかも、妄想の癖に横っ面を張ってくるとは侮れないやつ。

「遠い異国で、身に覚えがない罪で首が切られるつてのに、元氣一杯に踊ってたら、そっちの方が異常だぞ……」

妄想のエアが、いつものようにニヤツと笑った。

「もうちよっと、怒り狂ってるかとか、逆に腑抜けになってるかもとか心配してましたけど、やっぱりタフなんで見直しましたよ。カイ。それだけ落ち着いていれば大丈夫でしょう。ちゃんとメシ食いました？」

この妄想の毒舌ぶりは、なんだか……本人を彷彿とさせる。

「って、壁に食わせちゃったみたいですね。全く。腹ごしらえの暇はとれないでしょうからキツイとは思いますが、カイ、そのガタイなら、二、三日食わなくても死にませんよね……多分。一応、生き物だと思っただけで水だけは用意しましたけど、落ち着いて呑んでる暇あるかな？」

脱獄したいという欲求は相当強いらしい。しかも、デユカス辺りが来てくれるなら納得いくが、武張ったことがからきしのエアを呼ぶ辺り、妄想なんか自由になるとは思えないが我ながら始末におえない。会いたいヤツと、頼りになるヤツを混同している。

妄想が続けた。

「さつさとその服脱いで、こっちに着替えてください。もつといいものでもよかったですけど、汗もかくだろうから普通のシャツにしときました。夏ですから靴は短いの用意しておきましたけど、靴音が響かない方がいいんで、馬のこの荷物と一緒にします。そこまで裸足で頼みます」

靴音にまで配慮するとは、流石、俺の妄想。素晴らしい。……つて。

妄想のエアリア・ロキメンもやはり裸足で、服を手渡すなり牢の檻に身を寄せて油断無い目で気配を窺っている。その実在感の妄想の域を越えている。それに、手に乗せられたシャツの重みも現実のものだ。

「エア……？」

妄想が『何か？』と聞くように振り返って、シャツを持ったまま

立ち尽くしているカイを見て眉を顰めた。

「話は後でにしてくれませんか？ 時間が本当にはないんです。薬はまだ利いてる筈ですけど、見回りに見つかったらヤバイ。ここでグズグズしてるのが厭なら、取り敢えずそのまま移動して、出てから着替えます？ それとも、面倒だったら、ここで心中でもします？」

「なんで俺が男のお前と心中しなきゃならないんだ。助けに来たんじゃないのか？ 着替えないの次の選択肢でそこまですつとぶなんて、相変わらず自暴自棄なやつだな」

妄想の奴がにやつと口の端を歪めて、端正な顔を崩しながら冷たく言い切った。

「自暴自棄の用法が、適当と言えませんか……」

妄想なんかじゃない。こいつは……間違はなく、エアリア・ロキメン本人だ。



## 第五章 ラジェイラの針

長距離の早駆け用に馬を備えさせようと、学校の厩うまやに足を踏み入れたキリアン・ロキメンは、まず自分のヒューペリオン号を起こすために近寄った。ヒューペリオン号はいつでもキリアンの気配に敏感だ。瞬時で覚醒して、乗りたいのか？、と、問いかけるような目でキリアンを見つめて来た。キリアンはゆっくりとその視線を受け止めて、静かに鼻面を撫でた。

「ちよつと、きつい距離を駆けてもらいたいんだ。よろしく頼むな……」

ヒューペリオンが鼻を軽く鳴らす。頼まれなくても、いつでも走ると、その目が言っている。

有難う……。俺は、もう一度兄さんに……会いたい……。

声に出すのは、なんとなく気恥ずかしかったのでキリアンは心の中で呟いた。多くを言わなくていいと言うように、ヒューペリオンがその尾を振るった。

「ブランカが……いないな」

背後からアルフォンスの声が聞こえた。ブランカは辛辣な口とは相いれない穏やかな気性のエアリアに似て、とりわけ扱いやすい馬だった。毛並は名前から連想されるような白馬ではなく典型的な鹿か毛げ。そして不吉とされる四白（四本の足だけが白い）だ。そこを嫌われ買い手がつかず、もう少しエアリアが馬市を通りかかるのが遅かったらで馬肉にされるところだったそうだ。それを目が合ったからとかいう心もとなない理由でちゃっかり買いたたいて連れ帰り、エアリアは今に至るまで彼女だけを自分の馬としている。人が嫌う白い足を殊更に強調するような名付け方も、全くもってエアリアらしいというのが、皆が一致するところだ。

ブランカが持ち主に凶運をもたらすかどうかは不明としても彼女

は、エアリアの弟であるキリアンの愛馬・ヒューペリオンとは正反對に、誰にでもその背を許した。馬術は絶対の評価とは無縁なものそれでも卒業の為には必修で、馬に乗る習慣がない平民や外国人泣かせの科目だった。穏やかなブランカは、そういった連中の間では殊更こっぴどに頼みの綱とされていて、彼女を借りにエアリアを訪ねてくる者は後を絶たなかった。エアリアは条件もつけず、日程の問題がなければ気安く貸していた。

「逃げ出したとかいう……カイさんが連れて行った訳じゃないですよね」

アルフォンスが肩を竦めた。

「命からがら逃げ出して、ここまで辿り着いたなら……、ブランカだけ盗んでやつが逃げると思つか？ 少なくとも俺たちのところには顔を出すだろう」

「じゃあ、ブランカは誰が連れ出したというんですか？」

「エア自身……じゃ、ないのか？」

「兄貴だって……、行く前にここに寄ったなら、少なくとも俺の面なんかは見たくなくても、デユカス先輩やアルフォンス先輩、セナ先輩の顔ぐらいは見てから行くでしょう？」

アルフォンスが肩を竦めて見せた。

「相変わらず、お前鈍いな。逆だよ。俺たちの顔はどうでも……キリー、エアはお前の顔は見ていくはずだ」

アルフォンスは、学寮でエアリアと同室で、気の合い方では三羽さんぽう鳥らすと一括りにされるテオドル・カルラーやユリウス・カイとのそれには及ばないらしいが、それでも兄の友であることは間違いない。

「私の弟は良い漢おにいだろうって、いつも煩めづかったんだぞ。覚えてるか？ お前が平民の癖に生意気だつて袋にされた奴に味方して、一緒にやられた事、あるだろう？」

キリアンは少し考えたが思い当たる節がない。

アルフォンスが何かを思い出して、クスツと小さく嘖きだした。

「お前は熱出して救護室で唸ってたから知らないだろう。お前を殴った連中、あの後お前になんかしたか？」

忘れていた古い話を蒸し返されて、少し面食らったが、キリアンは漸く心当たりを一つだけ思い出した。

「ああ、救護室って、兄貴のやつから、状況も読めずに行動する奴は只の阿呆だと、凄く貶けなされた……あの時のことかな。未熟者がいきがるな……って。こっちはあちこち痛いのに、逆らえないと思って調子こいて俺の頭はポンポン平気で叩いて……。そうそう、怪我したらどうするんだと、文句を言ったら、言うに事欠いて、お前の頭は頑丈そうだし、少々へこんだところで機能に問題はないだろうとか、多少刺激があった方が働きがよくなるだろうって……こうです。どう思います？」

「あの時のやつは……怖かったよなあ……」

アルが同意を求めるようにデユカスを見た。見られたデユカスも、そうそうというように頷いてから嘖きだした。

「あいつが怒り狂ったのを見たんは、あれが何だかんだで最初で最後だったんじゃないか？、なあ」

学びの門の内では平等という理念を、キリアンとて信奉している訳でない。逆にその習慣が現実と乖離している事実を承知しているし、むしろ口に優しいだけの毒のようにも感じていた。だからといって、非のないものに難癖をつけて、暴力をふるう行いに、嫌悪感を覚えたのも確かだ。けれど、記憶を探るより強く、キリアンはデユカスが言った言葉の方に気を取られていた。

「あの人が……、怒り狂った？」

兄・エアリアは怒るときですら一切が計算づくだ。怒って、逆上して見せた方が効果が高いと判断したときだけ、爆発してみせる。

が、そんなときも、目の色はいつも冷たく鎮まっている。証拠に、以前に会の新人が不始末をやらかしたとき、アルフォンスに言い過ぎを咎められ、デュカスに体を押さえつけられるほどに撲りに行きかねない勢いで、豪勢と形容したくなる見事な罵言をはいていたが、デュカスに促された相手が退室したとたん、飄然とした顔つきに戻って肩を大仰に竦めて言ったものだ。

ま、私が怒るくらいのはしでかしたんだと、わかってくれば、めっけものなんですけどね……。頭悪い奴に分からせるつてのは、面倒ですよ。

「怖かったよねえ。あれ。例の、あの……。あれ」

「……全く」

デュカスが深刻な顔で同意する。

「あれって？」

そのキリアンの直接の疑問点に応えず、アルフォンスが続けた。

「殿下の御為にしか使わない技とかいうやつがあるとは聞いてたけど、まさかなあ。あんなに凄いと……。お前を撲った連中、俺たちが一緒にいなかったら、あれですませてもらったか分からんよな。もしかしたら、殺されてたかもしれんよ。実際の処」

デュカスと御神酒徳利のセナも話に加わってきた。

「あのあとの奴らの、エアみるときの顔ときたら、可笑しかったな。蛇に睨まれたカエルだって、もうちつといい顔色をしてるってくらい青くなって……」

思わせぶりの上級生たちの訳知り顔がひっかかって、キリアンは仕方なく素直に聞いた。

「……兄貴は……。一体何を使うんです？俺をのした連中は悔しいけど、強かったですよ。あいつらなら、兄貴を片手で捻<sup>ひね</sup>れるですよ」

「噂くらいは聞いたこと、あるだろ、キリー。『ラジエイラの針』のさ」

「ラジエイラの……針……？」

王族の影の教育を一手に引き受けるラジエイラ家に伝わるという、毒針を使った暗殺用の技があると聞いたことがある。が、兄はラジエイラの針は、あくまでもツボを刺激して体の気と血の巡りをよくして体を整える為の医術だと言っていた。毒を使う云々はホラ話に過ぎないと。

実際、兄はいつも独特の長い針を、焼き切った状態で、金属でできた専用の小さい筒にいれて持ち歩いている。暗殺に使おうと思えばできるのかもしれないが、実際のところ彼の針は無理な体の使い方をして故障した者の手当ての為に使われている。毒舌な兄が無条件で皆に信頼されるのも、荒っぽい連中が付き物のように体に抱えてしまう不具合を、即効で緩和させる癒し手であるという事に負うところが大きい。

「無理な体の使い方をしたとき、奴はいつも手揉みか針をつかって楽にしてくれるだろ？ キリーだって一応あるだろ？ エアの針の世話になったこと」

キリアンは頷いた。自分も何回となく兄の手にはお世話になっているし、数度だが今話題にされている針も実体験している。

「あれさ……逆に働くツボってのがあつてさ……、やりようで、動けなくなるんだよ……この目で見えるまで信じてなかったけどな」

キリアンは一瞬、アルフォンスの発した言葉の意味する処を把握できなかったが、遅れて理解が至って、眼を剥いた。

「殴って気絶させるなんて、単純でかわいいと、あの時、俺はつくづく思つたね。動けなくさせておいて……」

そこまで言つて盛大に嘖きだした。珍しくデュカスも肩を震わせ、て笑いを堪えている。動けなくして、兄はやつらをどうしたという

のだろう。まさか爪の間に針を刺したとか、目にとか……。想像を逞しくしているキリアンに肩すかしを喰らわせて、アルフォンスが笑いの隙間からやつと声に出して言った。

「……つるつる……あそのの……毛……」

その先を笑いで続けられないアルフォンスの後を取って、セナがエアリアの口真似で説明した。

「目立たないところは、今日だけです。次は脛か眉<sup>スネ</sup>辺りで勘弁して差し上げます。それでも……弟に手を出したら、頭ツルツルと、この針に毒塗るのと、希望を聞いて好きな方で仕返しして差し上げます」

デュカスが無意識で股間に片手をやりながら、眉を顰めてキリアンに顔を近付けて詳しい所見を添えた。

「逆上したっていいつつ、結局冷静だったのかな？ 奴は……。骨折っちまったり、見えるところに傷をつけたりしたら、先生方にもバレてお咎めが来ただろうけど、やられた方も場所が場所だから、誰にも愚痴れないだろ。それに、動けない状態で、ここに剃刀<sup>カミソリ</sup>あてられたら……そりゃ、誰だって身も凍るって……。俺たちにも見られて男の矜持丸潰れだし。二度と関わるまいと……思うよな。普通」

キリアンは兄に感謝していいのか、兄のやった行為を嫌悪しているのか、どうも判断に苦しんだ。兄の針にそんな裏技が潜んでいたとは知りようもない。しかし、格好いいと言いはない。どちらかというと、自分が嫌う陰湿なやり方だ。

「なんで……教えてくれなかったんです？」

どこかもやもやした気持ちだが、恨みがましい響きを帯びてデュカスに向かった。

「お前が、こんな陰険なやり方で、よりによって嫌ってる自分なんかに庇われたら気を悪くするだろうってさ。お前にばらしたら、俺たちもツルツルにしてやるって、凄まれた……。あれ見た直後で、誰も逆らえないよな。奴が怒ったら、俺たちも動きを殺された挙句

に……ツルツル……」

キリアンは頭が真剣に痛んできそうだった。ツルツルにしてやるって……果たして普通、脅し文句になるのだろうか。ヒューペリオンの鞍に額をつけて深く考え込んでしまったキリアンの肩を、励ますようにセナが叩いた。

「デューはああいうけどな、俺はやつは怒り狂ったんだと思うね。お前さんが、ボロボロで担ぎ込まれてきたときの形相ったら、凄かったから。……ラジェイラの針は……実際にあるかどうかも伝説みたいに語られる……本当の秘術だ……。多分……、それを皇太子殿下のお為以外で使うこと自体が……奴にとって間違つてのことで、使ってしまった以上は口止めする必要があったんじゃないかな。殺して口を塞ぐのが難しければ、しゃべりたくない状況に追い込むことが必要だろう？ 連中の動きを殺しちまってから、多分失敗したと思って……、だからって実際に殺す訳にはいかないし、吹聴されても困るから……ツルツル……」

真剣な口調でもツルツルと言われると、脱力する。キリアンは頭を振った。

「話を変えましょう。先輩方。じゃあ、ブラン力を取りに来たのが兄貴だったら、なぜ、俺たちに会っていかなかったです？」

『俺たち』と、デュカスやアルフォンスも自分に括り入れてから、キリアンは訪ねた。

「それに……カイ先輩は……どうしてると思います？」

ちつと舌打ちして、デュカスが首を振った。

「ものごとは単純に片づけていこう。分かるところから……、できるところからだ。カイが逃げてくれたのなら、今はブラン力で国境を目指している筈の、エアを追うぞ。真玉関が外れの可能性もあるが、取り敢えず可能性が高いところに賭けるしかないだろう」

そうして、彼らは馬上の人になった。

だっ広いこの国の主街道を騎馬で駆け抜けるのは、我が身の一部のように愛馬を操ることが出来る者たちにとつても、相当身に堪えることだった。まったくこの国ときたら、夏でさえ夜の風は冷たく、大気に晒されている顔は凍りつきそうだった。キリアン・ロキメンが乗る愛馬は頑健で気が荒く、彼以外の人間を乗せることを好まないだけでなく、主人であるキリアンが自分以外に乗ることも嫌っている。けれど限界はなんにでもある。これ以上走らせると、流石のヒューペリオン号も潰れてしまうだろう。次の宿場あたりでそろそろ適当な馬を調達して乗り換えなければならぬ。見知らぬ馬に自分が乗って旅を続けられれば、気位の高いヒューペリオンはきっと臍を曲げてしまい、次に会ったときは相当乗るのに苦労させられるだろうが、仕方ない。

共に馬を駆けさせているのは、『剣の会』仲間たちだ。ユリウス・カイを刑場から救出すべくデユカスを選んだ生粋のイサク貴族に連なっていて、皆、歩けるようになる前から馬に親しみ、高価な自分の馬を所有している者ばかりだ。歩く気安さで馬を駆る面々だからこそ、長距離を短い時間で駆け抜ける大変さは骨身に沁みて知っている。余計な口をきく者は無かった。とはいえ、馬を潰してしまつたら脱落するしかないと知っている行程だ。それぞれが、馬を労るという理由からではなく、早めに乗り継いでいたので、相も変わらず自分の馬に乗っているのは、キリアンのみだった。

キリアンのヒューペリオン号は王すらもが所望するほど頑健な馬で、実際一度召し上げられてしまったのだが、王を頑として乗せることを拒否して、丁重に突っ返されてきた曰く付きの曲者だ。くせもの国王イルディス自身が優れた騎手であり、馬を愛するイサク気質の持ち主でなければ、彼を乗せることを拒んだ時点でヒューペリオンの命はなかっただろう。



比類なき名馬にして、キリアンに忠実な愛馬に対する信頼は強くあったが、いくらマヴアルの血を引いている彼自身が少しばかりデユカスたちに比べれば若干細身とはいえ、それに甘えるのもそろそろ限度だろう。

その時、薄明の街道の彼方を疾走している単騎の影が、エアリアに負けずに優れているキリアンの目に飛び込んできた。さすがに遠すぎて、兄であると確信はできないが、それでもこんな時間に、こんなふうに関境目掛けて疾走している人間が、兄の他にいるとは思えない。

「キリー。そろそろ、いくら比肩無き名馬のヒューペリオンさまでも限界だな……。次の馬宿までもつか？……」

唐突に減速したキリアンのヒューペリオンが追いついてくるのを、馬を足踏みさせて待っていたデユカスが言った。遠くにかすむ孤影に目を凝らしたキリアンを手伝って速度を落としたヒューペリオンが、潰れかけていると誤解したのだろう。ヒューペリオンにまだ余力があることは、キリアンが一番よく知っていた。

「多分、あれです……。追いつきましたね。急ぎましょう」

呟くように言って、キリアンが拍車を使った。信じがたい長距離を駆けてきた疲れも見せず、ヒューペリオンが風になった。

慌てて鞭を使ってそれを追ったデユカスの目にも、今では小さく霞んで見える真玉関の影と、そこに至る真っ直ぐな路を疾走する人馬の影を捉えていた。

キリアンとデユカスの二人が馬を駆り立てて疾走するのに気付いた他の者たちも、一斉に拍車を入れたり、鞭を使ったりして速度を上げた。

キリアンは目を細めて射程を絞りながら、その影を見据えつつ走り続けていた。騎乗の人は、マントと頭巾で旅捲えをしていて髪

色まで分からなかったが（兄の夜からも羨ましがられるような黒髪を見間違えることはない）、馬の足が四本そろって確かに白いことをはつきりとみとめた。ブランカに決まっている。

迫る騎馬の集団の気配を、追手か何かと誤解したのか、騎手が馬を駆り立てる気配を見せた。

くそ。兄貴。一目振り返って確認してくれ。俺たちは……はあ？

キリアンは自分の目が見たことを容易に信じられず、暢気に考えた。

落ちた？

え……と、猿も木から……とか、言うんだっけこの場合。それとも、河童が川でなんとやら……だったかな。

\* \* \*

服を抱えたまま立っている自分に背中を向けて、エアリア・ロキメンは格子こしに開いた小さい扉を音も立てずにくぐると、そこに倒れている男（何度も口汚く罵ってきた奴だ。こいつの手から与えられた碗の粥を啜る気にはなれずに、勿体ないことに食い物を壁にぶちまけた）の上にかがみ込んでなにやら始めた。彼も裸足で、そのほつそりした白い脛すねが泥で汚れているのが、不思議な眺めだった。

「何してるんだ？」

彼がその男の汚れた服を脱がせているのに気付いて、事態が呑み込めていないカイは暢気に問うた。振り返りもせず、エアリアは説明した。

「あなたが、その目立つ囚人服でなく、こいつを着て逃げていると……追手に思ってもらいます」

振り返って、立ち尽くしたままのカイをみると、エアリアは憤然とした口調で続けた。

「その服で街歩けると思ってるのだとしたら、その服と一緒に頭もここに残していく方がいいかもしれませんね。いいですか？ その青と黒の派手な縞は、囚人だったものが逃げてきましたって宣伝と一緒になんですよ。イサクを出るところか、ザッティバーグだって抜けられたもんじゃない。ここにいて明日の朝、テオに石で殴られて、彼の前で首を落とされたいって言うのでしたら、私は帰りますよ……」

「んな訳ない」

慌てて服を剥ぐように脱ぎだしたカイをみて、エアリアは頷くと、自分の仕事を続けた。ぐったりと力なく床に倒れている男を、下履き一枚残して裸にすると、もう一度牢の中に戻ってきて、格子の間から男の腕を引き入ると、格子を利用した槌子の原理でその非力を補いつつ、勢いよく腕を曲げた。

いやなくぐもった音がして、意識がないにも関わらず、男の口から苦痛の呻きがもれた。カイは流石に鼻白んだ。攻撃力がないものに加虐するのは、彼の性根に合わない。

「お前、何してるんだ？」

「エアリア・ロキメンを自由にしてるんですよ。カイ、あなたにはもうちょっとこの辺でウロウロしてもらってないと、ロキメン殿が

苦労しますからね。困ったことに彼は馬は苦手ときている」

カイは面食らった。彼が自分のことをロキメン殿と呼ぶのも妙だが、エアリアは乗馬の名手として知られている。というより、彼ら兄弟の母親のマヴアルの血が持てる能力かもしれないが、全く似たところのないあの兄弟の唯一の共通点が騎馬に長<sup>た</sup>けている事だった。特にエアリアは特別力が入っているとは思えないのに、鞭だの拍車だの使わずに自在に馬を操る。

たとえばこんなことがあった。国王すら乗せなかったヒューペリオンに、キリアンが止めるのも聞かずにエアリアが飛び乗った。振り落とそうとする馬と、暴れる馬を楽しむように乗り続けていたエアリア。

あのヒューペリオンを暫く暴れるに任せた後、彼は暴れ馬から飛び下りて、その前に立つという暴拳をやらかした。誰もが怒り狂ったヒューペリオンにエアが蹴り殺されると思った瞬間、ヒューペリオンはひととき鋭く嘶<sup>いなな</sup>きながら後ろ足で高く立って勢いを殺したのだった。みていた皆は肝を冷やした。それから彼は悠然と馬首を返すとエアリアには目もくれずキリアンのところに戻って行った。

エアとヒューペリオンの間にどんな言語が交わされたのかは知らないが、その後、エアはヒューペリオンには二度と乗ろうとしなかったし、ヒューペリオンは自らに触れていい人間をキリアンだけでなくエアリアにも拡大した。

「お前が馬が苦手なら、誰が馬に乗れるって言っているんだよ」

そういったカイに、エアリアは一瞥をくれて言った。

「私が馬が苦手なんて、誰がいました？ 馬が苦手なのは、エアリア・ロキメン殿……、あなたですよ」

「こんなときにふざけるなよ。エア。何の冗談だ？」

「冗談なんて言ってますよ。ロキメン殿。王命で処刑されるカイ・ユリウスが、監視を襲って逃げるんですからね。とにかく今回の死刑が王命つてのがミソなんですよね。全く。この国の警察隊は……」

顔色を変えてカイ・ユリウスを追います。たかが外国人の為に、無駄に広いこの国の国境を完全封鎖する手間まではかけないでしょうけれど、少なくともザッティバークの門は封鎖されます。そこから堂々と出て行くことはなかなか難しいです。でも、王名が入っている、エアリア・ロキメンを名指した追放命令書の持ち主だけは、諸手を振って簡単に門から出られます。彼がこんな奴を……」

それから革製の鞘にも白抜きされたロキメンの家紋の猪が踊っている短剣をカイの手に握らせるように押しつけた。

「これ見よがしに持っていれば完璧ですね……。誰だってエアリア・ロキメンだって疑いませんよ。ちよつと異国風にすぎる顔は問題かもしれませんが、私の母はコザですからね。方向は違っても、いかにもイサクという顔でなくても通せるでしょう……」

カイはエアリアが冗談を言っているつもりはまるでないことに気付いた。

「むしろ、ロキメン殿、貴方には不吉な四白と陰口を叩かれている愛馬に乗って、堂々と門を通っていたただかなくてはならない。エアリア・ロキメンが国境に向かって走っているという証拠になりますからね。そして、監視の服を着てここを抜けただけの、カイ・ユリウスは、どこぞに身を潜めて、震えていると……信じていてもらいましょう。支度はできました？」

カイは首を振った。

「俺はそれでいいとして、お前はどうする気だ？」

にこつと、見たものの殆どを魅了する笑顔でエアリアが微笑んだ。「それは、道々説明しますよ。時間がないので、簡単にしかできませんが。なぜ、私たちがテオの妹さんを殺したことにされたのかも、貴方は分かっているでしょう？ だから、全てが私の罪だと……貴方に言わなければならぬ。貴方の名を穢した。あなたの命を危険に曝した。カイ……私の軽率がミアヌ・カルラーラ殿の命を奪ってしまった。あの子に、なんの罪も無かったのに。可哀想に……」

取り敢えず、カイはぐったりと意識を失っている男の腕をへし折ると一方的で残酷な行為を平然としたエアリアに圧されて止まっていた手を動かし、彼が持参した服を素早く着込んだ。

「脱いだ服……ください」

「？」

何に使うか分からないままだが、エアリアのやりわりとした依頼の口調を装った指令に従う癖がついているのか、カイはその服を手渡した。エアリアは少しの間手の中であれこれ弄んでいたが、思い立ったように少し捻って紐状にすると奇妙な方向に伸びた腕のまみしろま身動きもしない男の首にそれをやおら回し、ぐいと締め上げた。意識がない男の口から、カエルが潰されるような、なんともいえず不快な音が漏れた。

とつさにエアリアの肩を掴んでカイは声を荒らげた。

「おい！ まさか、殺す気か？」

「しっ！ 静かにしてください」

険しい声音で短い叱咤の声が飛び、カイはその勢いに一瞬怯んだ。自分が知っていたエアリアはこんな男だったろうか？ 意識がないということとは、今自分たちに害をなさないと言うことだ。なのに、腕を折っただけでなく首まで締めるこの残酷さは、一体なんだ。

自然と眉間に皺が寄った。少し振り返ってカイの顔色に気付いたエアリアが、その険しくなっていた表情を弛めて、力なく微笑んだ。「……私だつて……好きでこんなことをしてる訳じゃないです。ただ、貴方に死を宣言した人が、陛下だつてことが……問題なんです。陛下が死を命じた人間には……、必ず死を与えなければならいんですよ……。この人が、動けて、傷一つ負ってないのに……。貴方がいない……。そうなったら、どうなると思います？ 逃がしたにしても、逃げられたにしても……職を追われるくらいならまだしも、この人の命で贖えといわれるかもしれない」

カイの口から妙に気が抜けた声が出た。

「そんなアホな」

「でも……事実です。貴方にやられて、身動きがとれなかった。誰がみてもそういう状態にしておけば、少しは咎めが軽くなる筈です……だから」

エアリアはもう一度ぐいと締めると、死んでしまうのではないかと思われるくらい固く、服を牢の格子に括りつけた。

「こんなもんかな。じゃ、行きましようか？」

エアリアが油断なく周囲を睥睨しながら、カイについて来るように促すよう顎をしゃくった。白夜が支配する、夏の王都ザッティバ―グに深い闇は無いはずだが、この牢獄のある建物の廊下は、蠟燭の灯火の下でさえ闇に支配されているようにカイには感じられた。その闇の中を、まったく躊躇いもせずに細いエアリアの影が滑るように走り出した。

外へとひた走るのがかと思うカイを裏切って、先を走っていたエアリアが、途中にあった階段を降りはじめた。

「どこへ？」

エアリアが黙っているというように人指し指を唇の前に立てた。そのまま指をちよいと振ってもう一度『ついて来るように』という仕草をすると、更に深い闇が支配する地下へと向かっていった。どうせ、このままでは無い命だ。闇を恐れるのは沽券にかかわる。カイは近くにあった窓から漏れている明かりの中に出るよりは『まし』かと思い定めて、闇に溶け込んでしまふ前のエアリアの背中を追ったのだった。

## 第六章 皇太子兄殿下

「デル・ヴィラン殿のおなりでございます」

マニ家の侍従が、この屋敷の主人と権力を恣ほしいままにしている現国王の愛妾である娘と寛いでいる居間の扉を遠慮がちに叩いて言った。貴人や目上の人の名前を直接に呼ぶことを非礼とする習慣から、豊かな化粧領の名前をとってローレシア殿と呼ばれているカレン・マニは、現国王が皇太子アル・マーシヨ殿と呼ばれていた頃、正妃として望まれてアル・マーシヨ夫人と呼ばれていた女性である。彼女は小降りな丸顔に愛嬌のある表情を豊かにのせることができ、その事がその魅力の大きな部分を占めていた。絶世の美女ではないが、人から好かれ、そして権力者の思い人という嫉妬を受けやすい立場でありながら、社交界の女性たちに好かれていた。

穏やかに話し手を見つめて頷きながら話しに耳を傾ける仕種しゅだけで、怒りや悲しみが和らぎ、嬉しさや楽しさは増していく。そんな希代の聞き上手が彼女の武器であった。

彼女は気難しいイルディス・デル・イサクにやんわりと意見を言うことができる数少ない人間の一人でさえあった。だからこそ国政においての重鎮であるこの家の主、ギース・マニでさえ、微妙な意見を奏上する前には、その娘カレンを通してイルディスの反応を確かめることを常としていた。豊かさでも森林と湖沼の美しさでも有名なローレシアは、王都ザッティバークとも隣接しているといつていい距離ではあったが、イルディス王の意向や、父のそのような思惑もあって、カレンは専ら生家であるマニのザッティバーク屋敷に起居していることが多かった。

この家で侍従がデル・ヴィラン殿と言ったのは、ギース・マニが



直系として大手を振って何処にでも出せる男孫であり、カレンが産んだ唯一の息子であるサーシアの事だ。幼い頃はカレンと共に住んでいたことでローレシア殿下と呼ばれていたが（今もローレシア殿下と呼ぶ人間も多い）、神に召されやすい幼年期を無事に乗り切ったことを感謝しつつ、大人として社会に出ることが許される証としての儀式である十五歳の初冠式（はつこうしき）の祝いとして正式にデル・ヴィラン領の主となった。王領ヴィランは、規模としては劣るものの皇太子領マーシヨに負けないほど豊かさを享受している。カレンにはサーシアを産んでから後に、三人姫君を出産したが、無事育つたのは一人のみであり、最後にまたもやサーシアの妹になるはずだった女兒を死産したあとは、イルデイスの寵愛著しいにも関わらず、懐妊の兆しは一向に訪れなかった。

ギース・マニは艶福家で、カレンにも兄弟にあたる人間は多くあったが、子どもの多くが母親の下で育つイサクにおいては、異母の兄弟たちとの交流は年に数度の集まりくらいであって絆を感じることは殆ど無かった。

ギース・マニにとって、カレンは他の子供とは別格の思いがある。幼い頃から愛くるしさで父を虜にし、長じては国王を虜にすることで父を益してくれる。しかも彼女自身が年を重ねても愛嬌を失うことなく、その魅力は増しこそすれ一向に衰えないのである。この先で万が一王の寵愛が失われる事があつたとしても、ギースは父としてカレンを愛することは止められないだろう。その上、彼女が産んだ子の中で無事に育ってくれたたった二人の孫が、また祖父の欲目を割り引いても人並み外れて優れている。

カレンによく似て、そのふつくらした頬の線が年より随分と幼く見せてはいるが、その立ち居振る舞いの優雅さで人目を惹くルーツィア。彼女はおっとりとした話し方にも関わらず、賢さが滲み出る一級の話術の持ち主であり、祖父マニと母カレンの権勢もあつて絶世の美女というのではないが、社交界の華として咲き誇っている。

もちろん、求婚者が引きも切らないが、適齢の青年たちにギース・マニに思惑があるのか何処に在るのかを悩ませるように、未だ婚約者はない。

そしてもう一人の孫が、デル・ヴィラン殿こと、サーシア・マニである。武道の腕前は心許なく、戦略的思考とも縁がなく、数学が趣味という変わり種ではあるが、母親の穏やかな気性とイルデイスのやや尖っているものの美丈夫と言って差し支えない容貌を、濃く受け継いでいる青年だ。彼の聡明さは、彼が人の上に立つことを当たり前と周囲が持ち上げたところで奢るという愚を遠ざけていたし、血腥い方にはからきし無力だが、そんなものは守られて当然の立場であれば瑕疵かしというほどのものでない。むしろ文官を重んじ、武官を軽んずる風潮のあるイサクという国においては、貴人である彼が、そのようなものと無縁なことを当然と受けとめられていた。

部屋の扉を押さえた下僕を突き飛ばす勢いで部屋に入ってきた青年を見て、この部屋の主が眉をひそめた。小振りな丸顔に愛嬌をたつぷりのせ、気難しい王にわがままを言える唯一の人物は、そんな風に顔を歪めてさえ愛らしさを身にまとうていた。

「デル・ヴィラン殿下。なんですか、その振る舞いは。いつも冷静沈着と皆さまから評判をいただいているのは、妾わたくしに対する『お世辞』に過ぎないのですか？ 成人した殿下に妾わたくしごときがいつまでも母親面で申し上げるのは無礼でしょうが、貴方が人から敬われるのは、一重に陛下の恩寵あつてのことで、殿下のお力ではありません。そして、この屋敷で働いているものは皆、妾わたくしたちのために心を尽くしてくれる者ばかりです。なにより年長者に対する労りもないものに、貴方を妾わたくしはお育てした覚えはございません。マツテオに謝罪なさい」

サーシアに押されて軽くバランスを崩した老いた下僕は、ローレシア殿の言葉に恐縮した。

「ローレシアさま。そんな勿体ない……」

ばつが悪いというように苦笑しながら、サーシアはその母に頷いてから老僕に向き直った。

「すまなかった。マツテオ……」

顎を軽く引いただけのお辞儀というには横柄なしぐさだったが、それでもマツテオ老人には感激に値することだった。老人が膝をついて最敬しようとするのをサーシアは手の動きで制止してそれ以上の時間つぶしを嫌うと、母親に向き直って膝を折った。

「母上ではなく、ローレシア殿にお願いしたきことがございます。

お聞き届けただけでしょうか？」

カレン・マニはすこし間をとってから、ゆつたりとした口調で答えた。

「母としての妾に願いをかけられたのであれば、どのようなことであつても聞き届けるとお約束できましようが、ローレシアとしての妾……つまり、陛下になにか願い事をするためにお使いになりたいとおっしゃるのでしたら、お話を聞く前に約束できるか否かを申し上げる事は、よう致しません」

サーシアは普段であれば、母のそのような不確かなことを安易に口にしない理知的な答えが好きなのだだったが、今日ばかりはそういう言い方にいらだちを感じた。カレンのもってまわった言い方を遮るようにして、言葉を突き出した。

「お聞き及びでしょうか？ エア……いえ、エアリア・ロキメン殿の事件について」

カレンは少しの間、自分を見つめてくる息子の視線を受けていたが、やがて、軽く一つだけ頷いた。サーシアがそれを見てから深く頭をさげた。

「エアが……いや、エアリア・ロキメン殿が、親友であるテオドル・カルラーラの妹御を辱めて殺害したなどというのは、ありえません。なにかの間違いか、何者かが彼を陥れようとして仕組んだことに違いありません。是非のご再考を陛下に……父上にお口添えく

「ださいませ」

ひざまず 跪いて深く頭を垂れた息子の背中をカレンは、しばらくの間じつと見つめていた。

「なぜ……そう思われますか？ 愚かで卑劣な犯罪の、紛れもない証左が残っていたというではありませんか」

「だからこそ、おかしいのです。彼はとても頭が切れるのです。もし彼がミアー又嬢を欲情のままに殺してしまうことがあったとしても、彼が手を下したのであれば、まだ彼女は見つかつていなかったでしょう。行方知れずで、カルラーラ殿に心労をかけていたとしても、このように早くに死をあき頭かにはしていなかった筈。あのような杜撰は、あのエアには似合わない」

顎だけ上げて睨むように母を見つめて、サーシアが言葉を注いだ。  
「サーシア……」

珍しくカレンが直接、息子の名を呼んだ。サーシアの目がそれで思わず和らいでしまったほど、久方ぶりの事だった。

「エアリア殿を妾は存じあげません。そなた……エアリア殿と、学校で？」

「あれほど、口が悪い奴は珍しいですが、それと反して、あれほど決然として気持ちがいい男は滅多にいません。彼の言語の対する才能は特に出色で、異国から取り寄せた書物を扱いかねているとき、いつも頼るのは彼でした。それに彼は人の体というものをよく知っていて怪我をしたり無理をして痛めたりする者を癒すことに怠惰だったことはない。彼は人を生かすことを使命としこそすれ、傷つけたり殺したりなど……」

「サーシア。貴方が……それほどまでに、仰るほどの……人物なのです」

カレンは少し間を置いてから、徐ろに口を開いた。おもむ

「私の誠意を尽くして……、サーシア、貴方のその言葉をお父上にお伝えはいたしましょうが……」

「陛下をそのようにお呼びなされるとは、お珍しい」

親子の会話を聞いていたギース・マニが言葉を挟んだのに、少しだけ視線をふってからカレンは微笑んで改めて息子に向き直った。

「陛下は……」

父上という言葉をそう直してカレンが続けた。

「ご自分のご裁断を変えることはおそろくありませんでしょう。

何故なら、国王というものの威光を示すには、陛下のご裁断は神のご意志と同列に絶対と扱われることが大切だと思われるからです。陛下がまだお若き頃、隣国マヴァルに侵掠を許さないためには陛下が絶対者となり、国内で派閥に分かれて国力を削ぎ合う事態を集束されることが何より必要だったのですよ。貴方には分かりますね。他のどのような種類の人間が陛下を『残酷王』と蔑もうと、ご弟妹全てを排されたのは偏に我が国イサクの平和のため。私利に走り外道に堕ちたものではありません。妾とデル・ヴィラン殿だけは、陛下のお苦しみを理解して差し上げなければなりません」

サーシアの瞳がひたとカレンのそれを射るように捉えた。

「母上……。何をおっしゃりたいのですか？」

「貴方がエアリア・ロキメン殿と親交深くあつたと陛下がご存じでさえいらつしやったら、あの様なご裁断を下されることは無かつたでしょう。貴方が保証したようにロキメン殿が無実ですらなく、卑劣漢に他ならなかつたとしてさえ、貴方の為にカルラーラの訴えを退けることなど造作もないこと。けれど、もう陛下の御名において、あのご判断、ネルガルからの留学生の死罪とロキメン殿の永世追放は公にされています。陛下はご自身のお言葉が絶対というこの国の在り方を万難を排して打ち立てられました。この国を外国から見たとき、磐石の一枚岩と見せるために。張り子であつても、そう見えるために。お分かりですね。妾は……、貴方のその願いをお伝えするのも、ローレシア殿と呼ばれる身としてはすべきでないと心得ています。貴方はローレシア殿としての妾にそれを願うと仰いました

けれど、了見違いですよ。私は貴方の母故に、父上に貴方のお気持ちを  
お伝えいたしました。陛下が国王としての判断をなさるならばあのご判断は動かしはなさらないでしょうが、息子の愚かな願いを叶える父として振る舞われる可能性も有るかもしれません。イサクの他国から畏れられ、一目置かれる冷酷王としてはあつてはならない事だと思いますが……」

サーシアが崩れるように跪いた。ひざまず肩が傍目にわかるほど激しく震えていた。床に打ちつけるように拳を叩きつける気配を見せたが、寸前で気持ちを制し、そつと拳のまま床に両手を着いて首を垂れた。「愚かな我が儘を申し上げました。母上は、ローレシア殿としてのお振る舞いをなさるべきと、デル・ヴィランとしての私は言うべきです……ね。私は……、エアを見捨て、カイを見殺しにするという負い目を生涯抱えて参ります。どうぞ、私の願いは母上のご胸中にお留めおきくださいませ……」

絞り出されたような声は、悲痛だった。顔をあげることができないのは、おそらく己の無力に打ちのめされたからに違いない。

「お辛い……でしょうが、貴方がそのようにイサクの利を私情の上に置かれることをご決断なさったことを、妾は誇りに思います。落ち着かれるまで、ゆつくりとされていくと良いでしょう」

カレンがギース・マニを促して、共に自分の居間にサーシアだけを残して出て行った。

老僕マツテオが気づかわしげな一瞥をサーシアの背中にやってから、静かに扉を閉じた。しんと鎮まってしまった廊下を歩きだしたカレンの耳を突き刺すように、獣が唸るような、地の底に深く怨嗟を吐き出すようなサーシアの号泣が届いたとき、彼女は少しだけ歩みを止めた。しばらくの間、その声を身に染み込ませるように立ち尽くしてから、もう一度、自らの父・ギースを見やって呟いた。つぶや

「お父さまが危険と仰っていた意味が、漸く分かりましたわ。……あれに……あのような泣き方をさせるだけの……器量を……」

ギース・マニが頷いた。カレンがほつと吐息を漏らして続けた。  
「皇太后さまが……殿下にさえ……下さっていたなば……どれほど心強かったでしょう」

「ローレシア殿。それをお口に出されてはなりません」  
カレンがにつこりと微笑んだ。

「分かっております。お父さま。私は殿下のお為なら……死して地獄で劫火に焼かれようと悔いはありませんのよ。お父さま……。地獄で一緒にいたしましょう」

ギースは自慢の娘の瞳に宿る闇色の炎を、ぞつとする思いで見返した。

確かに、孫であり国王の長子であるサーシアが、マヴァルの血を継ぐ現皇太子を抑えてイサク至高の玉座に座するには、軍門を統べるロキメンに繋がるエアリアという青年にこれ以上自由に羽ばたく翼を与えてはならないだろうと、そう語ったのは己だ。

ギースは、甘かった。母親という業が、自慢の娘をして畜生ちくしょうへ傲然と走らせ得るものだとは思っても寄らなかったのだから。

あの優しくたおやかで、嫉妬という感情にすら無縁と見えた、虫すらも殺せないと思っていた娘・カレンがとった行動は、ギース・マニが思いもつかなかったほど残忍なものだった。

交友範囲が異常に広い『人たらし』のエアリア・ロキメンと、豪商カルラーラの総領息子が誰からも親友と目されている事を調べた上で、その妹であるカルラーラの一人娘を人を使って凌辱し惨殺、金だけで請け負ったならず者たちをも、高報酬な仕事の成功に気分よく飲んでいた酒場ごと焼き払わせたというのだ。たまたまその店に居ただけの、まるでこの事件と関わりのない市井の人たちもろともだ。

その行動だけでも充分恐ろしいが、十五にもならない罪もない娘

を凌辱し殺すような外道には死　極刑をと、涙ながらに国王イルデイスに迫っていた姿は、一層もの凄。真相を知らなければ、優しいカレンでさえ死を望む程に、エアリア・ロキメンの罪は重いのだと信じてしまったかもしれない。けれど、カレンがあれほど執拗にその死を望んでも、イルデイスは証拠不足であるし、エアリアは五大家ロキメンの仮にも長子なのだから、たかが町の少女一人を殺した程度では死罪は重すぎる……国外追放くらいが丁度だろうと、カレンの望みを退けた。

国王陛下に、エアリア・ロキメンの処分撤回をお願い申し上げるだつて？

王の執政に関わり合う者たちから、『手段を選ばぬ』と恐れられているギースをして、カレンのサーシアへの態度は心胆寒からしめた。どの面さげて、あのような言葉をすらすらと舌に乗せられるというのだろうか。

あの狂ったように、<sup>ケタモノ</sup>獣には石打ちか八つ裂きが相応しい、国外追放など甘すぎるとイルデイスの決断をサーシアの望みとは逆の方向に撤回させようとしていたカレンの姿を直<sup>しか</sup>に見ただけに、ギースはあのような言葉でサーシアを封じたカレンが心底恐ろしかった。母親というモノになったとたん、女という生き物には、我が子以上の存在はなくなってしまうのだろうか。

所詮男であるに過ぎないギースには、カレンが理解できなかった。ギース自身に我が愛娘カレンが産んだ孫であるサーシア・デル・ヴィランが皇太子であるべきだという思い　憤懣とでも言うべきそれ　があるだけに、黙っているだけだ。

サーシアは国王イルデイスの第一子であるからだけでなく、優れた気質を持っている。しかも彼が生まれた時にはカレンは紛れもなく神に正当に認められた正妃であった。それは紛れもない事実だ。だが、そういう目で改めて思い返してみても、今更ながらに愕然と



した。現王妃であるロイゼ（薔薇）の宮の庇護がいくら薄いとはいえ、セレン（妖精）殿（皇太后・タチアナのこと）があれだけあからさまに肩入れしてさえ、皇太子に全くと言っていいほど後ろ楯になろうという野心家が近寄らない事実の裏に、我が娘、カレンが暗躍しているのではないだろうか。

皇太子を断固として退け、皇太子兄などという馬鹿馬鹿しい呼び名に甘んじている息子に当然の権利を取り戻そうという強烈な意志を、驚くほど狡猾に動くことで全うさせる気であるのだろう。憤懣（ふんまん）がありながら、日頃の政治に忙しいという理由付けをして具体的には何もして来なかった自分とは違い、カレンは皇太子へ連なる全てを勤勉に排除する行動をとり続けているのかもしれない。ギースは今回の事で娘を　　というより、母親という生き物を　　恐ろしいと思うようになった。

小柄で丸顔。微笑みをたやさない、お優しいローレシア殿。評判の良くできた女性。高貴の女性に相応しい振る舞い　　ロイゼの宮（代々正妃が占めてきたザッティバーク宮殿の南西に位置する建物）を追い出されてローレシア宮殿で満足できるほど控えめな女性。文句を言わず、嫉妬で狂わず、いつも王イルディスこそが輝いて見えるように気遣いをするカレンは、国政に関わっているような人種の男たちからは拳（こぶ）つて褒めそやされる。

後宮向けの特異なものとはいえ、女だけで構成される近衛隊すら持ち、貴族の女性も乗馬（馬車でなく！）を嗜むような下品なマヴァルと違って、イサクにはイサクに相応しい王妃が必要だ。まさにそうなるべく生まれた女性の鏡であるのに、国のためにマヴァル女にロイゼ宮を取られてお劳しい……という訳だ。

カレンは、女性は一歩も二歩も男の後ろを歩くことを是とするイサク気風を逆手に取って、そういう評判を自らに呼び込んでいる。ロイゼからローレシアという名札の変更など、我が娘・カレンはき

つと屁ほどにも拘っていないだろう。イルデイスの寵愛にも恐ろしいまでの自信があるに違いない。ギースは思った。

ただ、息子が皇太子位を追われたことだけは許せないのに違い*ない*。けれどそんなことで単純に逆上して皇太子に刺客を放ったり、公然と正妃に喧嘩を吹っ掛けるほど政治を読めない愚か者ではないのだ。イルデイスより年長の、しかも名うての戦巧者マヴアル王が、もう少し暈けてくれれば、もう少したやすい相手に堕ちてくれる。そうなって初めて、いつでも心置きなくウイルディーンを安心して殺せる。きっと、そう思っているだろう。今はまだ早すぎる……と。

だから、カレンは陰ながら皇太子や王妃が殺されないよう（ましてや自殺などされないよう）心配りせざるを得ないギースの邪魔にはならない。花の宮殿と呼ばれる美しいローレシアの庭に咲く花陰で、じつととぐるを巻いている。ただ今度の事で、その眠れる蛇は己の鎌首を擡もたげ始めたのかもしれない。来るべき日が……皇太子位を我が子に取り戻す日が、近付いていることを敏感に察知して……。

誰もが愚かと断ずる皇太子アル・マーシヨ。王立学校で教鞭を取っている『教育者』という看板を背負っているかのような友人にすら『掬すくいようのない……』と言せてしまうほどの度を越した愚かさ。それは彼が自ら選び取った愚かではなく、カレンがそうなるように（我が子を聡明に導くのと同じくらい熱心に）追い込んだ愚かさなのかもしれない。

仮にそうであつたとしても……。

アル・マーシヨがそのように公然と愚かであることは、サーシアにとつただけでなく国にとつても望ましい。ギースは別の意味で心を引き締めた。マヴアル王は我が君イルデイスが必死に保とうとし

ている『冷酷』の仮面を必要としない程に冷酷を体現している。

開戦の口実　イサクへの軍事侵攻の大義名分を心から欲して、幾度となく娘と孫を殺すべく刺客を放ってきている。ロイゼ殿アンヘラか、皇太子ウィルデーン・アル・マーシヨがこの国で変死を遂げたら、即刻攻め込んでくるだろう。

エアリア・ロキメン。年端もいかないほんの少年の頃から、幾度となくマヴァル王が執拗に放ってくる刺客から皇太子を守りきった青年だ。一度は自らを盾にしてまで使命を全うしようとし、死にかけてさえいる。ラジエイラに仕込まれた暗器あんきの使い手だとしても、子どもが大人の刺客と互角にやりあうなど、そうそうできることではないだろう。いつそ見事と言うしかない。

だからこそカレンがエアリア・ロキメンを皇太子アル・マーシヨから剥ぎ取ったのは、時期尚早だったのではないかという懸念が、ギースには拭いきれない。今暫くは皇太子が生きていることが必要だ。

忘れたところにぼつぽつとやってくる刺客の数が、このところ妙に増えてきている。年を重ねるにつけマヴァル王のイサクへの野望は露骨さを増している。

獅子と恐れられたマヴァル王は、かつて壮年の雄々しい時代に、若輩のイルデイスを侮ったゆえに、絶好の開戦の機会を逃した。今は迫り来る老いに追い立てられながら、イサク併合の野望を最早隠そうともしていない。

北国のイサクは穀物の収穫量に乏しい。マヴァルの国境に沿って展開されている穀倉地帯の恩恵なくして立ち行かない。首都ザッテイバークまでは攻めることが叶わなくても、国境に建造されている長城をほんのすこし北に押し上げるだけで、イサクなど事実上殺す

ことが可能なのだ。マヴァルとの境には山も森林地帯も大河もない。逆に言えば、逆に国境を南下させることができれば、イサクにとっては常に寄り添っている飢饉の恐怖を、かなり低減させることができるのだ。だから体力さえあれば、開戦はイサクでも望むところなのだ。が、あざ笑うかのように最近天候不順が続いていて、穀物の備蓄をじわじわと食いつぶしている。あと数年このまま推移すれば飢饉という非常事態を迎えかねない。十分に食うことができない農民の手から鋤を取りあげて槍をもたせたところで戦力になどなりはしない。イサクでは軍事に専従するものは口キメンに連なる僅かの手勢のみで、いざ戦いとなったら農兵が基本になるしかないのだが、豊かなマヴァルは兵士専門の手勢を平時でも食わせていくことができる。しかも、マヴァルの連中は皆、四本足か思うくらいに騎馬に長けている。農具しか普段持たない歩兵と、軍事訓練が行き届いた騎兵が勝負になる筈がない。

先々代の王が国民の怨嗟を買いながらも長城建造を断行したことが、今もイサクを守っている。馬は猿でない。高い塀は登れない。単純だがこの上なく効果的な守りだ。

そして、先代王ダナエは、その農兵が中心のイサク、長城に守られた臆病なイサクを改革した。乗馬をよくするのが貴族であるが、その機動力を著しく削いでいた農兵をすばやく移動させるために、馬に牽かせる戦車を大規模に導入した。そしてそれを最大限に活かすために、道路網の整備を邁進させたのも先王のダナエである。

製鉄の技術を持ち、独立独歩の気風が高いノキアの民をかしずかせようとして果たせず、ノキアの民でいることを選んだものを完膚無きまでに破壊し尽くしたのもダナエである。

腹違いというだけでなく、実母を共にする弟妹の全てを惨殺し、マヴァルの姫を娶り、『残酷王』などと評判の高い現王イルデイスであるが、実のところ即位以来ずっと、他国への侵略、他国からの

侵略を外交の駆け引きだけで断固排斥してきているのだ。

貴族や他国からの悪評にもかかわらず、戦火に怯えずに、平和を享受できている平民たちにとって、紛れもなくイルディスは名君なのである。

それはともかく      エアリア・ロキメンだ。ギース・マニは思う。

娘の溜息ではないが、失うには惜しい人材だ。イルディスが珍しくカレンの泣き落としに屈しなかったのも、無骨で裏表のないダン・ロキメンを、人間の裏表に辟易<sup>へきえき</sup>している陛下が愛でている証左だろう。漏れ聞いてきたエアリアという青年の噂を思い返す度、逸材だったのではという思いが拭えない。

ダン・ロキメンが豊かとはいえ平民に過ぎないカルラーラに土下座で謝罪していた姿が蘇る。あの単純な男は、カレン程度が仕掛けた罠と見抜けず、己が息子がそのような卑劣漢だと本気で信じているのだろうか。梅檀は双葉より芳しいという言葉がある。人を介して聞こえてくるエアリアという青年の振る舞いは、まさに匂い立つように清冽だ。その息子を信じ抜くことができないほど知らないのであれば、ダン・ロキメンも気の毒なことだ。

あのような形で無理やり排除する前に、一言相談してもらいたかった。彼を手の内に取り込めるかどうか、試すだけでもしてみたかった。本当に……惜しい。

ギース・マニの耳に、今もサーシア・デル・ヴィランの血を吐くような響きを持った号泣が聞こえ続けている。現王イルディスの息子、宰相であるギースの孫、その看板におもねって追従<sup>ついで</sup>を言うに、良心の呵責を覚える必要がないほど優れたあの子に、あんな涙を流させることができるというだけで、ついで直接まみえることが無かった青年の人柄がわかうと言うものだ。

まったく、一度、会ってみたかった。カレンも……せっかちなことだ……。

偽りでなくギース・マニは思った。

## 第七章 闇の中で

闇の底沈んでいくかのような細い長い階段を降りていく。裸足の足の裏が、ざらざらとした磨かれていない石の表面を感じていた。目の前を確信を持った足どりで進んでいく友の後ろ姿が見えなくなったら、自分は進退窮まる。勝手が分からない地下の闇の中で、一人取り残されるのは、あまり楽しくはないだろう。牢から抜け出した安堵で、暢気にも空腹を訴えだした腹に少し待ったをかけつつ、ユリウス・カイは、雲が空を滑るような何気なさで闇が充満した階段を素早く下りていくエアリアを必死で追った。

エアリアは闇に動く事を意識してか、黒い髪すらも覆うフードが付いた柿渋色の上着を着ていて、少しでも距離が空くと容易に闇に融けて行きそうだった。見失うことか怖かった。エアリアに着せられた生成りの上衣は、逆にやけに白く浮かんで見えて、自分一人だけが闇の中で目立っているような気がする。

階段はどこまでも下っていくように思えた。明かり取りというより空気抜きのために空いているのかもしれない壁の隙間から切れ切れに漏れてきていた光が、やがて完全に死んだ。そうなって初めてエアリアはやつと歩みを緩めて立ち止まった。それから少しの間、壁を手で探っていたが、やがて何か見つけたらしく、程なくして火打ち石が打ち合わされる音がした。

僅かな、本当にささやかな明かりだったが、質量を持っているかのように全てを支配していた闇が、ふっと軽く和らいだかのようにだった。エアリアが手にしていた奇妙な形のランタンの中には、半球を組み合わせたような金具が取り付けられていて、彼が無造作に傾けても炎がちゃんと行儀良く上をいつも向くらしい。あまり見掛けないその造りがカイには面白かった。

ランタンに照らされたエアリアの、袖の先から伸びている腕が、妙に艶を帯びて白く闇に浮かんでいた。

その白さに故郷での友ハルキーヤスの蒼白い顔が、ふと思い出された。病弱で、太陽にあたっただけで熱を出し、地図を見つめる瞳は大きな世界を見つめている癖に、自室の窓には紗を張って陽の光を和らげるのが常だったハル。彼の瞳は直接光りあふれる世界を見ることも出来ない。白は、カイにとって病気を連想させる色だった。だから普通の男のように、女の滑らかな肌を彷彿とさせるエアリアのそれを艶<sup>なまめ</sup>かしく感じる感性に完全に欠如していた。しかもエアリアはハルとは違って最初からこんな色ではなかった。

（エアの奴、どこか悪いのを隠してるんじゃないか？）

それはここのところ常にカイの心の何処かに引っかかっている心配だった。剣の会で、学舎で、生活寮で、エアリアはいつも近くにいた。が、去年の冬……いや、もう少し前だったかもしれない、その位から、彼はずっと変だ。感情が安定しないというか、もともと言葉遣いは綺麗な方ではなかったが、言い方にやたらと棘<sup>とげ</sup>があるというか、辛辣<sup>しんらつ</sup>に過ぎるなど感じることも多くなった。

キリーの愛馬ヒューペリオンに挑んでだときもそうだったが、朋友会の連中と寮の屋根を駆け抜けてられるかどうか賭をして、実際に鮮やかに走り抜けて見せ、ついでは寮監に見つかって大目玉を喰らったのも春ぐらいだった。以前の彼からは考えられないような悪ふざけをする。他の連中はエアが羽目を外しているだけだと見ているが、自分には何故か自暴自棄になっていようにしか見えなかった。

合戦のときの罨の駆け方が反則スレスレのあくどさを持つように



なったのもその頃からだ。暗い憤りが、穏やかを繕っているエアの笑顔を引き裂いて垣間見える。

短い夏の間の楽しみである水練のこともそうだ。エアが下履き一枚になって、魚のように水を掻き分けてグイグイ泳いでいくのは見ていて気持ちが良かった。南の港町に育ったカイにとって水練は、この辺りの連中が四つ足の馬に気軽にまたがるのと同じくらい、それこそ呼吸するのと変わらないほどたやすい事だ。けれどこの国の連中には、なかなか辛いらしく、エアほど上手く水と馴染む者はあまり居ない。実際、カイの故国に棲息している、幼なじみの河童カッパどもの中に投げ入れても、決して見劣りしないだろう。なのに今年の夏は、そのエアが水に一度も入っていない。病人は水に入るのを嫌う。熱が高いとき、ハルは風呂どころか洗面盥たらいにも近寄らなかった。水練どころか彼は、夏の間、ターバンまでは巻いていなかったものの、ずっと砂漠の男たちが着るような、ゆったりと全身を覆う、女が履くスカートにも似た服をいつも着ていたのだ。北国の男たちは、日焼けの怖さを知らないから、夏の間は思い切りよく脱いで太陽を楽しんでいるものだ。エアリアだって、前はそうだったはずだ。それが陽に当たることさえ負担になっているのなら、彼の不調は只事ではない。

「エア……」

おずおずとカイは口を開いた。フードの所為で闇に融けていた頭が振り返つてくると、白い顔が幽霊のよう浮かんで見えた。

「こんなところで聞くことじゃないだろうが……」

「だったら、聞かなくても良いでしょう？」

エアリアの即答は、普段のカイであれば続きが言えなくなるほどそっけなかったが、今のカイはそれで怯んだりしなかった。自分にはエアと過ごす十分な時間が残されていない。気がかりは少しでも解消しておきたいという思いが、言葉を次がせた。

「お前……何か、隠してるだろう……その……体のことで……」

その一言を口に出した途端、エアリアの形相が激しく歪んで凍りついた。その顔つきのまま、カイを睨むように見つめたまま凍りついてしまう。そのまま暫くの間時間が無為に通りすぎた。口数が多いエアリアにしては珍しいことだ。流石にカイの方がそのゴツゴツした沈黙に耐えられなかった。カイはエアリアから言葉が返されるのを待たずに続けた。

「俺はテオと違って繊細じゃないが、だからって……何も見えてない訳じゃない……」

エアリアはカイの目をただ凝視していた。やがて呼吸が荒くなった。その肩が不自然に上下している。

と、突然。

エアリアは体ごとくるり回ってカイを無視すると、ランタンを投げ捨て、拳を作って猛然と石の壁を叩き出した。まるで手加減していないのだろう。二、三打を待たずに、カイの頬にまで当たるくらい激しく血飛沫が散った。その唐突な荒れように慌てて、カイは石壁に向かって虚しい喧嘩を売っているエアリアを、背後から抱きすくめるようにして羽交い締めにした。落とされて尚、火が消えないとは『このランタンは凄い』などと頭の何処かで妙に暢気に感心しつつ、尚も打つのを止めそうもないエアリアの手首を、カイは掴んだ。

「エア、頼む。人間の行動をとってくれ。ランタンが壊れたらどうする気だ」

その懇願を完全に無視して、尚も暴れようとするエアリアを制するために力を入れて、カイはぞっとした。柔らかいのだ。学内でこそ、晩生扱いオクテされたり、朴念仁扱いされているカイだが、享樂的な

南国出身の男として、故国にあるときはそれなりに場数を踏んでいる。

学業第一、遊んでいる暇などないと遠ざけてきた女。そのどこか懐かしい、男の正気をからめ捕るあの肌触りを思い出させるほどに柔らかかった。細い男だとは知っていたが、この手触りはおかしい第一、こんなに華奢な手首をしていただろうか。掴んでいる指が、ずぶずぶとめり込んでしまつて簡単に握り潰してしまうかもしれないと怖くなるほどに。

「放してください。カイ。貴方はデカすぎるんです。鬱陶しい」  
カイの腕の中で暴れようとするエアリアの力は、まるで頼りない。簡単に制することができる。

「壁をこれ以上殴らないと約束するまで、誰が放せるか……」  
カイが言つと、エアリアは首を激しく振つた。

「知つてて……、気付いてて……、皆が嗤つていたつてのに、冷静でいられますか。いい加減……いい面の皮じゃないですか……。滑稽すぎ……ます」

これだけは断言できる。誰もがエアリアには一目置いている。たしかに彼は人目を惹き付ける。これだけの容姿の持ち主だ。誰だつて男にしておくのは勿体ないと言つたろう。けれど、それだけで一目も二目も置かれていた訳ではない。

合戦を采配するときの確かな目、的確に彼の意図を伝えてくる洗練された言葉。少しでも体に不調があれば、間違つことなく指摘してきて、そればかりでなく手当ての心得まである。

無骨という言葉がしっくりくる風でいて実際の処、どこまでも享乐的な南国の気質が底辺にあるカイは女好きだ。けれどいわゆるイサク名物たる男色の徒にはエアリアはご馳走と映るらしく、彼と一緒に町などを歩くと、よく意味は分からないが下品であることは間違いない種類の野次が投げられてくる。

けれど、エアリアを直接知っている人間で、そのような無謀を平

然と犯すやつはいない。女扱いされるのは彼の矜持をえらく傷つけるらしく、その報復はエラク露骨なのだ。

剣の会の重鎮である、あのデュカスが『細っこい奴はすっこんでろ』と口を滑らせて痛い目にあつた。男らしさを強調しているらしい自慢の髭に、金糸で刺繍が入ったりリボンを編み込まれたのだ。

細かく編まれて絡まってしまったリボンを上手く解ほどけず（激怒して手が震えていたからか）、沸騰せんばかりでいた本人に向かって『とても良くお似合いですよ。でも剣の会はオカマの集まりだなどと陰口を叩かれると迷惑ですから、女みたいな奴はすっこんでろ……ですね』などと、デュカスの使った言葉を態々（わざわざ）選んで、口調まで真似をして微笑むのだから大したタマだ。

デュカスにしても、現行犯でとり抑えたのなら半殺しにでもできただろうが、本人でさえいつされたのか分からないのだから、報復しようが無い。皆が触らぬ神にとばかり言わなかったのだが、あの時デュカスの後頭部には小さな薔薇の蕾が揺れていた。いくらなんでもあんなものが自然に髪に絡みつく訳がない。

結局、あれについてはエアリアに一本だということでは皆が一致している。誰だって、気がつかない内に、リボンだの薔薇だので持ち物や自分自身を飾られたりするのしづむは御免被るといふものだ。

まあ、それはそれとして。

「誰もお前の事を嗤ってなんか居ない」

カイが宥めるように言ったのを、エアリアは取り合わなかった。

「嗤ってないなら、気味悪がつてたか？ 言えよ。カイ。お前が掴んでいるこの手だよ。まるで海鼠ナマコじゃないか。気持ちが悪いだろ……。見苦しい……」

言われてみて、気付いたが、その皮膚に毛が殆ど生えていない。どこまでも柔らかくて、つるんとしていて、言われてみれば確かに海鼠に似ていなくもない。

「海鼠か……。なるほど」

そのカイの言いぐさに、エアリアが凄んだ。

「どうしてそうあっさり納得するんですか。『そんなことない』って、普通言うでしょ。この場合」

「……そうか。スマン。そんなことない」

このカイの素直すぎる返答に、エアリアは今度はがっくりと脱力した。しんどいほど重くもなく、かといって空気とは違う確かな重みが、胸に掛かってきた。その感触が妙に心地好い。カイは自分が感じてしまった妙なざわつきを、頭を振って頑張って否定すると、エアリアの手首を握り込んでいた掌をそつと開いた。暴れる心配はもうなさそうだ。

頼りない明かりの中で見えるエアリアのほの白い手首が鬱血している。自分の指の形がクツキリと痣になっている。痕がつくところを見ると、確かに海鼠じゃない。自身の掌を見ると、暗闇が色を分からなくさせていたが、エアリアの破れた皮膚から溢れ出た血が、ぬらぬらと光っていた。カイの胸から滑り落ちるように抜け出て、エアリアが階段へ座り込んだ。そのまま頭を抱え込んで情けなさそうな声をだした。

「……勘弁してください……。よ。カイ。折角、隠しきれてると……信じてたのに。それはないでしょ……。まったく……。とんだ道化だ……。で、皆、何時から気付いてたんです？」

皆という言葉にカイは肩を竦めた。

「皆は、気付いてないと、思うぞ……」

キツと、エアリアの頭が一瞬上がった。

「あのね、カイ。お前さんくらい鈍いのが気付いてたら、誰がどう考えても、皆が気付いてるでしょ……。で、その抜群に鈍い貴方でさえ、何時頃から気付いたっていうんですか？」

えらい言われ様に腹が立つてもいいところだが、いつもの口調でポンポン言われると、間違いなく自分がよく知っているエアだと確

信できて、逆になんとなく安心できるのだから不思議なものだ。奇妙なざわつきが少しだけ落ち着く。

「水練だよ。夏、河童のお前が水に入らなかった。風邪をひきこんでる訳でもないのに、異常だろ？」

「それだけ？」

拍子抜けしたようにエアリアが呟く。

「充分だ。海鼠は白くないけど……そこまで色が抜けてるのも……奇怪しいだろ？ お前、本当に……」

どうした、という言葉を言う前に、エアリアの言葉が遮った。

「覚悟はしていた……筈なのに、だめだ。どんなに頑張って鍛練しても、全体が腑抜けていくんだ。力が入らない。体が……どんどん崩れていく。毎日、体が悲鳴を上げるほど使い込んでやって……この様だ。もう、お前の腕一つ、振り払えない。情け無く、涙が出てきそうだ。こんなんで……デインさまをどうやってお守りできるんだ。後悔はしないと、誓った……のに。毎日が地獄だ。自分の気持ちまなんてものは、まるで自由にならない。情け無いもんだ……」

カイもそのままエアリアより二段ほど上に座り込んだ。自分たちは牢を破って逃げている筈なのに暢気だという気もしないではないが、話にはの勢いというものがある。

「しかも……私は致命的な失敗をしちまったらしい。テオにも申し訳なさ過ぎて、顔を見る自信がない……正直。何時から何もかもがどうしてこう皆、狂っちゃったんでしょう。私がしたことは……間違っていたのですか？」

エアリアの言葉にどう応えて良いか分からず、カイは取り敢えずの疑問を口にした。

「エア……。ミアー又ちゃんの事を説明してくれると……。言つてたな。丁度いい。今教えてくれ。俺はあの子にそんな酷いことはしてない。自分のことは自分で分かるからな。お前にだつて出来ない筈だ。なのに、何で犯人が俺たちなんだ？」

「私には出来ないつて、そんな身も蓋もなく、言い切らないでくださいよ。そりゃ、そうですけどね。落ち込むじゃないですか……。これでも一応、やったことくらいはあるのに……」

「お前……。まさか本当に、あの子を？」

気色ばんだカイに、今更何をという様子でエアリアはひらひら手を振った。

「やったのは、ちゃんとした女性とです。どちらかというところ、臺が立ったおばさんにおもちやにされてたつてのが真相で、稚い女の子には……。したことはないですよ。変態じゃありませんから……」

おばさんのおもちやにされた、というのは充分に変だし、どうにも穏やかな表現では無いとを感じるが、それでもミアーヌ・カルラーを凌辱し、殺害などはしていないと確約する言葉に、カイは少し安心する。

「じゃ、あの子を殺したのがお前のスカーフだつたつてだけで、『彼女の命を奪った』なんてややこしい表現をしたのか？」

暫くの間、ここでどの程度をカイに話したらいいのか計算しているような沈黙があつた。

「私と、ディーンさまが……。この国で……。どういう役割を果たしているか、カイ、貴方はどこまで知ってます？」

エアがいつものように穏やかな口調になっていた。それだけで、カイは少し気分が和んだ。こいつの声は本当に音楽みたいだ。

「殿下はろくでなしの役立たずで皆に嫌われていて、お側付きのお前は、滑稽なくらいマジメにお仕えしているが、皆が兄君殿下が皇太子位に戻るのを望む声を潰す役には立っていない……。程度かな」

一つ頷いて、エアリアは続けた。

「サーシャは将来を囑望されている。そして、デーンさまはろくでなしだ。間違いない。では、それでいて何故、サーシャがアル・マーシヨ（皇太子領の名前）をいつまでも名乗れないのは、どうしてだか、知っていますか？」

皇太子ウィルデーンに対する見境いのない忠誠心。ただ、つれない女に入れ揚げる男のような滑稽さで、報われない誠意を捧げ続けるその一点の愚かさを、皆に呆れられているエアリアが、彼の至宝である皇太子に『ろくでなし』という言葉を使ったのに、カイは少し驚いた。

そう言えばエアリアは、兄殿下を愛称で平然と呼ぶ数少ない人間の一人だったと、カイは思い出した。そして兄君殿下と親しく交わりながらも、それでも容易に乗り換えることをしない一途さは驚くべきだと思う。誰だって比べてしまっただろうし、比べたら最後、誰だって兄君殿下の方に心を惹かれて当然だ。

「そりゃ、有名な話だろ。イサクの国王陛下は、マヴァル王の侵掠を恐れるあまり、ご正妃であらせられたローレシアさまを妾に落とされて……」

「了解。そこまで結構です。貴方が表面しか知らないことが充分分かりました」

掌をカイに向けて突き出しながらも、カイの言葉を遮ると、エアリアが深く溜息をついた。

「デーンさまが……あのように拗ねてらっしゃるのは、私を遠ざけようとなさっているから……なんです。あの方は、私を守ろうと……あの方なりの幼いやり方ですが、いつもしてくださっている。

私まで、己の命可愛さに、それに甘えてデーン様を捨てては、私は自分を生涯許せない……でしょう」



「殿下が……、よりによって、あの殿下が…… お前を守ろうだって？ それは……ないだろ。その、お前の夢を壊すようで……言いたくはないが」

カイの言葉を、エアリアは軽く首を振って否定した。

「貴方がたは、あそこまで頑なに私を拒む前の……ディーンさまを、知らないだけです。ディーンさまは陛下とサーシャと同じだけの器量は、充分にもってらっしゃる。ただ、私の力が足りず、あの方をお守りし切れず……死にかけた。ディーンさまは、私が自分のために死ぬことを許さないと仰って……それからですよ。ディーンさまが……私を遠ざけようとするのを止めないで決して距離を狭めるの許してくださらないのは……。本当に、あの頑固さは……まったく陛下と同じ種類の……。冷酷王と敢えて自ら呼ばれようとされている陛下と……、そっくりです。いやになるくらい……頑固で……」

そう言うエアリアの顔は本当に嬉しそうに、信じられないことに、幸せそうにすら見えた。

「私は、あの方の為なら……なんでもできると、思っていました。後悔はしないと……。でも、実際にこんなふうに分が変わってしまったと……、他にも選べたのではないかと、いつも考えしまう……。詮ないことなんですけどね。今更どんなに愚痴っても、どれほど昔に戻ろうとしても、私は、もう化けものとして生きる覚悟を決めて、何処までも堕ちていく自分と……馴れ合っていくしかないのに……。でも……怖いんです。どうしようもなく、怖い……。自分の体が、どこまで壊れていくのか……」

故国での幼い日の親友の今の姿は知らない。けれどハルが健康に日焼けして、元気一杯に海に飛び込んだり、走り回ったりしていたりだけはしないだろう。相変わらず、南国の強い日差しを遮る紗越しに吹きいれてくる風で季節を知り、蒼白く細く、ひっそりと在るだろう。猛る情熱をどうすることもできずに、地図や書物をひっくり返しながら、繰り返す熱や咳を騙し騙し耐えているだろう。健康

でいることに困難がない自分などが及びもつかない忍耐強さで。

カイは思う。エアリアの細さだの、青白さなど、年季入りのハルに比べれば、まだまだ絶望などには遠いだろう。多少であれば病を得ているくらいの方が長生きだと言う人もいるくらいだ。健康であったエアリアが、何かの病で衰えていく体にどれほど絶望したとしても、その位で絶望するのは、健康が当たり前の自分たちの奢りだ。

「エア。お前は、もともとが細っこい割に頑丈だ。キリーもそうだけど、コザの血つてやつだろ。まだまだ、そう簡単にくたばりや……しない。前と同じでないってのは、辛いだろうと思うが、もともと走ったり泳いだりなんぞが夢のまた夢でしかないほど、最初から奪われている奴も、世の中にはいる。話したことあるだろう？ 俺の故国（くに）の親友のことを。お前は、まだまだ、お日様（ひさま）中で走れる位には元気じゃねえか。ぐだぐだ悩むのも、お前らしくていいけどさ、取り敢えず、動ける内は……、自分を信じて生き続けていて……構わないんじゃないか？」

エアリアが、びっくりしたような瞳で、カイをまじまじと見返してきた。

「こんな情け無い……姿をさらしても？」

「無様なんて、他人が思おうが、いいじゃねえか。自分は、自分の持ってきただけの持ち物で、頑張るしかないんだからさ。無くしちゃったもんは帰って来やしねえ。そんな、命と一緒にだろ？ 一つしかないのを無くしたくねえのは人情だけど、だったら産まれてこなくて良かったとでもいうのか？ 死にたくないから、生まれてきたくないなんて奴ばかりだったら、人間なんて居なくなっちゃう。ハルの受け売りだけだな。どんな体であつても、生まれてきたくなかったなんて、性根の腐った人間にはなりたくない……って」

エアリアが深く溜息をついた。

「なんか……カイと話してると……私が悩んでいたのが……まるで、

馬鹿みたいな気になってきますね……。貴方のハルさんは凄い人だ。一度……会って見たいな」

「おう、会えるさ。俺たちは……。まだ、生きてる。終わった訳じゃない。もっとも今回ばっかしは、お終いだと……。俺も思ったけど……。な。エア、まだ、言っただけだった。来てくれて……。本当にありがとう」

「……カイ」

そう呼びかけてから暫し続ける言葉を探していたエアリアだったが、やつのことで、うつそりと微笑みを浮かべた。もともと男にしておくには惜しいくらいの造作の持ち主である。どれほど苦しいな微笑みでも、蕾が綻びるかのような鮮やかな変化だった。

「私は……。愚かでしたね。もっと早く貴方に、話せばよかった。一人で抱え込んでいても、どこにも道はなかったのに。でも、まだ、やることがある。私は、守りたい人もいるし……。テオの為に殺されてしまったあの子の無念もはらさなきゃならない……」

「ミアー又は……。俺の妹よりも幼いんだよな。あんな風に終わっていい命じゃ無い。何故なんだ？ あの子は、ネルガルに……。親父さんの船で来るって、いつも言っていたよ。それで孔雀を見せろって

……」

カイの胸の中で、ぼつりぼつりと取り止めもなく、思い出が心の其処から泡あぶくとなって浮かんでは弾けて行った。

「……そうでしたね。貴方は、休みのときは……。いつもテオの家に行っていた。可愛い子でしたか？ テオが、私たちが犯人だとして恨んでいるとしたら……。辛いな……」

カイも闇が充満している中で天井を向いて溜息をついた。

「……ああ。テオも地獄だろうけど……。俺たちも……。だな。何でだ？ 誰があの子を殺したんだ。俺がそいつをトツ捕まえて捻り潰してやりたい位だ。なのに何で、犯人として殺されるんだ？ ずっと壁を見て、腸はいいわたが焼けてた」

「んー、そういう場合は『煮えくり返る』かな……」

イサクの言葉が母語でないカイが妙な表現をしたとき、間髪入れずに訂正してくるのは、まったくいつものエアリアで、この闇が消灯後の寮の部屋を満たしていたそれでないというのが不思議だった。たった二日だ。

僅か二日前には、週明けの考査に備えてこの週末をどうやって使っていくかが最大の関心事だったのだ。夏至祭りの馬鹿騒ぎで完全に頭から逃げ出してしまった知識をどうやって呼び戻すか、そんなことが一番の心配事だった。

今は闇の中で、エアリアが持ってきた小さなカンテラだけを頼りにイサクから生きて逃げることを心から願っている。机の抽斗にある様々なガラクタ。他の誰かに見られるとかなり恥ずかしい詩を書き散らした紙の束。汚れたまま丸めてある服。全てが遠くに押しやられてしまった。全てが、二度と手に届かない場所になってしまった。考査の結果に一喜一憂し、夕食のおかずが夕方には一番気になることで、体を動かすことに巧者である仲間たちをどうやって出し抜くかを考えながら鍛練するのは楽しかった。全てが永遠に戻ってこない時間。穏やかな毎日は、当然の顔をして明日も明後日も続いていくと思っていたのに……。卒業という節目が来るその日までは少なくともありつづけると思っていたのに……。

「そろそろ行きましようか。大分時間を無駄にしてしまった……」  
立ち上がったエアリアが落ちているカンテラに手を伸ばした。

「まだ、聞いてない。お前が言うところのミアーヌを殺した軽率とやらを聞かないと、俺は納得できない。お前はやっていないと言いながら、殺したのは自分だと言っている。それは、言葉として可笑しいだろう？」

「歩きながらで……いいですか？ カイ。本当に時間が惜しい……」  
「話してくれるなら……」

一歩ほど前に進んでから、エアリアは喋りだした。

「ほんのガキの頃……父や母から離されて、セレンさま（皇太后タチアナ）の処に連れて行かれたとき……セレンさまは……お美しかった……。一目惚れってやつかな。ガキの癖にませてたな」

「お前さんの初恋は……なんと、セレンさまかい？ 渋すぎるぞ……」

自分たちが五つほどのガキの頃といったら、十年以上前だが、それでもイサク王のご生母にして、デル・ヴィラン殿下という孫もいたのだから、名実ともに立派な『おばあさん』である。少年が淡い恋心を抱くのは、いいところ母親の年代までが限界だろうから、その一世代前というのはいくらなんでも変わっている。

そんなカイを察してかエアリアは続けた。

「私が五歳の頃、セレンさまは、まだ四十にもなっていられなかった。今も相変わらずお綺麗だが、本当に儂げで美しかった。

本当に生きてらっしゃる人のようにすら見えなかった。私の母ときたら……馬に乗ったままで雉を射って、獵犬に連れてこさせる。その首を絞めて止めを刺すように私に強制する。そしてら羽を翳っては、火まで自分で興してその場で焼いて、かぶりつくような……イサク流儀から言ったら完全な野蛮人ですからね……。ま、実際にこの寮の食事よりも、あの時の雉のほう美味しかったですけれど」  
自分で鳥を射って捌いて丸焼きで食べるのは、カイにしてみれば普通の行為だが、この妙にお高くお作法がひねくれてしまっているイサクにあって、五大家の当主の正夫人がとる行動では決してない。「あの東の宮では、セレン宮と呼ばれているくらいですから、あちこちに妖精の絵だの像だのに溢れていますけど、描かれているどの妖精よりもお綺麗だったんです。本当に妖精なんだと思ってしまつたくらい……なんて言ったらいいのかな、その……」

時間がないと言いつつ、そこまで遡って説明する気かと呆れ、カイは首をすくめた。

「セレンさまに……、国の為ではなく、イサクを戦場にしないためにディーンさまの盾になつてくれと言われて……、たった五つのガキが、我ながら良く理解できたもんだと感心しますけど、イサクを戦場にしないために……ディーンさまをお守りすると誓いました」

「……健気けなげだな。感心するぞ。それから、今まで十数年、セレンさまとの約束を果たすためだけに、殿下を第一に考えられるとは、なかなか一途いちずだな」

交ぜつ返したカイにエアリアが苦情を言った。

「茶化すな。カイ。話ができない」

「……スマン」

素直に謝罪したカイを少し振り返って微笑むと、エアリアはもう一度今まで降りてきた階段を更に深く潜っていくために方向を変えて歩きだした。

「白い荒野……。知っていますか？ 私があそこを見ることがなかったら……私は今の自分である道を……多分、選んではいませんでした」

「……白い、荒野？」

## 第八章 白い荒野

白い荒野。あの山間にある廃墟のことを、そう呼んでいるのはエ  
リア・ロキメンただ一人かもしれない。おそらく彼処を直に見て、  
あそを吹き互る風の音を聞いたことがあるものは、世の中にそう多  
くはないだろう。今ではもう、遠くに……、遠くに霞んでいる記憶  
だ。深く耳に刻印された、風が渺々（びょうびょう）と耳たぶをな  
ぶっていく。その音は泣き声だった。何処までも白い荒れ野にいつ  
までも飮するそれは、誰のものは分からないけれど、紛れもなく  
……泣き声だった。

\* \* \*

馬車が大きめの石を弾き飛ばしたのか、小さな尻は突き上げられ  
て、いとも簡単に少年の体全体が浮き上がった。

何度も失敗して懲りているのだが、またしても足を踏ん張るのを  
忘れて、尾てい骨を直撃させる形で座席に落ちてしまった。ふかふ  
かに綿をつめて布張りがしてある馬車の座席でも、勢い良く落ちて  
打ちつけると、綿は気休め程度で、底面は木の板でしかないことが  
よく分かる。尾てい骨から突き抜けた痛みは、何故か奥歯を軋ませ  
た。

車輪が乾いた音を立てて跳ね上がる度に、大きかったり小さかつ  
たりと変則的な振動が馬車全体を揺るがせる。いつそのこと、石畳  
を剥ぎ取って地面を剥き出しにした方が、なだらかな道に戻るかも

しない。

人の往来が途絶え、最早どの足にも踏みしだかれない事を示すように、石畳の隙間から逞しい草たちが、よきによきと争って背伸びをしていた。その山間を縫うように続く道が、かつては人が盛んに行き来していた事を証明するかのよう、石畳であることが信じられなかった。

柔らかな背もたれに身を預けて、深く座席に腰を鎮めてしまえば窓の外はまったく見えなかった。だから少年　この年数え年六歳になるエアリア・ロキメン　は、外の風景を見るために背もたれに寄り掛からず、もうずっと何時間も、ピンと背中を張り伸ばしていたのだった。体が強張ってくるのも無理はない。向かいの座席にいる女性は、クッションをだき抱えて眠っているようだった。この繊細な女の人が、この悪路で酔わないようにか、それとも単純に馬を疲れさせないためか、馬車は時折たつぷりとした休憩を取りながら、どちらかという気が遠くなるほどのんびりとした速度で、果てし無く続くかに思われる道を進んでいた。

少年はこの単調な山の景色に退屈はしていなかった。山は色々なものを抱き留めて美しい。生き物の気配、重なり合う木の葉の無限に変化する光の乱舞。木漏れ日は、いつも揺らめいて無数の色を贅沢に浮き沈みさせていた。

馬車というものにこんなに長い距離を乗るのは初めてだった。彼の母は、普通のイサクの女子どもおんなこがそうするように、馬車を使うことがない人だった。父よりも上手に馬を走らせる母は、エアリアを連れて出掛けるとき、いつも彼を膝に乗せたまま馬に乗った。

この硬く無愛想な正体を真綿でくるんで誤魔化している席に座り続けるくらいなら、この車を引く馬に直接座りたかった。彼らは硬い鞍くらで無愛想を装っても、その下には生き物の温かな柔らかさを確かに持っているのだ。長時間座らなければならぬなら、彼らの方が断然心地好いに決まっている。



山に生えている草木は、エアリアが育った場所とは随分違って見えた。まっ直ぐに聳え立つ木は天を突き刺すようにそそり立ち、下生えは申し訳程度に地面を覆っているだけで、小さいエアリ工が降り立っても、くるぶしが隠れるほどの高さしかないだろう。それに生き物の気配もどこか薄く感じられた。

エアリアが育ったロキメンの所領であるイーティタニアの山は、様々な種類で横に手を広げ合って絡ませ合っているように鬱蒼と繁り、下生えも密に地表を隠し、小さなエアリアが踏み入ると、下から突き上げる草の波に、殆ど頭まで埋もれてしまうのだった。埋もれてさえ、草の陰からウサギや鳥がバタバタと驚かせてきたり、虫たちが五月蠅く耳元で羽音を立てたりした。匂いも違う。エアリアのよく知った山は、噎せ返るほどに湿気を帯びた香りが、表面の乾いた落ち葉を踏みしだく度に鼻を突いてきた。何より、森は暗かった。けれど、ここは明るく突き抜けている。臭いさえ濃く緑の精気を帯びてどこか穏やかに乾いていた。

エアリアが母親と弟と一緒に暮らしていた屋敷から、ほんの数時間馬を駆れば、そこには照葉樹林帯が広がっていた。羊歯は子どもなど埋めてしまうほどに丈高かった。そんな山でも人や獣が踏み分けてできた自然の道があり、そこは穏やかに通るものを選び好みせず受け入れるためにあるかのようだった。粗い石畳の街道を移動するときより、森の中の方が、暑さも寒さも和らいでいて、そのほの暗さは実に心地好いものだった。夜、日が落ちると生き物の気配は一層濃厚になる。奥深いどこまでも続く闇を怖いと思うこともあったが、いつもエアリアには母が居た。母が簡単な寢床を設えてマントの中に抱きとってくれていれば、どこでも安心して眠ることができた。

あの母さまが泣きながら自分を抱こうとしていた。

どこまでも続く森の風景を見ながら、心の中で幾度と無く反芻していたのは母を殴った父の顔だった。恐ろしく引き攣っていたが、どこか絞め殺される前の鳥のような目に似ているとエアリアには思えた。あの時にはその様な言葉を駆使できるほどの力はなかったが、今のエアリアならばこう表現するだろう。ままならぬ運命は受け入れるしかないことを納得している目だと。

大きな力に引き裂かれて馬車に乗せられた。それから、訳が分からないまま何日が過ぎて行った。その間心の中に憤りだけがあったのならば、納得がいったのかもしれないが、あの父の瞳が純粹な怒りに水をさし、奇妙に冷静でいる自分が気に入らなかった。滅多に自分たちの家に来ることが無い父親が、自分を抱きしめながら「エアリアをやらないで」と、叫んでいた母を殴ったのだから。もっと素直に怒っていいはずだ。

母親はいつも父を敬うように言っていた。お父さまには大切な役目があるのだから一緒には住めないけれど、それでもいつも私たちを愛してくださっている。そんな説明にされて無理やり納得していたが、あの時母を殴った男に、愛情など見つけることはできなかった。けれど、素直に憎めるほどにも知らないのだ。他人に等しい人には怨みも憎しみも中途半端にしか燃えなかった。

爆発できない中途半端な鬱憤を抱えた子どもだったにも関わらず、エアリアは出された食事は残らず平らげた。父親は五大家と言われるイサク屈指の家の当主である。ザッティバーグの屋敷は、長じて学校に入ってから、休日に町へ繰り出したときに初めて目にした。その大きさは田舎の母が住む館に比べたら城と言っていいほど重厚な造りで、門扉に牙を剥く猪が、どこことなく可愛く滑稽に映ったのを覚えている。父の家に足を踏み入れたことはついぞない。母親が

ら引き離された子どもを不憫に思っただけ、連日のご馳走攻めだった。それを機嫌よく呑み込んでいくエアリアは、きつと回りからは情の薄い、見るべきところが無い愚かな子どもと映っていただろう。

言い訳をさせてもらえば、それは母タマラの子育てのやり方がそうだったのだから仕方ないのだ。少年には、食べられるときには食べるという習慣が徹底して既に身に付いていたのだ。エアリアは母に連れられて山に入ることが多かった。どんなに頑張っても獲物がなければ腹にたまるものは食べられない。山に入ると母は食べられる草や、薬になる草、逆に毒草や茸きのこなどについて教えてくれた。母によるとコザの民というのは軽く持ち運び可能なように折り畳むことができる天幕のような移動可能な家しか持たないのだという。そしてそれを証明するようにいつも身軽で、発作的に思い立っては殆ど何も持たずに山に向かった。母がどういう大人なるように自分に望んでいたかは定かでないが、少なくとも身一つで山に入っても、生き延びることが出来る程度の技わざは身につけさせたいと思っていたのだろう。

小刀の扱いは先ず母から伝授された。その後ラジエイルで身につけたような、人を殺したり身を守ったりする刃物の使い方ではなく、生きるために生命いのちを裁く道具としてのそれだった。母と一緒に山に入る。持ち物はいつも茂みの中でも使いやすい小振りの弓矢と小刀と、少し乾いた焼き菓子だけ。その焼き菓子さえも、いつでも食べさせてはくれなかった。獲物に恵まれず空腹が限界にならなければ、母の腰に誘惑するようにぶら下がっていた巾着袋は紐を緩めることはなかった。

母が見事にウサギを仕留める。大型の鳥を射落とす。母の黒い犬（名前は忘れた。完全にエアリアのことは小馬鹿にして、見下すような目つきをしていた奴だった）が拾ってくる。息絶えていればそのまま捌くが、まだ息があれば先ず絞める。

「家で食べるお肉も……、こうやって誰かが命を頂くための仕事をしているのよ。イサクの人は、そういう仕事をしている人を、嫌うわ。何故でしょうね。お父さまのような立場の人は、人の命を奪っても蔑まれたりしないのに。食べる訳でも無く、命を奪うのは愚かな行為だというのに」

そんなような意味の言葉をエアリアに呟いていたが、母はきつと他の誰かに語りかけていたに違いない。

「アンヘラさまもそう。いつも、私が鳥を射つとおぞましそうに目を背けるのに、お皿に飾られてお料理になった鳥は、『美味しそう』とおっしゃるの。可笑しいでしょう？」

アンヘラさまというのが、母が昔お側に仕えていた貴人のことだとは教えられていたが、この大国の王妃さまのことだとはあの時の自分は知らなかった。

「私は貴方には……、食べるため以外で奪う人にはなってもらいたくない……わ」

自分は何人もの人を、この年で既に殺めてしまっている。母はそれを知っているだろうか。そして仕方なかったのだと優しく慰めて下さるだろうか。

ご馳走を黙々とやつつけているエアリアの前に、二人の女性がいた。（と、その時のエアリアは思った。一人は女性では無かったのだが……）一人はゆったりと優雅に腰掛けていて、一人はその背後を守るように控えていた。女性たちは子どもの目から見えてさえ若くはないのだが、その空気のように何処か儚げな、奇妙なほどの透明な色を帯びていて、生きている者とは思えないほどだった。座っている女性は終始無口で、ただ黙ってエアリアを見ていた。

三日ほどの間、食事の時だけいつも来ては座っていた。そのうちお屋敷にあふれ返っている沢山の妖精の絵や彫塑程度のものになっていた。

「お前は……食べるのが好きか？ 母や弟御より……」

突然聞かれたとき、その声のか細さよりも、壁画が喋ったかのような驚きをもたらした。

「……出されたものを、できる限り頂くのは、当然の礼儀だと、言われています」

エアリアの言葉遣いが丁寧で、その話す相手を見据えるようなまっ直ぐなものだったのに、その人は驚いたようだった。

「そなたの母御前ははごめにですか？ 作った人に対する礼儀と、そのように貴方の母御は仰るのですか」

「作った人に……も、そう言えば失礼ですね。ちゃんと頂かなくては」

「違うのですか？」

「植物にも動物にも命というものがあるのだそうです。その命を下さった相手に対して、失礼だと……いつも、言われております」

「命をくれた相手と……そのような難しいことを、そなたのような子どもにですか？」

「母の言うことは半分以上分かりませんが、食べ物が生きていたことは……知っています。難しくは無いです」

その答えが面白かったのか、座っている女性が軽く笑い声を立てた。今のエアリアであれば『鈴を振るような』と表現するだろう心地好い響きだった。

「それで、エアリア殿。ここの食事はどうですか？」

女性は美味しいとか、結構ですとかいう言葉を期待していたのかもしれないが、エアリアは子どもの素直さで思っていたことを口にした。

「無駄が……多すぎると……思います」

女性は少し意表をつかれたようだったが、少しだけ口籠もった後、続けた。

「どのような所が無駄だと思いますか？」

「量が多すぎます。残して下げられると怒られるから頑張って食べ

ていますけど……気持ち悪いし……」

イサクの流儀では、客が食べられるほどの量しか出さないのは、非礼とされる。食べきれないほど出すのは、王侯貴族でなくとも裕福な家庭であれば当然の習慣だ。

「そなたの母御は食べきれ分だけしか、食卓に乗せないのですか？」

「母はイサクには無駄が多すぎるとよく言っています。今まで何のことか分からなかったのですが、とても良く分かりました」

突然、女性が腹を擦るほど激しく笑いだした。どれだけ量を増やしても平然と食べ尽くしていた少年は、残す食材となった命に失礼と思って、気持ち悪くなるのを我慢してまで食べていたというのだ。なんとかして残させようとしていた自分と、なんとかして食べ尽くそうとしていた少年とが、ずっと同じテーブルについていたのかと思うと、可笑しすぎて笑わずにはいらなかった。

「……それは……、すまないことをした」

漸く笑いを納めた女の人がそう言ったときには、エアリアも一緒になって笑っていた。笑い声というのは、聴いているだけで巻き込まれてしまうものだ。

「母御のところに戻りたいでしょうね。でも……私には貴方が必要なのです」

「どうして……ですか？ おばさまには……子どもが居ないのですか？」

もう一度女性は可笑しそうに笑った。

「子どもが居ないどころか、孫もいるおばあちゃんですよ」

少年がまっすぐに視線をぶつけてきたのに気付き、彼女は笑うのを止めた。

「母さまには赤ちゃんがいるけど、それでも子どもは僕だけなんです。一緒に森に行くのも僕だけ。キリーはまだ小さいんです。だから、母さまとは遊べないんです。父上は都みやこからなかなかお運びにな

らないし、私が帰ってあげなければ可哀相です」

女性はなんともいえない奇妙な表情で居たが、やがてすつと立ちあがって退席してしまった。控えていたもう一人は、その人の後を追ってエアリアを置き去りにする寸前に、少しだけ微笑んで頷きを見せてくれた。その鮮やかな表情をエアリアは今も覚えている。

あの人も石像のように何も言わないモノだと思っていたから意表をつかれたとも言おうか。あの人のその微笑みは、幼い少年の心に深く刻まれた。

それが、イサク王家に仕える『影』として知っておくべき技<sup>わざ</sup>を学んでいくにあたって、エアリアの師となるマグダレーネ・アルントとの出会いであったことを、その時のエアリアはまだ知る由<sup>よし</sup>も無かった。

「面白い……子。母御に会わせてくれるではなく、遊んであげたいから帰らなくてはと、そう、言いましたね」

エアリア少年にはさっぱり年齢が読めなかった、若くもなく老いてもいないその女性が、お察しの通り、国王イルデイスの母であり、彼が王位を掌中にもぎ取ったことで、国母と呼ばれる立場に置かれることとなったセレン殿こと、皇太后タチアナであった。

彼女の相談役であり、補佐であり、時には盾であるマグダレーネ・アルントは、同意を示して頷いた。

「母親と引き離されてめめそ泣くでも無く、癪癪を破裂させるでも無く、かといって面白そうなものを与えても喜ぶでなく……。出された食事を平らげて、ただの大食らいかと思えば、そうでなく。碌に喋れぬ程度の語彙しか持たぬ故に喋らぬのだと思えば、年に似合わせぬ正確さで丁寧語を扱える。あのように婉曲な表現から、家に返させてもらえる望みが薄い<sup>かはたら</sup>と察する勘働きもなかなか。流石に焦

ったのか『母』などとすまして言わず『かあさま』と普通に母親を呼んだのは、年相応で可愛らしく思われました。ロキメンの奥方は、ロイゼの宮さまのご朋友と聞いておりますが、随分面白い方の方ですね……」

マグダレーネは珍しく饒舌だった。

「ロキメン殿は相変わらず、皆から、イサクの正当なる貴族から正妻を迎えるようにと責められているそうですが、あのようには御子をお育てになるご婦人を愛される方が、それを取り合わけぬのは当然でしょう。直接お会いしたことが無くても、どんな御方が分かるような気がしますよ。陛下が……ロイゼさまをお避けになる理由も……なんとは無しにですが分かるような気がいたしました。ロイゼさまは陛下ご寵愛のローレシアさまとは全く似ているところが無いのでしょね」

そして、溜息を一つ。

タチアナが続きを引き受けた。

「本当に……困ったこと。ロイゼ殿から媚びて下されば、陛下も体面が保てるでしょうから、たまに通うくらいはなさるのでしょうか、冷たくされてはご自分から折れる必要は無いとお考えなのでしょうね……。ロイゼ殿はマヴアルの女性の矜持にかけて、媚を売ろうとはなさいますまい。陛下にしても、ローレシア殿のように賢さが賢しらに見えないほどに振る舞える頭のよい女性がお好きでいらつしやる。単純に居丈高な他国の女などに愛を乞う必要など、感じてらっしゃらないのでしょうかね」

マグダレーネがゆっくりと口を開いた。

「奥さまはあの子を、母御の許へ、返してやりたいと思つてらつしやいますね」

タチアナは首を振った。

「国が滅びるのを見るのは……、もう、たくさん。この国は仇では



ありますが、今では我が子の命と同等……。であれば、妾は鬼にもなりましょう」

「……それをお伺いして、嬉しゅうございます。あの子は、とても面白い素材と思えてなりません。この私の手で育てることが許されますなら、望外の幸せに存じます。私たちは、命を託していく術を持ちません。せめて得た技を誰かに託すことを考えてしまいう年になりました……」

その時、マグダレーネの胸に去来していた思いは、どのような種類のものだったか、タチアナは自分の思いに沈んでしまつて考えることはできなかった。

この国に、この国の王に、故国を蹂躪された。生涯心を許すまいと誓つた幼い心が、今も懐かしい。拉致同然に連れて来られて奪われて、涙に明け暮れた日々もあつた筈なのに、子を孕むたびに我が子への愛しさという生き物の感情にとろかされ、子が生まれる度に恨む心はなし崩し的に風化してしまつた。

先王のダナエは死ぬまで一度も、タチアナに詫びることも言い訳することもしなかつた。ただ、飾り立て、敬うように崇めるように優しく、そして時に激しく接した。祖父母と両親、兄と弟妹を直接手は下していないだろうが殺した男。高貴な立場ゆえに、直接手を下したのではないだろうが、それでも生まれ育つた国を完全に破壊した憎むべき男を、恨み抜くことができなかった己のなんと情け無いこと。

タチアナは溜息をついた。我が子の正式の嫁であるマヴァルのアンヘラとどうしても自分を比べてしまう。あのように自分も誇り高くダナエを拒み、舌を噛みきるなり、胸を刺し貫くなりして故国ノキアに殉じるべきだったのかもしれない。

だが、ダナエを思うとき、心の何処を探っても仇へ当然抱くべき筈の怨みや憎しみは転がっていない。自分を当然のように愛撫した男の手が無性に懐かしいだけだ。耳元で歌うように優しく囁きかけ

てくる甘い声をもう一度聞きたいだけだ。

それぞれの思いを乗せていた馬車がとまった。いつの間にか眠っていたエアリアは、タチアナに優しく揺り起こされて、そこが単なる休憩場所ではなく、長い移動が終わったのだと知らされた。馬車の扉が、外側から開けられる。

寝起きの瞳には、外の世界の光は眩しすぎた。思わず細めた目を切るように、一陣の風が吹き抜けて行った。景色を見ようと頑張つて<sup>まぶた</sup>瞼をこじ開けたエアリアの眼前に広がっていたのは、白い、何処までも白く照っている、かつてあった街が破壊され尽くした後の残骸だった。幼い彼の語彙には無かったけれど、そこは紛れもなく廃墟だった。

荒れ野。全ての国語能力を駆使して、エアリアがやっとこの風景に相応しい名前を見つけた。そうだ。ここは荒野だ。あちらこちらに明らかに人骨と分かる骨が点在し、それらが虐殺されたことを訴えるように頭蓋骨だけがまとまってあったり、大腿骨とおぼしき骨がぽつんとそれだけで転がっている。この骨たちが肉の衣を纏っていたところに、肉を喰らう獣たちにあさられたのかもしれない。地面は恐ろしいほどの白。そして、夥しい建物が焼け崩れたらしい塊さえ、墨色が白くくすんで暈<sup>ぼ</sup>けていた。

凄惨を残すには生々しさに乏しかったが、全てが過去だと納得できるほどには晒されきつてはいなかった。だから大きく見開かれた少年の瞳には、紛れもない怯えの色が浮かんでいた。

さくり。

タチアナが馬車から降りると、靴がそんな音を立てた。タチアナ

は少しの間、頭を巡らせて山の稜線を眺めたり、建物の残骸を数えるように指さしたりしていた。それからやっと思い定まったのか、白い砂で見え隠れする石畳を歩きだした。

「……」

少年が消え入る程の声で何かを言った。

「もう少しでよい。妾に聞こえる声で話してたも」

タチアナが微笑みながら頷くと、エアリアがやっと聞こえるほどの声で繰り返した。

「みんな……どこに行っちゃった……の」

タチアナの瞳が優しく細められた。

「……妾も……それを知りたいと……ずっと思っておりましたよ……。お父さま、お母さま……、お兄さま。お姉さま……。弟や妹たち。みんなみんな、どこに行ってしまったのか……」

「ここは、奥さまの故郷なんですか……」

タチアナがエアリアが自分を呼ぶのに選んだ『奥さま』という呼称に、もう一度微笑んだ。自分をそう呼ぶマグダレーネの真似をしたのだらう。けれど、このように幼い者が使うには些かませて聞こえる。

「ええ、そうですよ。山が、本当に綺麗な所でしょう。向うの林を抜けると、とても美しい湖もあるのよ」

エアリアは答えられなかった。山は確かに綺麗だったけれど、ここには廃墟のもつ独特の虚しさが満ちている。かつて住んでいた人たちの魂が慟哭するように風の音が鳴る。

「美しいとは……思えません。僕は……ここが……痛い」

少年の小さな手が、その薄い胸を抑えていた。

タチアナは再び歩を進めた。エアリアは少しの間そのまま立ち止まっていたが、マグダレーネが降りてこない馬車を見て少しだけ迷ってから、やはりタチアナの後を追いかけた。白い荒野に、白っ

ばいタチアナの衣装が融けてしまいそうだ。その後ろ姿が余りにも  
儚げで、走って追いついたエアリアは、刹那の逡巡を追い払って、  
思い切って手を繋いだ。タチアナが驚いて身を引きそうになった。  
子どもと手を繋いで歩いたことなど、彼女には許されなかった。だ  
から、その小さな手が思いがけず燃えているように感じらるほど熱  
いの戸惑った。

「どうしました？ 怖いのですか？」

エアリアは一層強くその手を握りしめて、激しく首を振った。消  
えてしまいそうなタチアナを繋ぎ止めるために握りしめた手だった。  
けれど、そんな事をちゃんと説明できるほど、少年は大人ではな  
かった。

自分の手を痛いほどに握りしめて、必死の形相で首を振る少年は、  
タチアナには強がつているようにしか見えなかった。

「大丈夫ですよ、エアリア。此処には私たちしかいません。怖いのは……恐ろしいのは何時だって生きている人間なのよ。死んでしま  
った人は、何もできないのよ……。この人たちは、もう恐れなくて  
いいの……」

タチアナがしゃがみ込んでぼつねんと転がっていた頭蓋骨の頭を  
慈しむように撫でた。

「この人たちを、怖がらなくても……大丈夫なのよ」

「怖いんじゃない……ありません」

エアリアが擦れた声<sup>かす</sup>を絞り出した。

白い路はいつまでも続くように見えたが、やがて一際大きな瓦礫<sup>ひこきわ</sup>  
の山の前についに途絶えた。タチアナがゆっくりとエアリアの手を  
解いてから、そこに<sup>ひじ</sup>跪き、肘をゆっくりと白い地面に投げ出してた。  
エアリアはそのまま彼女がゆったりと動作で額<sup>ぬか</sup>ずき五体投地の礼を  
とると思ったのだが、そのまま彼女は額を地面に打ちつけた。

あっけに取られているエアリアの前で、タチアナはそのまま幾度

となく額を地面にぶつけ続けるように見えた。エアリアはとつさにその小さな腕を精一杯に広げて、背後からタチアナを抱きしめ、その額が地面に激突するのを引き止めようとした。

「放しなさい。私は、ここで亡くなった人に……、詫びなければならぬのです。許しは決して得られぬと分かっていますが、それでも、ずっとこうしたかった」

エアリアは腕に一層力を込めて、激しく首を振った。

「私は、死ななかつた。ここで焼けて行ったお父さまやお母さま、お兄さまは。お姉さま……、弟たち、妹たち……は、きっと……」

エアリアがありつただけの力をかき集めて抱きしめる。笑顔が美しい妖精のような人が、自らを痛めつけることを止めるために。幼すぎる彼に、充分な言葉の持ち合わせは無かつた。だから、できることを、できる限りの熱心さで。

タチアナはエアリアの持てる限りの力に、負けた。幼な子を力で振り切ることなど簡単だったが、その全身でタチアナが自らを罰することを止めようとする強い意志が、あまりにも優しくて……負けた。

タチアナは白い大地に突っ伏してすすり泣きはじめた。エアリアは何も考えずその横に横たわった。そして、体ごとタチアナの懐ふところに滑り込んで、健気な手で抱きしめてきた。その可愛らしい力は、無力というには余りにも温かつた。

女の両手が、その幼いながらも慈悲を体現していた少年を抱き返した。

「泣かないで……。僕が……。一緒にいてあげるから……。大丈夫だよ。母さまにはキリーがいる。赤ちゃんだから全然遊び相手はできないけど、あったかいんだよ。ほわって、あったかいの。本当に。だから、かあさまは寂しくない。奥さまが……。僕でいいなら……。僕

はずっと……いてあげるから……、泣かないで……」

風が吹きすさんでいた。奥さまの胸は柔らかくて、春の花みたくない匂いがした。唇に、そっと優しい接吻が落ちてきた……。かあさまの唇よりも、甘かった。

\* \* \*

後で成長してから知ったことがある。奥さまの故郷ノキアは、製鉄の技術を持つ人々が暮らしていた場所なのだ。彼らは小さいながらも、豊かに独立独歩の気風をもって、イサクに堂々と作られた鉄を売って国を維持していた。

大量に森林を焼きつくす彼らの独特の釜は『タタル』と呼ばれていたそうだ。そして、森が再生するのを待って、森から森へと移動していた民族だった。国と叫びつつ、定まった都すらもたなかった。

先王のダナエは、鉄をイサクの技術としようと野望を抱いた。職人を奪い、イサクのために働かせようとして、戦いを仕掛けた。けれど、ノキアの民はダナエの説得に膝をつかなかった。

若き先王はノキアの民を撫斬り 皆殺しにしたのだという。女も、子どもも容赦なく。そして、難を逃れた民はちりぢりに世界に散って行ったという。優れたタタルと共に、彼らはイサクから消えた。

結局良質の製鉄を入手する道を閉ざされ、イサクは却って戦力の低下を招いた。

そしてあの白い大地は、腹いせにダナエが二度と土地が再生しないように塩を撒いた傷痕だったのだ。どこまでも白い荒野。

イサクを戦場にしたくない。かあさまの好きな山や森が、白い廃墟になるのはみたくない。そして、おくさまの涙が、もう一度大地に染み込むのも、みたくない。

どんなことにも、堪えられると思っていた。あの荒野に吹きぬけていた風の音を忘れない限り……。自分は……。

## 第九章 真玉関にて

大体。

キリアン・ロキメンは思う。あんなにも鮮やかに、自分たちの悲愴な決意をあつさりとおざ笑うかのように無効化して、警備の厳重な重犯罪人を拘禁する場所からユリウス・カイが自力で抜け出したのだと思う方が間違っていた。

いくらカイという男がすぐれた身体操作術の持ち主だったとしても、外からの助けなしに、おそらく嚴重だろう警備をかくぐって抜け出すことなど、土台からして不可能だと何故分からなかったのだろう。

皆でカイを助け出そうとしていたが、どう考えても成功率が低すぎるやり方だった。それでも敢えてやろうとしていたのは、カイの首が落ちる所を見たくなかったという一事に尽きる。

ただの会派を同じくしているだけの後輩に過ぎない自分だって、無謀を承知で行動しようとしていた。それほどにカイの日頃からの裏表がない公正な在り方は、皆の心酔をかうに充分だったのだ。

この怒濤の三日間の内、自分だってすっかり忘れていた位、自由に動ける立場の人間がたつたひとり居たことを、何故、カイが脱獄したと聞いた時点で思い浮かばなかったのかの方が不思議なくらいだ。

あの兄が、親友が死刑になると知った上で、我が身可愛さに国境を一目散に目指したりする筈がないことに、何故気付かなかったのだろう。

カイが着ているのは、囚人服でも監視人服でもなかった。木綿の



ごく平凡な上着。それから、この大柄な青年が羽織るには滑稽さが滲むくらいに丈が足りていないマント。襟元の紐を留めるボタンに輝くのは自分のと同じロキメンの猪。カイの堂々とした体軀は軍部を掌握するロキメンに連なるものとしてまったく不足は無い。言葉少なに立っていれば麗人と言っていい本物のエアリア・ロキメンなどより余程押し出しがよくて、まさに軍門の令息といった風情だ。

キリアンは、言葉少なにカイが寄越した羊皮紙の追放命令書を見る。

エアリア・ロキメンやユリウス・カイの顔など、絵姿になっている訳でも無し、追っている多くの者が知る訳がない。カイを安全に確実に越境させるこれ以上確実な手段はないではないか。兄がどんな思いでこれをカイに押しつけたかが、キリアンには痛いほどわかる。分かるけれど、それを安直に受け取って、一人国境を目指していたカイが卑怯だと思ふ気持ちが湧いてくるのを止められなかった。カイ先輩は、何故、兄を無理にでもともに国境を目指そうといって引つ張ってこなかったのだろうか。いざという時、自分の安全に目が眩んだのだとしたら、余りにも情け無い。

そんなキリアンの心の動きが分かっているのか、いないのか、カイは『見たな、分かったな』という有無を言わさない勢いでその羊皮紙を力ないキリアンの手から取り戻して、懷にねじ込んだ。

「卑怯だとは……、思わなかったんですか？」

言うてはいけないと思うのだが、非難する言葉を紡ぎださずにはいられなかった。真っ正面からぶつかって相手になる存在ではないが、それでも、渾身の一撃を繰り出さずにいるのに、どれほどの自制心をかき集めなければならなかっただろうか。

意に反して、大きな掌がキリアンの頭にふわと乗せられた。

「思うさ。だけど、あいつは……エアリア・ロキメンでいるより、アル・マーシヨ殿下の影であることを……選んだ。どれほど言葉を尽くしても、一緒に出るとは言わなかった。すまなかった。俺がもつと言葉をちゃんと使えたら、説得できたかもしれないが……」

「殿下？」

「ああ。奴は、アル・マーシヨ殿下をこのまま一人残して、この国を出ることは出来ないと言っていた。殿下とどうやって会うつもりでいるのか、危険ではないのか。何度も聞いたが、『大丈夫』の一点張りですそれについては詳しくは教えてくれなかった。けど、ヤツならやり遂げるだろう。あいつの思いが空振りして、命をかけただけの価値はなにも無かったということになるかもしれない。それでも、奴は殿下に会いに行くのだと言ってた」

キリアンの顔が引き攣ったように歪んだ。カイのあの些細な言い回しが何処かズレている喋り方で説得をしても、もともと頑固さでは、兄に太刀打ちできる者は滅多にいないのだ。カイが相手になる筈も無い。

それにしても、何を考えているのだろう。兄貴<sup>あのひと</sup>は。王命の国外追放命令。期限に素直に従わなければ永年禁固が待っているのだ。カイを自分として出国させることで時間を多少稼げたとしても、会いたがっているウィルデーンときたら、王立学校と王都を名実ともに中心とならさしめているザッティバーグ宮殿が生活圈なのだ。

どう考えても、王命が至上の原理であるお膝元で暗躍しようとする<sup>あ</sup>こと事態が、相当に無謀としか思えない。

兄貴<sup>あのひと</sup>は、死ぬつもりなのだろうか。

キリアンは訝<sup>いぶか</sup>った。兄が、自分がアル・マーシヨ殿下の名を持ち出せば、カイが引くことを知っていて、ウィルディーンなどに会うつもりが更々ないのにそう言ったのか。それとも愚かなまでの忠誠心に毒されて、命を賭してでも、本気でこの状況の中で皇太子なかに会おうとしているのだろうか。まったく分らない。

「キリー。ここでカイを責めている時間が勿体ない。真玉関まで走るぞ。もう一息だ、ブランカをアルが追いかけてるが、ぼーっと待っている間に少しでも距離を稼ごう。……キリー、お前のヒューペリオン……カイも乗せられるか？」

「へ？ 二人乗りさせるんですか？ これだけ走ってくれたのに」「前の馬宿で乗り換えたこの程度の馬に、このオレとカイを二人乗せて、走れとでも言うのか？ 俺がヒューさまに乗せていただいてお前たちがこいつに乗るのは、それこそ、ご機嫌を損ねるんじゃないのか？ 大体、キリーお前とヒューペリオンは、ベタベタしすぎだ。日頃から二人でいちゃいちゃしてるから、こんなときにややこしくなる」

キリアンは荒く鼻息をついた。これほどの距離を一気に駆けつけたヒューペリオン号は、悍馬のふてぶてしさを発揮して、それがどうしたというような風情で尻尾を自分の尻に叩きつけている。

こいつの味を知ってるのに、他の馬なんかには浮気できるか。

キリアンはカイへの僅かな拘泥と、ヒューペリオンへの労りから、この大柄な先輩を乗せるのは御免被りたいところだったが、確かにこの、必要なまでにデカイ二人を乗せて、馬宿を行ったり来たりするだけが商売のチンケな馬に走れというのは、なかなかの無理難

題だ。それに少しでもヒューペリオンを楽ししようと、自分が先輩と二人でこのチンケな馬に、ヒューペリオンの目の前で乗ったりしたら、こいつがどんな反応を示すかなんて、簡単に想像がつく。少なくとも、デユカスをあっさり乗せて素直に走ることだけはあり得ない。

キリアンはヒューペリオンの首に寄り掛かるようにしてから、その鼻面を軽く叩いた。

「頼めるか？」

ヒューペリオンが軽く嘶いた。いななこんな不条理だって、キリアンの為なら呑むと宣言するように。

どう考えても前後が逆だ。普通はデカイ方が馬の尻側に乗って、少しでも小さい方を前にするものだ。普通は後ろに乗るものが手綱を捌く。たとえば兄・エアリアのような乗り手ならば、手綱の捌き手の後ろに乗っても、落ちたり操馬の邪魔になったりはしないものだが、カイときたら、本当に馬と通じ合えないのだ。前に乗せるのが順当だ。視界を遮られるのは辛い、仕方がない。この乗馬というものにとことん適性がないカイがキリアンの後ろに位置して、ヒューペリオンと一本の綱だけで会話するというのは絶対に無理だろうし……。

しかし、カイは、珍しく我慢強く動かずにいるヒューペリオンの背中によじ登ると、その大きな首につつぷすようにしなだれかかってしまったので、キリアンの視界を殆ど邪魔しなかった。馬というのは、本当に繊細な感覚を持って人間の気持ちを読むものだ。

親友の妹を凌辱し殺害したという濡れ衣。拘束されたあと、牢でどのような思いを抱き時間を過ごしていたのだろうか。故郷を遠く

離れて、無残に命を散らすところだったのだ。それだけでもこの頑丈な青年が疲れ切る理由としては充分だが、同じ立場に置かれたもう一人の親友を見捨て、生き延びることを誓って慣れない馬を駆り……、落ちたのだ。

珍しくヒューペリオンは、その己に身を預けてくる男を、労るかのように許している。いつもの彼がとる行動とはまるで違う。ヒューペリオンがやさしさを惜しまないほどに、カイは疲弊しているのだ。

「……キリー」

聞き慣れた声。真玉関を過ぎれば、二度と聞くことが無くなるだろう声。

カイの肌に直接触れて、それを感じる。普段から武術を練っている時に相手になってくれる先輩である。しょっちゅう押さえ込まれたり投げ飛ばされたりしている仲なのだから、特別珍しいことでない。それゆえに、己の皮膚が、この感触をとてもよく知っていることに、突然、切なさが込み上げてきた。近しい交わりだったと思う曲がったことが大嫌いで、しかも、見て見ぬふりができぬ性分。そんなものが災いして揉め事を起こす常習犯の自分の肩をこの人はいつも持ってくれた。

短気を制して、頭を使えと、あの冷たい瞳で睨み付けてくる兄に、いつもこの人は『こいつは是れで良いじゃないか』と言ってくれていた。

仲間という言葉で括るには遠かったけれど、まさしく慕わしい先輩そのものだった。この人の首を落としたくない。そればかりを考えていた。ともすれば兄の存在が吹き飛ぶほどの憧れと親しみを、自分はこの人に向けていた。

「なんです？ カイ先輩」

心外なほどに情け無い声がでた。自分は泣く寸前だ。また、兄の醒めた瞳が脳裏で自分を呆れたように見ていた。

お前は、全く、鬱陶しいほど暑苦しい。

呆れたように呟くエアリアの声まで聞こえるようだ。

「言っておかなきゃ……ならない」

カイは眼を瞑ってヒューペリオンの首に体を預けたままで呟いた。ヒューペリオンの驚くほどへたつていない蹄ひづめが地面を蹴る音が邪魔をして聞き取りにくい。カイの口許に耳を心持ち寄せる。

「……は、……今、壊れかけてる……」

「えっ？」

何がいつたい壊れかけているというのだろう。肝心の主語が聞き取れなかった。

「何が……壊れかけてるんですか？」

「エアの……、体……」

「どういう……意味です？」

期限が迫っていないければ、今すぐにでもヒューペリオンを止めてカイを問い詰めただろう。けれど、乗客が一人で暢気に前を駆けているデュカスを追うことを止めなかった。詳しい話は真玉関を越えてからすればいい。

「そのままだ……。あいつは……この夏泳いでないだろ」

「……そうでしたっけ？」

キリアンは思う。確かに兄は、この国に育ったのが間違いかと思えるくらいの水好きだ。人が泳いでいる不格好さとは無縁に、水面を切るように殆ど波をたてないで泳ぐことができる。逞しさを胸板に滲ませる季節の一步手前の、張り切ってはいるものの未だ繊細さ

も留めている体を陽に晒して、水と戯れていたのは、あれは、この夏の景色ではなかったのだろうか。

「この暑いのに……、体を隠して……」

この夏。デュカスやカイ、テオドル・カルラーヤ、アルフォンス 兄の同輩たちは、面構えを一層逞しくし、剣戟の鋭さには磨きがかかり、首周りも腕周りも皆、一回り太くなっている。夏にぐんぐん伸びるのは、なにも木や草だけの特権ではない。少年たちも青年への階段を一段抜かしで駆け上がる季節だ。

けれど、言われてみれば、そんな連中の中にあつて、兄だけはひっそりと夏に取り残されていた。学業を今年限りで終え、大人として旅立つ年である最高学年にありながら、一人だけ繊細をまだ色濃く残している。

何がそれほど気に入ったのか、制服を強制される場を除いて、砂漠の男たちが好んで着るといふ、一見、女たちのドレスのような奇妙な形の服を着るようになったのは何時からだったろう。埃避けと日除けになるとかいふ、床に届くほど丈が長い上着。夜色の髪を隠す、キリアンには花嫁衣装のベールとしか思えない布を律儀に被っていた。この北国に日除けが必要だとは全く思えない。

そうでなくても、外の人間からは、剣の会共有財産の女だと誤解されている兄なのに、そういう噂を好む下種を喜ばせてどうする気だと、最初の頃こそ腹がたつたものだが、いい加減に慣れてしまった。聞く耳持たないのはいつものことだ。それが、体を隠して？ 何故。何の為に。

「知ってるか？ 体が弱ると……、陽の光りは負担に……水は毒に……なる」

「……なんですって？」

思わず、キリアンはヒューペリオンを止めていた。カイは馬が揺れるのを止めても、その首に体を預けたままだった。

「誰にも気遣わせまいと、はしゃいで……、過ぎる悪ふざけをして……、奴は毎日、弱っていく苛立ちを……隠して」

「ちよつと待つてください。カイ先輩。兄が何か重い病だとしても……言っんですか？ だったら何で、それこそだったら尚更、何で兄貴の、首の根押さえつけてでも連れてきてくれなかったんです？」

その言葉は空気に触れた途端に崩れた。静けさが支配したそこで、先を駆けているデュカスの馬蹄の響きだけが空気を揺らしていた。

「テオの妹が……、可愛いミアヌが、あんな最期を、あんなにも幼い時期に迎えなければならなかったのは……、ヤツに言わせると奴の所為なんだそうだ。皇太子の影として、殿下の命を守ろうとしてやった全てが、マヴァル王の在世が終わるまでだけ、殿下がアル・マーシヨに仮置きしておこうとしている人間の……逆鱗にふれたから……」

「……テオ先輩も……そんな風に言っていました。兄君殿下の身内か、王その人が、皇太子殿下とロキメンの繋がりを潰そうとして……仕組んだことだろうと。でも、それがどうして弱ってる兄貴をカイ先輩が置いてきた理由になるんですか？」

カイがゆっくりと目を開けた。

「奴は……打ちのめされてた。ミアヌを殺したのは自分だという思いと、自分が殿下を見捨てるに任せているこの国の権力者と同じことは出来ないという思いと。奴を信頼して皇太子殿下を託したセレンさまへの思いと……」

「セレンさま？」

「可笑しいだろう？ セレンさまは奴の初恋の人なんだと……」

塩を撒かれ、二度と再生することが叶わない、かつてのノキアの



民が暮らした町。今は白い荒野となって風に晒されるに任されているかの地で、国が減びることの、一つの民だ蹂躪されることの恐ろしさを目の当たりにしたとエアリアは言った。

美しい額を血がにじむほどに叩頭して、奪われた家族や民に詫びていた美しい女性。慰めずにはいられなかったのだと。男は五つやそこのガキであつても、やはり男だ。その涙を止めることができるなら、何でもしようと思ったという。

少年のエアリアは祖母といつていい年の高貴な女性に抱きついて、一緒に居ると誓ったのだそうだ。

セレンさまは、そんなエアリアに『良い子』といつて接吻をしたらしい。勿論、当時のエアは男を感じさせる年では無かった筈だ。幼子の健気さに自らも母であつた皇太后さまが思わずとつた行動に違いない。けれど、エアはその唇を覚えていた。奴の顔は冗談を言っているようではなかった。あいつの頑固さは、ここまでいくと執念深いという言葉が相応しいとさえ言える。

幼い日。彼は皇太后さまの涙を止めるために、皇太子殿下を守ると誓ったそうだ。だから、自分はこのまま状況に流されて越境することは出来ない。もう一度だけでも会つて、必ず、再会の約束をしてくるまでは、どんな圧倒的な流れに遭つても、安易に流される訳にはいかないのだと。

エアリア・ロキメンが、殊勝に王命を入れ、越境したという事実があれば、この国で少しは動きやすくなる。無事に生きて、エアリア・ロキメンとして越境してくれと。

そんな複雑な話を、カイの国語力で表現できるはずもない。しかも腹は減りすぎて、睡眠不足は深刻な状況だ。張りつめきつてブランカの手綱を握っていた時かき集めた集中力は既に跡形も無い。今は深い眠りに攫われて落馬してしまわないように、意識を繋ぎ止めているのがやっとなのだ。

もどかしがるキリアンを、もどかしいままにして、カイが再び目を閉じる。先を行っていたデュカスが馬首を巡らして戻ってくる。

「限界か？」

その言葉が苛立ちを胸に抱えていたキリアンの鬱憤に油を注いだ。ヒューペリオンが限界？ ふざけてくれる。限界なんかであるものか。俺のヒューはその辺にいくらでもいる駄馬とは違う。

キリアンは滅多に使わない拍車を入れた。ヒューペリオンは不満を漲らせて風になった。その見事な駆けっぷりに一瞬デュカスは見とれた。

「キリーだけならとにかく、カイも積んで、あの走りかよ……」

馬を愛するイサクの男であるデュカスは、肩を思いつきりすくめて口笛をならした。

「全く、妬けるぜ……」

デュカスも倣って馬を駆り立てた。デュカスの馬は、拍車に素直に反応して駆けだした。行く先では真玉関が目の前を完全に塞ぐ大きさとなって、眼前にそそり立っていた。

\* \* \*

背中が痛かった。どこもかしこも強張っている。胃がぎゅうぎゅうと絞られるように痛んでいなければ、目覚めることは無かったのかもしれない。腹を刺されるような胃の痛みが一番強烈だが、体中

で疲労が軋んでいる。

と、突然。全ての記憶がどっと蘇った。ユリウス・カイ。いや、ユーレリアス・カイサリオン。お前には親友とした約束がある。彼の名前で国境を越え、彼の名前を背負ってこの国から旅立つ。

自分はいつたいたうしたのだ。そんな大切なことを忘れて、いつから眠りこけてたのか？ 情け無い……。

撥ね起きようとして、強張った体が全く動かず、唇から乾いた呻きが漏れた。

「やっと、起きたか？ よくまあ、寝たな。エア」

この声は、デューだ。何故、エアと俺を呼ぶ？

声がした方に強張ったままの首をゆっくりと巡らせる、と、体が平衡を失って、何か硬いところに落ちる。衝撃が脳天を突き抜ける。

どつと起こるの笑い声。この笑い声たちは、聞き慣れているやつだ。剣の会で屯しているときは、一時の間<sup>いつとき</sup>に何度も沸き上がるあれだ。

横にあるのは木で作られた、背もたれも無い只の長椅子。その脚をみながら、自分はどうかやらそこに寝かされていたのだらうと得心する。自分の頭を殴りつけるように受け止めたのは石造りの床。組み合わさった石の段差が背中に違和感を押しつける。上をみやると高い天井。

「エアリア」

デユカスの声が言い聞かせるように、きつちりと響いた。

「間に合ったぞ。期限までに国境は越えた。けど、ここはまだ、関所の中だ。いいな、エアリア……」

最期にもう一度付け加えられたその呼びかけは、断固とした強い調子だった。ぼやけた頭の中で、思考というものが忙しく状況を掴もうとしていた。越境できた。約束を果たせた。でも、まだ真玉関に居る。国境警備のものに、自分がエアリアでないということを悟られないように振る舞えという事……か？

「寝てたのか？」

「全く、キリアンがお前みたいなデカイのを落とさないように支えながらヒューペリオンさまで連れてきてくれたんだ。弟ってのは、全く、割に合わない商売だな。他人ならとくに捨ててるぞ」

警備の兵が直ぐ近くにいるのだろう。同じ部屋にキリアンを弟扱 いしないと、自分が贖物だとバレるって訳か。こっちは暢気に寝て いるし、さぞ、デユカスは寝惚けて見えるこっちの頭がちゃんと働 いているように神に祈ってるだろうな、と思ったら、笑いが込み上 げてきた。

「……すまん。キリー」

「……兄さん」

この声はキリアンだ。多分、この呼びかけをエアリア以外にすることは、座りが悪いに違いない。自分も二人も兄を持っている。どちらかというところ『兄さん』という呼びかけは、されるものでなく、する方だ。妹もいるが、あれが「兄さん」と呼ぶのは長兄であるデ イーノで、次兄も自分も名前にその呼称を足されていた。

（兄っていうのは、弟を名前で呼んで良かったよなア）

そんなことを考えながら体を起こそうとする。が、胃の痛みは只 事ではなく、腹筋の力だけで普段のように起き上がれなかったので、 体を裏返して手の助けを借り、なんとか起き上がる。

視界が開けた。アルフォンスの優顔がまず目に入った。自分の目の前に掌を突き出している。掴まれということだろう。カイが握った途端、体は浮くように引き上げられた。視界が突然開けた。

床だけでなく壁まで石造り。真玉関が見えだしたときの影を思い出せば、ここまで天井が高いのは、物見櫓ものみぐらの役割も担って、高く聳えていた、まさにその中ということだろう。警備兵ではなく、この責任者かそれに近いだろう身分を示す、上質の簡易武装をしている男が、雑兵を背後に控えさせて座っている。

男がカイを真っ直ぐに見ながら徐ろに立ち上がり、ツカツカと歩み寄ってくる。それから、暫く品定めするように自分と多分キリアンを見比べていた。自分とキリアンは似たところがあっただろうか。不安が多少過る。けれど、ここは堂々と観察させておくのが得策なのだ。国境では喋るなど、エアから厳命を受けたのをおぼろげに思いつく。たしかに自分がしゃべれば、どう考えても外国語訛りが出てしまう。

国境警備のチンケな役人など、ロキメン家のものから直接声をかけられるなんて思ってもいません。喋らなくても、全く問題ないでしょう。

エアリアの声を頼りに、無口を意志で貫いて、カイはただ立っていた。暫く後、男が膝を折った。

「勿体なくも、ロキメン殿をご確認申し上げます、ご無礼の段、平にご容赦お願い申し上げます。これもお役の上の事。ご寛容を切に」

驚いた。学内でロキメンだのデュカスだのが五大家と言われて、この国で最高に尊ばれている血筋なのだという知識はもっていたが、それでも、有象無象でこちゃこちゃに混じり合って過ごしてい

た。特別、こいつらに膝を折ったりしたことはないが、学校を一步でれば彼らはこういう世界に住んでいたのだ。

やはり、ここはエアリアに従っておこう。

何か言われたら、顎で軽く頷いておけばいいんです。いいですか。

カイは鷹揚に頷くに留めた。

「有り難き、ご厚情、感謝申し上げます。恐れながら、エアリア・ロキメン殿におかれましては、お持ちの筈の御命令書をご確認いたしたく、重ねての無礼をお許し……」

最期まで言わずにカイは懷にねじ込んであつた羊皮紙を取り出す。この扱いも多分微妙だ。この国での王の絶対権力を思えばこの紙をぞんざいに扱うことはあり得ないだろう。けれど、この国の作法など心得ていない。

「エアリアさま」

アルフォンスが自分の前に跪いた。ひざまず両手を恭しく差し出してくる。多分、自分は喋らないままにいるのが無難だ。エアリアがこの紙を自分に差し出したとき、たしか彼は軽くおしいただいて敬意を紙に示してから自分に押しつけた。その仕草を頑張つてなぞつてから、両手でその紙をアルフォンスの手に置いた。アルフォンスが軽く見上げてきて、片目をこっそり瞑ったのが可笑しかった。上出来、ということだろう。

アルフォンスが立ち上がって、踵を返し、今度はその男に対してから、もう一度自らも紙をおしいただいて、その男に差し出す。

男がアルフォンスがそうしたように跪いて手を捧げる。

男がその巻物を開いて確認している間に、いつの間にか傍らまで移動してきたデュカスが小さく呟く。

「そのまま……エラそうに黙っとけ」

カイは今度も顎だけで頷いた。デュカスが口の端だけでこっそりと笑った。

手続きをするので少し待つように言い置いて男が出て行ったあと、僅かな人数の兵が部屋に残っていた。話したいことは山ほどある。けれど、ここでボロを出して王都ザッティバークに戻されることだけは、なんとしても避けたい。カイは痛む胃を気にしないように己を叱咤し、イサク滞在期間の殆ど全てである学友たちの顔を見るときもなく眺めた。ここにエアとテオが居ない。そのなんと寂しいことか。

学業を終えて故国に帰るとき、国境の関所まで必ず見送ろうと約束していた。それほどに故国に帰る日は近付いていた。けれど、それは今日ではなかった。そして、このような形でも無かった。

一度この国を去ってしまったえば、おそらく届くか届かないかの文でのやりとりが精々で、きつと男同士のことだ、そのうち疎遠になつて思ひ出の中でのだけの付き合いに落ち着いていくのだろうと漠然と思っていた。こんなにも突然に、全ての経過を省いて、思ひ出という名札を付けられてしまうなどと、どうして想像できたらう。

扉が開き、あの男が再び登場した。この男の前でこそ毅然としていなければならない。カイはゆっくりと、入り口を睥睨した。

「ロキメン殿……。お待ちせいたしました」

追放の処分を受けたとはいえ、その高貴な血を蔑ろにするつもり

は無いということだろうか。先程と逆の手順を踏んでアルフォンスから手渡されたのは、イサク王家の紋が押印されたエアリアの名入りの旅券だった。

旅券の存在など完全に失念していたが、出生国発行の旅券無しでは、国家の体裁が整った国には入国できない。そしてカイの本来の身分を示す、ネルガル元首印の旅券は学校の事務方に預けたままだ。

旅券には等級があり、国名印のみの簡易なものと、今自分が入手したような国の最高権力者の印があるものでは、まったく旅の快適さが異なる。この種の旅券を持つ者に不始末があつた場合、その損害はこの国がみるというお墨付きがあることになり、持つ者は常に国が身元保証をしているという扱いになる。だから、入国審査が厳しい国の関所を通過するのも楽であるし、贅沢をしようと思いつたとき、それなりの宿の扉を叩いても拒否されることはまずない。

すると、エアリアの名を騙るかたのは国境を越えるまでと思い定めていたが、比較的安全な街道を行くなら、長い旅の間、自分はずっと彼の名を担いで行くことになる。

では、奴はどうするのだ。皇太子殿下と会うまではいい。彼が熟知した街だ。どうにでもするだろう。が、その後は？

道もない険しい山や、鬱蒼と繁る深い森をあの弱った体で越えていくのか？

掌が、あの異常に柔らかい感触を覚えている。簡単に羽交い締めできた。もともとエアは筋肉の塊みたいな連中が屯している剣の会にはまるで場違いな奴だったが、それにしてもあそこまではなかった。奴の異常は深刻だ。

旅券を凝視したままのカイの耳に、もう一度男の声が響いた。



「ロキメン殿」

まだ何かあるのだろうか。けれど、物思いにとらわれたカイは、その方を見ることができず、じっとその紙を見続けていた。男はしばらく待っていたが、カイが一向に自分の方を向かないのを見取って、仕方なしに平伏してから言葉を紡ぎだした。

「ご本人に必ずお伝えするようにと早馬でこのようなものが届いております」

アルフォンスが、その捧げられた一通の手紙を受け取り、カイに手渡した。開けてみると仕種で促され、その封を解いたカイの目の前に、そっけない二つの文が浮かびあがった。

25日 朝。ネルガル人ユリウス・カイの刑が執行されしことを報告する。

悔いあらためられんこと、また、神の御慈悲のあらんことを。

(どういうことだ?)

カイの手から、その紙が滑り落ちて行った。怪訝そうな顔をのアルフォンスがそれを拾って一目見るなり顔色を変えて、それをデュカスに渡す。

カイは頭を抱えてうずくまる。エアリアの言葉が蘇る。

陛下が死を命じた人間には……、必ず死を与えなければならぬんですよ……。

自分に死を与えよという王命。自分が逃げたことで、自分でない誰かの命が奪われたのか？ どんな男が自分の名前を担いで刑を受けたのか？ どんな男の首が、自分として曝されているのか。テオ

ドールは、自分でない誰かに石を投げ、自分でない誰かの首が落ちるところを見届けたのだろうか。

叫びたい思いを呑み込む。 呑み込む。 呑み込む。

自分の叫びは、イサクの言葉ではできない。自分はイサクの言葉で泣けない。エアリアに少しばかり自由に動く時間を渡すためにも自分はここで彼の名を持って行かなければならない。強靱な意志で全てを押さえつけたカイの肩を、デユカスがゆつくりと労るように抱きしめた。余りにも理不尽なやりようではないか。己の国は、こういう事を平気とするのだ。皆、言葉もなく、ただ暗澹たる思いを持って余すしかなかった。

## 第十章 羽化

覚悟は決めるためにあるの。

脳裏に蘇る言葉は、ラジエイラの一門として己を育てた師父であるマグダレーネ・アルントが言ったものだ。

ユリウス・カイを乗せた愛馬ブランカを見送って、エアリア・ロキメンは人目を避けるように街道から逸れて山へと向かった。幼い日に家を出てから山に入ることはしていないが、多分、森の気に触れさえすれば、どうやって身を処したらいいかは、体が思い出してくれる筈だ。

約束していた試練に挑み、生き延びることを得たあの日から、どれほど鍛えようと力がぬけていくことを押しとどめることができず、どれほど平静を保とうとしても、荒れてしまう感情の起伏に翻弄されるしか無かった自分ではあるが、少なくとも幼いあの日よりは体も頑健で、多くの経験を持っているのだ。

（自分に自信を持って）

何度も言い聞かせるように呟く。カイがこのまま国境に辿り着き、隣国へと逃れていけるかは彼の運命に任せるしかない。そこまでを、一つしかない体で引き受けるのは不可能なのだ。自分は、この国から安易に逃れていい運命を捨て、皇太子アル・マーシヨを採ったのだ。選んだのが自身であれば、その結果から逃げることはできない。自分は、カイに押しつけたエアリア・ロキメンという名前とは別の存在としてやっていくしかない。

王都が、逃げ出したカイに対する始末をどうつけるのかは分からない。大々的に捕り物を行ってカイに逃げられたという不始末を公

開するよりは、他の件で死罪を言いつかつている人間をカイとして処刑する辺りが、むしろ、ありそうなことの気もする。テオ　妹を殺されたテオドル・カルラー　が、全く見ず知らずの男をカイだとして、そこに礫<sup>つぶて</sup>を投げつけることを強制され、口汚く罵らねばならず、断首されるところを見ていなければならなかったら……。過酷な役割を幾重にもテオドルに引き受けさせてしまった運命を呪うしかない。自分を友とただけで、なんというところに追い込んでしまったのだろうか。

けれど、後悔はできない。自分は、無実であることは間違いないカイを見殺しにしたくなかったのだから。

（私は……これから……）

師であるマグダレーネ・アルントがその道を選んだように、自分も覚悟を決めなければならぬ時がきたと、彼は悟っていた。ずっと、そうしたくは無かった。往生際が悪いとはこのことだ。

ほんの子どもだったころ、隣国の王であり、主、ウィルディーン  
の祖父である人が差し向けてきた恐ろしい刺客から大切な主を守る  
うとして死にかけたことがある。己の体を盾にするのは愚かなこと  
だ。動けなくなってしまうては、次に備えられない。子どもである  
非力をとことん悔やみ、男らしい正々堂々とした技でないことを承  
知でマグダレーネ師が使う『針』の伝授を望んだ。

マグダレーネ師の言葉を覚えている。

覚悟というのは決めるためにあるのです。

お前のような子どもには、そのような言葉は似合わぬ……。

ラジェイラの針は、非力を補う為にある。それだけでなく、指先に繊細な感覚を宿す必要があるために、あの試練を受けることには

意味があるのだという。門外不出の秘伝としてあるため、生き物として生来、備わっているものを差し出すことでしか本来伝授が許されないことなのだ。

けれど、生き延びるために非力でも、子どもでも、鍛えられた大人に対抗できる技が欲しかった。エアリアが刺し違えを選んだことで、なんとか防げはしたが、それでも皇太子の命が危ういところだったという事件の直後でなければ、本家の宗匠もエアリアがその技を、あれほどに幼くして鍛練を始めることに頷きはしなかっただろう。本来は代償を先に支払ってから初めて許されることなのだ。

あの時の約定は一つ。大人の男になったとき、その源を差し出か、その時にいたって男であることを捨てられなければ、針を使う腕の腱を切るかを選ぶこと。

子どもの指先は皮膚が柔らかく、まだ感覚が繊細である。あの時点できちんと出すべきものを差し出してから、と、ならなかったのも、恐らくそのままで習得可能だろうという判断がなされたのだろう。

もちろん、自己判断がまだできないだろう幼さにも配慮があつたのだと思う。自分はラジェイラ家の技を使うには、何から何まで異例尽くしだった。

針を学ぶのは楽しかった。人間の体というものの作りの不思議さへの興味は、どれほど知ったとしても、更に奥深い未知に刺激され、尽きることが無かった。

仕掛けのように単純に何処かに何か力を加えれば作用が及んで反応に至る。そういつた体の機能を利用する。不具合にすることもできるし、不具合を宥める方にも使える。世の中では白魔術師の技であるとされている薬草学も、人の体の仕組みを『現象的に捉える』ラジェイラの技には必須であつた。

多分、自分は町で治療師の看板を掲げて生きていける。あの技を学んだことで、何度も自分のことも皇太子ウィルディーンのことも守ることができた。学んで後悔は無い。そして、このやっと使えるようになった（多分、これらかも経験を積むことで、もっと使えるようになる筈の）技を、利き手の腱を切ることと捨てるくらいならば、男という自分を差し出すことの方がマシだと、あの時は思ったのだ。

自分は深い深い溝に架けられた橋を、引き返せないということになんと無頓着に渡ってしまったのだろう。後悔はしている。この激烈な変化に戸惑いながら、悔やんでいる。あの時に戻れるならば、自分はどんなものも差し出すだろう。それが利き腕を肩から落とすことであっても、それを選んだかもしれないほど。

幼いころは大人の女性ばかりが目につく環境にいて、同じ年頃の女の子などとは全く縁がなかった。少年の盛り時代は、男ばかりが暑苦しく詰め込まれた学舎で過ごした。背が伸び、腕も脚も鍛えただけ太さを増していく季節を迎え、己を鍛えることは直ぐ結果として目に見え、その意味でも充分に楽しかった。

異性に己を打ち込みたいという欲求に苛まされるようになり、体中が大人への階段を無理やり駆け上らされるような激変を迎えたころ、エアリアはラジェイラ本家に呼び出された。季節が至った。選べ。約定を果たせ……、と。

青年期の男である衝動を持て余していた。ときたま、何もかも打ち壊したいというほど強烈な破壊衝動がやってくることにも戸惑っていた。針の技は、奥が深く、分かったと思うとまた見えていなかったものに気付いてしまい、もっと知りたくなる時期にあったのも迷わなかった理由の一つだ。

あの時、選べといわれたあの時      自分は迷わなかったのだ。幾

重にも、恨むならば自分しかない。最初からマグダレーネ師はいい顔をしていなかった。主である人が男ならば、針使いになど成らない方が良く、いつも言っていた。それを拝み倒して本家に直談判の機会をもってもらったのも、自分なのだ。

この数日、カイを逃すことだけに気を取られて、自分の鍛練にあてる時間は殆どなかった。この手や足の腑抜けた感触が一気に増した気がする。筋肉が融けていくと、細さが際立って見えるようだ。マグダレーネ師がそうなように、自分もそのうち、見て分かるほどに長い手足を持つようになるのだろうか。肩や腰 忌ま忌ましいことに胸も などが丸みを帯びてきてしまうように。自分は今まで男としてやってきた。こういう柔らかさは、見目麗しい女にこそ相応しい。男の持ち物とするには、余りにも不格好だ。けれど、マグダレーネ師がかつてそうしたように、男だったということへの未練をきっぱりと断てば、ものごとはもっと単純になる。

男の持ち物としては不格好だが、女の持ち物としたら、そこまで捨てたものでない。

堂々と晒せばいい。

毛虫が蛹を経て蝶になる。そういう美しさとは無縁だろうが、まあ、似たようなものだ。生まれ出たときの形に、かつてそうであった形に拘泥しなければいいだけだ。

この国で自由に動くために有利になるなら、その程度の不本意には目を瞑ればいい。

エアリアは暫く自分の足にとって心地好い速さで、鬱蒼とした森

を走った。なんと空気が清々しいことだろう。森の木々が発するどこか清冽な気配が、濁った後悔を押し流してくれている。人たらしとよく言われるが、もしかしたら自分は、孤独をこそ愛しているのかもしれない。親しい者たちの視線に怯える必要がないというのは、こんなにも心地好い。

失ったものは取り戻せない。自分は服を着てさえ居れば、どこから見ても女という存在になれるのだ。脱いでしまえば、中途半端に残る男の残骸が、滑稽を晒すのだが、恋人でもできない限りみせる必要など無いのだ。

この日が来ることを覚悟して……というわけではなかったが、伸ばしている髪も都合がいい。貴族の女たちがそうするように結い上げるのは流石になけなしの矜持が許さないが、花でも挿すか、綺麗な布で縛るかくらいならしてもかまわない。それで少しだけでも女らしく見え、行動の自由が確保できるなら安いものだ。

エアリアはもう迷わなかった。セレン殿に侵入するには、男である数倍も難易度が下がる。問題は、どうやってザッティバーク宮殿に入るかだ。入れさえすれば、セレン殿に至るのはたやすい。

覚悟は決めるためにあるのです。

はい。マグダレーネ先生。私もそう思います。

\* \* \*

王都ザッティバークのほぼ中央に位置する、一つの町に匹敵するほどの規模がある王の御在所である宮殿には、たくさんの建物が無



秩序に乱立している。

中心線よりやや北側の一角は、一番古くから丁寧に作り上げられた為か、整然とした印象がある。この都の本当の中央に広がる広大な庭園の北に面した一際<sup>ひととき</sup>壮麗な建物こそが御正宮<sup>ごせいきゆう</sup>と呼ばれる。そこには、あらゆる政務が執り行われるための大小さまざまな部屋が据えられている。

そして、小さいながらも種類も量も贅沢に薔薇が植えられている中庭を挟んで西には、代々、正妃か皇太子の生母が住んできたロイゼ（薔薇）宮殿という小さな建物があり、逆の東側には、清楚な花々が育つ、そして実利的にも重要な意味を持つ薬草園である『百草苑』を挟んで、現国王の生母であるタチアナの住居<sup>すまい</sup>するセレン（妖精）宮殿がある。百草苑には教会に籍を置く白魔術師たちが常駐して管理している為、彼らが起居するための小さな建物があり『庭師の家』と呼ばれている。

白魔術師というと、妖しい異世界の力の中に生きている者たちと無知なものからは思われがちであるが、彼らは術師である前に出家して神に使える聖者たちであり、副業として薬草学に深い造詣を持つ職業集団でもある。彼らは男女の別なく、髪を隠すフードから始まって、ゆつたりと爪先までを覆う長い白色の長衣<sup>ローヴ</sup>を着ていることから、『白い人たち』とも呼ばれている。

エアリアは町に出ると直ぐに『使いの途中で荷物を奪われた不運な女』を演じて教会に泣きつき、一食にありついた勢いで、白い長衣も一揃い失敬していた。この真っ白な長衣を纏っていれば、この百草園辺りでは傍目には全く目立たないが、困ったことに白い人たちの不審はかってしまうだろう。

御正宮近くに居るため、彼らは特別に選ばれている筈だ。それが、常に起居を共にしているのだから違う顔が混じっていれば即座に御用だ。百草園の丈高い草陰に身を潜めて、手詰まりというほどには

追い詰められた気はしていなかったものの、エアリアは次にどう行動するのが、より安全な手なのか判じあぐねていた。セレン宮もロイゼ宮も、近衛兵が常に配備されている。王が住いする内宮とは違い、中に入れば勝手知ったる場所であるが、面倒を起こさずにあの壁を通り抜けるのは少々難しい。

近衛兵たちは、入り口だけを暢気に守っていればいいものを、入り口に立ちんぼするだけでなく、幾つかの班に分かれて常にぐるぐると建物の周りを警邏している。連中ときたら必ず二人以上で行動しているから、一気に動きを殺すのは、毒針を使ってさえ難しい。『どなたでもどうぞご自由にお通りください』並の警備しか敷かれていなかった皇太子宮とは、まるで違う。マグダレーネ師が大切な奥様のために気を配った結果こうなっているのか、今更珍しいことでも無いが、皇太子宮だけ、露骨に手抜きがされているだけなのか、なかなか判別し辛いものがある。

「あなた……。見掛けない顔ですけど、新しい人ですか？」  
いきなり声をかけられて、エアリアの肝は一瞬で縮んだ。恐る恐る顔をあげると、綺麗な緑の瞳が自分をじっと見つめていた。かけられた声は僅かに震えている。自分を完全に不審者として誰何しているのだらう。その握りしめられた拳が可愛らしい。こんな追い込まれた状況にあってさえ、若い女性をみて可愛いという思いを抱ける自分にもエアリアは少々驚いた。自分はまだまだ、男だ。

女の方も驚いていた。草陰に隠れて、油断泣く奥様の宮を伺っている怪しい人影に気付いてしまい、勇気を振り絞って問いたたさうとした相手が、まるでセレン宮に数えきれないほど在る妖精セレンのように、あまりにも美しい面差しをしていたのだ。滑らかな陶磁器を彷彿とさせる白い肌。纏っている白い長衣と比べたとしても、尚この人の方が白く透き通っている。夜を思い出させるような黒い瞳。フードからはみ出している前髪の艶かしいまでの黒さ。こんなに綺麗

な人間が世の中に存在するのだということに、一瞬で女は思考を奪われた。

「……」

なんと言い逃れようか悩むより早く、エアリアは気を失うふりをした。教会育ちで教会しか知らぬ乙女なら、突然倒れた女を問答無用で警備に引き渡しはしないだろう。賭にはなるが、苦しい言い訳をするより多分簡単にこの局面をやりすごせる。

「も……もしもし？ あの、あなた……どうなさいました？」

本当に自分についている。自分をとっさに助け起こそうとしてくる女の感触が気持ちいい。女の声というには、かなり違和感がある声でさらなる不審を抱かれるより、喋れないという選択が多分正しい。エアリアは断固として目を閉じていた。自分でも思っていないか、つたほど疲れていたということだろうか。目を閉じて柔らかい胸に抱きとられて揺さぶられている内に、突然睡魔が襲ってきたのだ。その誘いに抗しきれず、こんな場面で相当図太いことに彼は本当に眠ってしまったのだった。

女は便利だ。

つくづくエアリアは思った。気がついたら柔らかい寝台に寝かされていた。不審な男だったならば、問答無用で近衛兵に引き渡され、牢にでもぶち込まれて終いだが、ここまで待遇が良いとびっくりする。

「気がつかれましたね。……あの、何故、あのようなところにいらしたの？」

この声はあの可愛らしい乙女だろう。

自分を覗きこむ瞳をじつと見つめ返して、エアリアはちょっと首を傾げてみせた。自分でも何故あそこにいたのか分からない……という風を装う。

じつと見つめていると少女の頬が面白いくらい紅色に染まっていた。それが余りにも見事だったので、エアリアは思わず微笑んでしまった。

「あの……。あなたはどなた？」

軽く顎を振り、唇に指をあてる。喋れないという意味にとつくれるだろうか。右手にペンを持って左の掌を紙に見立てて、何か書いている仕種しぐさを付け加えてみる。女は合点したという顔をしつつ、びつくりしたような目つきになった。

「女の方ですのに……。字を、お書きになれますの？」

教会育ちの白い人で、しかも王宮の百草園に入れるほどの才人ならば、彼女自身が文字を扱えるだろうに、やはり、不審な女に文字は不似合いということか。

「少しの間お待ちになってくださいね。今、導師さまをお呼びして参ります」

ここは覚悟を決めて、作文を考えておくべきだ。少しの間だったが眠ったことで、随分考える力が普段の水準には戻ってきているような気がする。

暫くして、扉が開くと、年寄りの男が三人と、やはり年寄りの女が二人、険しい顔をして現れた。あの可愛らしい少女の面影を残した女は居ない。

女の片方が近付いてくる。手にした盆にはインク壺と驚ペンと、驚いたことに紙が乗っている。高価な紙など望んでもいなかった。

石版くらいを所望していたのに随分贅沢なことだ。男の中で一番太っている人物が徐ろに口を開いた。

「ここを何処と心得て来なすった？」

エアリアは少し迷ってから、書き慣れた男文字の筆記体ではなく、金釘流にも見えるだろう単書体で一本ずつ丁寧に文字を綴った。

## 百草園

老人が息をのんでから、大きく吐き出す。

「あなたはセレン宮殿を窺っていたと聞きました。その白い長衣は本当に教会で名を頂いて受け取ったものであるうか？」

白い長衣は借用。白魔道師に非ず。

老人はじつとその紙を見ていたが、ふっと笑った。

「無理をして拙い字を書かなくても良い。そなた、かなり書けるのであるう。難しい言葉をそのように澱みなく綴りながらでは、不自然この上ない」

エアリアは少し悩んでから、頑なに一筆づつ綴った。

筆跡を残したくない。

「そうか。それで、そなたの名は？ 何の目的でここまで来たのだ？ 女の身で大それたことを」

彼はもう一度深く考えて、そして、先程部屋に一人きりになれた僅かな時間に思いついた名前を綴った。この名前が、この先の長く

はない生涯を通じた名乗りになることを、この時点での彼には知る由もなかった。

ディーナ。

自分が皇太子ウィルディーンを普段、親しい者の名前を呼びやすく縮めて呼ぶイサクの習慣に則って『ディーン』と呼んでいることは、マグダレーネや皇太后は知っている。そのディーンの末尾に所有形にも使われる『a』を足して女性名にすれば、恐らく多くを語らなくてもマグダレーネ師なら分かってくれる筈だ。

けれど、もう少し情報を足して確実性を上げておこう。

セレンさま付きのマグダレーネ・アルント師にお伝え願いたい。不肖の弟子ディーナが、お叱りを受けるために参りました、と。

「アルント殿を師と呼ばれるとは……、なるほど、ラジェイラの者ということか。それでは、白い衣を手に入れることも、ここまで来ることも、たやすかるう。得心がいった」

この老人はどこまで知っているのだろう。エリアは訝った。ラジェイラの試練を知っているのか？ マグダレーネ師が女では無い事も知っているのだろうか。そうであれば、自分が女でない事も……、分かってしまうのだろうか。

「アルント殿に取り次ぐだけは致そう」

\* \* \*

長いドレスの裾を引きずっても、楽に歩くことができるよう、緩やかすぎるほどの傾斜で、一段も広く作られている階段だった。エアリアは最近、砂漠の民族衣装を好んで着ていたが、それでも裾を引きずる訳ではない。形状の僅かな差は、歩きにくさの点で大きな差になっていた。

少し前を歩いているマグダレーネ師は、易々と上っていくが、軽やかに歩くことはかなり難しく、エアリアは手摺りに掌を滑らせながら慎重に歩いていた。セレン宮と呼ばれるこの建物には、それぞれ、鬱陶しい程に天使が棲息している。踊り場に至ったとき、その手摺りの終わりにちょこんと乗っている羽が生えた天使に己の指先が当たった。

それに気付き、ふと足を止めて、その天使を見る。

初めてこの階段を上った幼い日、この天使は自分の目の高さにあった。懐かしさに、ついその天使の頭を軽く撫でた。皆が無意識にそうするのか、天使の頭のとっぺんは艶々になっていて、可愛らしさにも磨きをかけている風だった。

「ディーナ……」

マグダレーネに呼ばれても、咄嗟に自分のことだとは思わなかったエアリアは、暫くそのまま天使から目が離せなかった。

「ディーナ」

マグダレーネの口調が断固とした響きを帯び、そこで初めて自分が呼ばれているのだと気付いたエアリアは、天使をもう一度軽く撫でてから、再びやかい階段に挑んだ。女という生き物は、この上に胸を細く見えるように締めつけたり、先が細まって踵が高い靴を履いたりするのだから、大したものだ。

今回は止むに止まれず女を騙ってはみたものの、それでもマグダレーネのように、ずっと女としてやっていくつもりはさらさら無い彼は、王族以外の成人男子には禁足域であるセレン宮で自分を堂々と連れ歩くために女装を強いたマグダレーネに、山のような文句を腹の中でだけ繰り返していた。

優雅なドレスは可愛らしい女にこそ似合う。自分は剣の会の友たちに比べれば随分細身ではあるが、背自体は決して低い方ではない。多少胸があるうが、毛が抜けてしまった肌が海鼠なまこだろうが、悪趣味というか、不気味としか思えない。しかも、結い上げてしまった髪は更に長身を高く見せている。それから何より、この化粧だの香水だのの臭い。女から仄かに漂ってくるのは好ましいが、常に付きまとわれるには鬱陶し過ぎる。

それでも、目上に表立つて反抗するような習慣は、ラジエイラの門下には存在しないのだ。エアリアは我慢に我慢を重ねている。

「体の前の裾を軽く持ち上げる方が、手摺り磨きより歩きやすいですよ」

余計なお世話だ、と毒づきつつ、顔はにつこりと微笑む。何が哀しくて、誰がそんな女々しい歩き方をしなければならないのだ。業腹ではあるが、師には逆らえない習慣が骨の髄まで染み込んでいる。試みると、悔しいことに、その方が遙かに歩きやすい。それを見て満足げに頷いた師の微笑みも気に入らなかった。あれ以来、感情が容易に波立つようになってしまっていることの自覚はある。カイを連れ出すときも場所も時も弁えず、壁に喧嘩を売ってしまったのが記憶に生々しい。

応急手当をしただけの包帯を理性のよすがにして、爆発したい気持ちを押さえつけ、なんとか叫びを呑み込む。全く、感情が安定しないのは不便この上ない。



セレン宮の皇太后タチアナ。皇太子ウィルディーンになんとして  
ももう一度会おうと思えば、かの人の居間が一番安全であるという  
自分の判断は多分間違っていない。けれど、こんな格好で歩くのは、  
我慢の限界だ。白魔術師の長衣で勘弁してもらいたかった。

セレン宮に起居する数多くの侍女たちは、主タチアナのお側付き、  
マグダレーネ・アルントに行き会った場合、その場に跪くのが普通  
である。彼女が膝を折るのはタチアナに対してのみだ。が、今日は  
いつもと違っていた。彼女が伴っている若い女の容貌が、嫉妬すら  
覚えられないほど余りにも傑出していたのだ。口許に微笑みを滲ま  
せることすら無く引き締まった表情。滑りさえ感じられるほどに白  
く艶やかな肌。金や栗色の淡い色彩をした髪を持つ者が多いなか  
にあって、肌の白さを際立たせるような黒髪が異彩を放つ。高く結い  
上げられたその豪華と形容してよいほどの見事さ。皆が皆、面白  
いほど一様にまず魅入られた様な凝視を送って、それから一瞬遅れ  
て、慌てて跪く。

不機嫌そうにどんな無表情に固められていくエアリアを見れば、  
その皆の視線が感嘆に起するものと彼が全く気付いてないことは明  
白で、マグダレーネは密かに面白がっていた。この愛弟子は、自分  
が今どれほどすれ違ったただけの人を魅了しているか、まるで気付い  
ていない。女好きの男どもがみたら、涎を垂らすのは間違いないだ  
ろう程なのに、全てが忌ま忌ましくてならないという雰囲気なのが  
可笑しい。

自分でさえ、階段の踊り場で物憂げに天使を撫でていたエアリア  
には見とれそうになった程だ。

扉の前で、マグダレーネは足を止めた。振り返って、苦勞して歩  
いている弟子を待つ。なんとか追い付いた彼に、軽く頷いて見せた。

中にあの心も体も有り様も、全て貧弱なこの弟子の主がいる。

しかも、皇太子は彼を守るためにエアリアがここまで大きな犠牲を払っていることをまるで知らないのだ。この形の彼を、自分の『影』であるために、ただそれだけのために、このような形になっている彼を、あの、度量というものが無い少年が受け入れることができるのかにも一抹の不安は拭えない。

それでも、『会いたい』と。万難を排して『会いたいのだ』とこの弟子が望んだのだ。いつそ、この哀しく美しい存在になってしまった愛弟子が、ウィルディーンという少年を綺麗さっぱり見限れるように、この会見が悲惨なものになった方が良いのではないか。そんな気さえする。

扉の向うに狭量な少年がいる。

自分にはこの二人の行く末を知ることとはできない。ただこれだけは言える。向かい合うことでしか、この青年は先に進めないのだ。

貪欲に葉っぱを食い尽くしていく芋虫は、羽化して蝶となった後は蜜や雫を吸うのみになってしまいが、次世代を産み、命が尽きる。そのような蝶ならば、この美しさも儚さも意味があるうが、この弟子の美に意味はない。未来の全てを捨てた故の哀しいものなのだ。けれど、それを哀しいことと受け取る器量を、あの少年がもっているとは思えない。

この扉を開けるなど、言いたい。彼が絶望し、傷つくのは目に見えている。それでも、ラジェイラに連なるものであれば、主という存在への絶望も、未来への絶望も、それぞれ自身が受け取って乗り越えていかなければならないのだ。誰も替わってやることはできない。

扉の横に控えていた（やはり一歩遅くのが遅れた）少女に、告げ

る。

「開けなさい」

畏まった少女が扉を開ける。命令されたときそうするだけが役目なのだから。

扉の向うには、彼の主が居る。

## 第十一章 狭間で人と王

「イル……」

酷薄を恐れられ、自らもそう思われることを望んでいるかのように殊更に冷淡な振る舞いをするイサク王イルデイス・デル・イサク。彼を、この国で良く見られる、親愛の情を示すためのファーストネームを短く縮めて使うやり方で呼ぶ人間は限られている。まず、母親であるセレン殿タチアナ皇太后。王とイサク王立学校で学友であった、現ロキメン家当主のダン・ロキメン。ローレシア殿こと、愛妾のカレン・マニ。

そしてもう一人、イルデイスの『影』を拝命しているクラウデオ・エマヌエル・ヘルダーリン。

彼らとて、公式の場所では決してその様に呼ぶことはないが、王が執務を執り行う正宮ではなく、内宮（私生活を営む宮）のパティオ（中庭）を望むお気に入りの一室で寛いでいる今、『影』のクラウデオ・エマヌエル・ヘルダーリンは、当然のように王と同じ造りの瀟洒なソファに腰を沈めて、やや、反り気味に背を伸ばして寛いでいた。

「言っ……。言いたいことは、見当がつく」

イルデイスが面倒くさそうに、自らの顔の横で掌を泳がせた。その位で黙り込んで、自分が居る意味がないと、クラウデオ・エマヌエル　イルデイスはミドルネームの頭を縮めてエマと呼ぶは、それに構わず続けた。

「ダンを……見てられない……」

イルデイスが不満そうに鼻を鳴らした。

「エマ。お前が俺よりダンを鼻屑にするのはいつものことだが、面白くない」

冷酷王と恐れられるイルデイスが、公の仮面を脱ぎすてたときの素直さが、クラウディオ・エマヌエルには心地好い。先王ダナエが若さに任せて徹底的に破壊し尽くしたノキア。その民の不満を鎮めるため、王族の生き残りの娘に産ませた、異民族の血を引く一王子に過ぎなかったイルデイス。

イサクの貴族出の妃たちが産んでいたのが、その時点では女兒ばかりだったため、彼は名ばかりの皇太子位を与えられていたものの、国粋主義の色が濃いイサクにあつて、その後ろ楯になるうという地位あるものは皆無だった。

クラウディオ・エマヌエルはつくづく、皮肉なことだと思う。今、自分の半身ですらあるイルデイスが、その息子ウィルディーンにしている仕打ちは、イルデイス自身が苦しんできた幼い日に恐ろしく似通っている。

違つのは、ウィルディーンにはイルデイスの生母が祖母として在つて、イルデイスの目を盗んでは何くれと気遣いをするのと、ウィルディーンは皇太子ではあるものの、イサクの一般的な伝統である長子相続から見ると、異常とも言える次男であるということ位だ。長子の生母であるカレンが、血筋の定かでない庶民の娘というなら止むを得ないと世論もなるだろうが、カレンは五大家のマニ家の出身だ。しかも、現王妃をイルデイスが娶る前、サーシアが生まれた時、カレンは皇太子妃の座にあつた。国民はカレンが正妃に返り咲くことは無理でも、皇太子は長子であるサーシアにと願っている。

イルデイスの愛情がカレンにあることも、状況を複雑にしている。また、長子であるサーシアが英明なこと、絵に描いたように皇太子ウィルディーンが愚鈍なことも周知の事実である。誰もがウィルデ

イーンの廃太子を望んでいる。

皇太子の不幸はそれだけでない。イルデイスの策略に填まって娘を嫁がせたことで姻族となったマヴァルの現王エステバン・ドミンゴ。ウィルディーンにとつては実の祖父になるわけだが、イルデイスが求婚した当時は、エステバン自身も、戦をしては勝利に導く強い男であつた故に、それに露骨な嫉妬がありながら、強すぎる軍を掌握しているエステイバンに、当時マヴァル王であつた実兄との深刻な確執があつた。

イサク王家との和平を盾に、兄に王権を移譲させるために必要だつたとはいえ、もともとが自国を侵略統治していた憎むべき隣国である。壮年を通りすぎて老境を迎えつつある今、姻戚であるイサク王家へ侵掠する口実を、エステイバンは切実に求めている。王宮内にもかかわらず、幾度となくウィルディーンが暗殺されそうになつたこと、その内二度は王妃アンヘラ自身が狙われさえしたこと。それはイサク王家にとつても深刻な問題であつた。

普通の神経で王様なんて家業はやっていられないと、クラウデオ・エマヌエルにも理解オ・エマヌエルは思うのだ。娘や孫を、侵掠の口実欲しさに殺そうとする。異常としか言いようがない。

しかし、皇太后タチアナは、クラウデオ・エマヌエルにも理解できる種類の人間だ。息子の愛情が届かない孫には、愚鈍であつても憐憫が働くのだらう証明に、イルデイスの学友であり、軍を統率するロキメンの息子を『影』として側に付けるように画策したのだ。ダン<sup>ダン</sup>は軍などを仕切らせるには、些か単純すぎるのが難点だが、誠実という看板を背負っているような男だ。長子を年齢が丁度いいというだけで、ウィルディーンの『影』として欲しいというタチアナの泣き落としに、まんまと引かかった。

気の毒なのは、ダンの息子というだけで茨<sup>いばし</sup>の道を歩かされている

青年だ。同じラジェイラの教育を受けているというだけで、クラウド・ディオ・エマヌエルには、ダンの息子エアリアには親近感を覚えている。

クラウド・ディオ・エマヌエル自身もそうだったが、イサクの貴族の子弟は、王立学校というところで、基本の教育を受けることが多い。あそこで青春の一時を過ごすことは、人生にとつて宝に等しい。自国が強大であることだけでなく、世界は広いということを実感できる場所だ。ダン・ロキメンとクラウド・ディオ・エマヌエル・ヘルダーリンは同年で、王立学校の同期であり、学生時代に築いた友情は変わることなく続いて持っている。

その息子、皇太子ウィルディーン付きの影として使命を持つエアリア青年も、今、その年齢の多くの青年がそうであるように、当然のように王立学校に在る。ただし、その彼について聞こえてくる評判は、ウィルディーンのものとは正反対である。

才色兼備という言葉は、麗しき女性ではなく、彼のために在ったのだ、とまで言い切った知り合いがいる。彼の弁によるとこうだ。

いわゆる絶世と称される美女と並べたとしても、決して見劣りしないだろう水際立って人目を惹く容姿。優雅な立ち居振る舞いは、ただの歩みが優雅な舞いのようである。成績もそこそこ優秀。（サシア殿下には劣るが……）特に言語に対する才能は特筆に値するという。それから、乗馬の腕も並でない。王妃アンヘラ付きの近衛部隊にいたという、騎馬民族コザ出身の母親の血だろうか……馬に乗っているというより、彼の足が四本になっただけの自然さだ。

と、かなりの持ち上げ様だった。それから忘れてならないのが、人の輪を作り上げる才能だそう。人を結束させることの勘所を心得ているようで、入学して二年を待たずに王立学校の伝統的にある一派閥を、一大勢力に纏め上げたというのだ。

クラウディオ・エマヌエルは家柄によってではなく、才能によって国を支えていく人材を常に補給することも、己の役目と心得ている。だから、王立学校で教鞭を取っている者とは、常に親しく交わるように心がけている。その誰に聞いても、彼はあの皇太子の『影』で終わるには勿体なさすぎるというのが返ってくる答えだった。

ロキメンの嫡子として王立学校の門戸を叩いていたならば、次世代のイサクの国政を担うに相応しいだけの器量を備えた青年として、誰よりもクラウディオ・エマヌエル自身がエアリアを望んだだろう。

人を惹き付けることができるというのは、間違いなく、彼を実質的に育てた、タチアナ付き『影』であるマグダレーネ・アルントの功績だろう。彼女のことは、若いころは、同じラジエイラ門のあるべき姿を体現している見本として、常に意識してきた。しかし、タチアナ付きのマグダレーネが育てたことで、エアリア・ロキメンの人生は決定的に破壊されてしまったのだ。皇太后の『影』の近くに起居する少年には、青年へと脱皮して『オス』になることを許されていない。

エアリア青年は『ラジエイラの針』の使い手だという。『影』としてラジエイラに教育を受けたもののうち、ごく僅かのものだけ、その初期教育を受け終わった段階で、高貴な女性の間近に仕える意志があるか確かめられる。いわゆる『試練』と称されているものだ。女性好みということ、『見栄え』も条件に入っているらしく、クラウディオ・エマヌエルには、そもそも試練を受けるかの打診すらなかったのだが、それを残念だとは髪の毛一本ほどにも思わない。

そこで『はい』と言ったものは、ある特殊な処置を受ける。それこそが『試練』と称されるもので、その処置を受けた故に命を落とすものの中にはいるのだ。試練をくぐり抜けて生還したものに、報償として伝えられる秘伝が『針』である。あの青年が『針』を使う



ということとは、彼が既に厳密な意味で男ではないことを意味している。

ラジェイラ家の様々なしきたりは、縁がなかった幸運な者たちには、理解がとうてい及ばないだろう。自らの財産や生命よりも、主に対する絶対忠誠を育て上げる機関での厳しい『戒律』にも等しい多くの決まり事や、徹底した年功序列と血統至上主義。青少年を良く躾けると評判が高い王立学校など、ラジェイラの生活に比べれば、微温湯に浸かるのと等しい。

生きるか、死ぬかを賭けてする恐ろしい試練とは、言葉を選ばず直截に説明すれば、精通を迎えたころの少年の、男としての元である睾丸を抜く外科手術のことだ。つまり、去勢である。

貴婦人の側に仕えるためにもともと身分が高い青年から生殖能力を奪うというのは、今の自分に見れば信じられないほど乱暴な話だ。が、あのラジェイラの空気の中では、『試練』を受けるかどうかの打診があるというのは、秀逸であることの証明に他ならない。あの当時は声がかからなかった自分に失望すらしたのだ。子どもをラジェイラに隔離して育てるのを歴代の誰が始めたことが分からないが、考えた人間は天才だと思う。世間や未来や人間を知らずに純粹培養されることがなければ、誰が男としての抛り所を捨ててまで他人に仕えたいと思うだろうか。

エアリア・ロキメンはラジェイラの針を使う。つまり、彼はもう、試練を越え、報酬を受け取っているということだ。クラウド・エマヌエルは思う。彼ら『針使い』が主人となる人の側で『影』となって数年して、普通の世界のありようを実感したとき、己の選択の愚かさにくつと打ちのめされるのだろう。その時の彼らがどんな風にそのことと馴れ合っていくのかは、女性付きとなった彼らとは、社会が完全に隔たっているので分からない。

ただ、自分のように王や宰相付きの『影』となつたものは、ラジエイラー門である連帯感を常に持ち続けている。だから、上が反目し合つても水面下でいつでも連絡がとれ、いい方向を探ることで彼ら『主人』の衝突の衝撃を軽くすることが出来る。おそらく、少なくとも男性を失つた彼らにも自分たちのような連帯は存在しているに違いない。

イルデイスより一呼吸ほど年長であつた彼も、エアリア・ロキメンと同じようにラジエイラー門でありながら、王立学校で青春時代をすごした。ラジエイラー門閥と王立学校での所属会（朋友会だつた）派閥。この二つで築いた人脈が、現在のクラウディオ・エマヌエルを支えている。

あの青年は内宮（東洋でいうところの後宮に似たもの。規模が小さい）のラジエイラー門閥にどの程度関わっているのだろうか。『試練』を契機に普通であれば完全に世界を異にする自分たちだが、彼は内宮に居場所を与えられず、王立学校に通う男の『主』を押しつけられた。おそらく、ラジエイラー門に人間多しといえども、前代未聞のことだろう。つまり、世の人が無邪気に信じているように、いつでもロキメンの長子として国政に携わることができる人間に戻ることは、彼にはできない。

ラジエイラーの『試練』は、遙か彼方の東洋の異国で公認されている特殊勢力だという宦官職や、先王ダナエがノキアの男たちにやつたような征服の意思表示、特殊な考え方を取る宗教者が自浄と称してやる完全去勢とは違う。家畜の肉を柔らかくする為や、交配を管理するためのそれと同じようなやり方で睾丸を抜いてしまうのだ。だから一物だけは無傷なまま残されるらしいが、それでも『ラジエイラーの試練』を生き延びた者は女性に対する性欲自体が激減すると聞いている。体型も個人差はあるが少なからず女性化してしまうので、多くのものがラジエイラーを出るとき、女性としての名を名乗る

ようになる。かの皇太后タチアナの『影』マグダレーネ・アルントも、生まれ出でたときは男だったのだ。あの方もまさに白皙の美少年だったそうだ。そこまでして補填される能力が、暗器の使用法伝授程度では、割に合わないことこの上ない。

これらのことは、ラジェイラの内情を知るものには、明白な事実だ。だからこそ、エアリア・ロキメンが『針使い』と知っている多くのラジェイラたちには、エアリア・ロキメンが少女を凌辱したという罪状が、最初から恐ろしくきな臭く違和感をもって聞こえてくるのだ。

おそらくクラウディオ・エマヌエルと同じように、ラジェイラ門の仲間たちは確信している。彼の無罪と、彼を陥れたものがラジェイラを知らないことを。

一度だけ、イルディスの招きで内宮に来たウィルディーンに従って、エアリア・ロキメンもここに来たことがあった。その時、初めて一目見ただけで確信した。あの青年は、もう二度と戻れない道に向かつて舵を切ってしまったのだと。

軽やかな足どり、隙のない身のこなしで彼が廊下を歩いただけで、ご婦人方は彼に魅せられてしまったかのようだった。扇を忙しなく使いながら、溜息や称賛する声が聞こえたが、その全てが、事実を察することが出来たクラウディオ・エマヌエルには虚しかった。

背筋が通っていることで一層すっきりとみえる立ち姿。茹でたての卵を剥いたように滑らかな肌。夜に刷毛で墨を塗り重ねた程にも見事に黒い髪。それを頂で無造作にまとめ、見慣れない形の襟が異国風に高く立っている、ゆったりした上着を着ていた。おそらく年齢を重ねても目立ってくることはない喉仏を隠すための苦肉の策な

のだろう。あれからご婦人方の中で、その形の襟をしたブラウスが流行ったことは皮肉としか思えない。それから目立つほど華奢で細く長い手足。

確かに、類を見ないほど全てが際立って美しかった。けれど、そういう目で見ると、エアリア・ロキメン、彼を褒めそやし心酔し、夢見るような目つきで見やる女たちのように、その美を単純に愛でることは不可能だった。

しかし、彼の立ち居振る舞いは、顕かに武人のそれだった。憮然を絵に描いたような苦虫をかみつぶしていたウィルディーンを補うかのように、穏やかな微笑みを振りまいてはいたが、彼は同門で武術の基礎を学んだ者だけに分かる、油断のない目配り、張りつめている空気を発散させていた。自分ほどに年季が入れば確実に隠せるはずの緊張感を彼の若さは覆いきれては居なかったが、護るべきものと共に敵地に来たと、あの青年が見做していることが悲しかった。護るべき対象の父親へ挨拶に訪れる、たったそれだけのことに、あれほど緊張しているということが悲しすぎた。イルデイスは自分がそのような思いを抱いていたということを、すっかり忘れてしまっただろうか。

あとで人をつかって調べて愕然とした。あの時にクラウディオ・エマヌエルは初めて知ったのだった。マヴァル王の刺客が、幾度となくウィルディーンを狙っていること、そして、イルデイスがそれを特に阻止しようとしていない事。

イルデイスはかつて親友であったダンの息子が、他ならぬ自分の息子を護るために、子どもといって構わないほど若くありながら、非力な者でも仕える『針』だけを武器に、命のやりとりをしているという事実は何故、心が痛まないのだろうか。

イルデイスの心が分からない。最早、自分がかつて知っていたイ

ルデイスではないという思いは拭いがたくある。が、それでも、クラウディオ・エマヌエルにも、イルデイスと道を分かつていく未来は、既に描く事ができない。彼の忠誠というものは、イルデイスに全て注ぎ込まれている。

だから、今更、エアリア・ロキメンのことで心に何か刺されるような痛みを感じたとしても、イルデイスに言うべきことは無いのかもしれない。

それでも、エアリア・ロキメンが、親友の妹を凌辱して殺害したという糾弾は納得できない。彼に女をそこまでして抱こうとする衝動が存在するはずが無いし、万一そんな衝動があったとしても、嫌がる女にそうすることは出来はしないだろう。

その冤罪を信じて、娘を失った平民に額を擦りつけて土下座で謝罪していたダンも憐れだった。

あれほどの青年を息子に持っているのに、それを信じる事ができないダンの不幸に、そしてそんなダンにエアリア青年に罪はないと証明することが出来る筈なのに黙っていた自分に、今の息子から彼を剥ぎ取る事の危険を承知しつつ、国外追放を言い渡したイルデイスの非情に……、クラウディオ・エマヌエルは打ちのめされていた。

ダンを見てもらえない。

詭弁に等しい言い訳だ。自分が見たくないのは、息子の罪を信じただからこそ、相手が平民であつても地面に額を擦りつける事ができる潔いダンではなく、エアリア青年がおそらく不能だと知りながら、彼の名誉と、ラジェイラの誓いに阻まれて、それを口にする事ができない自分に対する失望と、親愛なる、己が生涯を捧げた相手イルデイスの非情という事実なのだ。

「あれは……」

イルデイスが庭を見つめたまま口を開いた。その見つめる先を見るとは無しに眺めながら、クラウディオ・エマヌエルは次の言葉を待った。

「サーシアの事になると……見境みさかいがない……。赦してやってくれ……」

そのイルデイスの一言に、クラウディオ・エマヌエルは凍りつきそうになった。

「……イル。貴方は、エアリア・ロキメンを陥れたのが、ローレシアさまだと仰るおつもりですか？……」

「他に、アレからエアリア・ロキメンを奪って得をする人間がいるとでも言うのか？」

クラウディオ・エマヌエルは些か意地悪そうに言った。

「国境の長城を、あと数間南にさげようと野望を抱きながら、自ら宣戦布告をして侵掠を仕掛ける事を良しとしない、卑怯などこの国の国王などが、考えられますが……」

不愉快そうにイルデイスの眉間のしわが深くなった。

「……エマ。お前、相変わらず辛辣だな。他の奴が同じ事抜かしたら、首が飛ぶぞ」

「いつでも飛ばして下さって結構です。今度の事で、私は……貴方に失望しております」

難しい顔をしていたイルデイスが、仕方なさそうに首を振って眉間のしわを解いた。

「ダンの息子は……良くできた青年だ。もう少し凡庸であれば、あれに疎まれる事もなかっただろうが、下手に聡明過ぎたのが……不幸だったな。同じように賢いあれには、我慢ならなかったのだろう」

「信じられません。あのローレシアさまに限って……」

思わず言ったクラウディオ・エマヌエルに、イルディスは意地悪く微笑んだ。

「あれは、状況をよく分かっている。ここのところ著しい天候不順がなければ、そろそろマヴァルとやりあっても互角でいけるだけの処まで来ていると、私が自惚れていた事をな。……だが、だめだ。この状態でやって勝利がこちらに来るなどと、樂觀できるものでない。まだ……ウィルディーンには、マヴァルとの絆きずなの象徴でいてもらわねばならない」

「……アル・マーシヨさまに望まれることは、ほんとうにそれだけなのです」

冷たすぎる言い方に、少しクラウディオ・エマヌエルは鼻白んだ。「仕方あるまい。あれには……それ以上を望むだけのものがない。サーシアまではいかずとも、もう少し見るところがあれば……違ったのだが……な」

言葉にならない言葉が身内を駆けめぐる。

そのようにあの方を追いつ込んだのは、イル、あなたご自身じゃないか。

誰も期待せず。

誰からも期待されず。

貴方からは在ることだけを望まれ、マヴァルの方からは無くなる事を望まれた。

「あれは……」

今度の『あれ』がローレシアを指すのか、アル・マーシヨを指すのか、クラウディオ・エマヌエルには分からなかった。

「そんなウィルディーンであっても、在るだけで価値があると、分かるだけの器量はある。女にしておくには惜しいだろう？ だから

こそ、単純にウィルディーンを殺そうとするマヴァルに便乗することとはせぬ。ただ、長い時が地位というものに群がる人を集め、肩書は何かのときに強いと、骨身に沁みて知っている。私が、アル・マ―シヨであっただけで、父が急死したとき、強く出られたのだとよく知っている。今、私に何かあれば、あのダンの息子が付いていれば、この国はウィルディーンを戴くことになるだろう」

まさか？

「私も、ウィルディーンがこの国を支配する事が、この国の為にならぬと思わなければ、ダンにあのような無様をさせたくは無かった……」

この方は……。

「あれが産んだ息子だから、デル・ヴィランを国王にしたいと……、思っている訳ではない。あれが愛しいから、あれの非情に目を瞑った訳でもない。私は、一人の人間としてのイルデイスである前に、デル・イサクだ。弟妹を殺した咎で地獄に行く事を、多少の善行で贖えるなどと、自惚れてはおらぬ。今、マヴァルと事を構えれば、国が死ぬ。そして、何かのときに、ウィルディーンが至尊の地位に在っても、同じ事。イサクの為にならぬ。であればあれを生かさぬように、殺さぬように生殺しにする程度の罪を重ねる事に……躊躇はせぬ」

その言葉に圧倒され、クラウディオ・エマヌエルは呆然となった。それに追い打ちをかけるように、イルデイスが続けた。

「私は、お前とダンとの日々が……自分に喜びをくれたことを……忘れはせぬ。無骨で飾る事がないヤツが、他の連中は単なる看板だ



と知っている『学びの門の中での平等』を真に受けて、ぶつかつてきてくれた。先輩風をふかせて偉そうにしてくれたのは、お前たちだけだった。だから……感謝している。だから……イル、お前が『影』の誓いを私にくれたときの、いかなる秘密もお前には抱かぬと言っ誓いを破つて、私の一存で……ダンの息子を……亡き者にしよう……」

安楽椅子の肘掛けに乗せられたイルデイスの拳が、数回ワナワナと震えた。

俯き加減の表情に、苦悩は浮かんでいなかった。ただ、握り拳だけが、イルデイスの心を語っていた。ダンの息子を亡き者にしようとした。つまり、あの時の、あの少年が死にかけたときのあの刺客は、皇太子と誤って彼を刺したのではなく、彼は盾になったから刺されたのではなく、まさに彼自身を狙った刃を受けたのだと。そしてその刃を突き出したのは、マヴァル王が差し向けた刺客でも何でもなく、この王その人だったというのか。何という、王というのは何という酷な存在であるのだろうか。

「だが……、ダンの息子は……天晴あせいれだったよ。自らも、ウィルデインも、今まで守り抜いてきた。そして、反撃しようとしていた。人の輪という最強の守りを作り上げようと企んでいたのだよ。敵が私だと知っている、何よりの証拠だ。おおっぴらに反旗を翻せないなら、人を防壁にして対抗しようとしていた。母上の薫陶は、見事だ。学校の『剣の会』に連なる子どもたちの顔触れを知っているだろう？ 見事に……、我が国を動かしている連中の子どもだ」

奇妙な誇らしさのようなものが、矛盾する事にイルデイスの頬に浮かんでいた。

「ダンの息子を……殺したくなかった。私はいつも……、殺したくないと思ひながら、殺せと命じていた……」

クラウドディオ・エマヌエルがソファから跳ね上がり、床に平伏した。この方に人生を捧げて、悔いはない。正しい、神の前で胸を張れる生き方ではないかもしれないが、一人の男として……悔いはない。

「あれの浅慮は……、私には渡りに舟だった。ダンの息子を殺さずに、アル・マーショから剥ぎ取れる……」

クラウドディオ・エマヌエルは平伏したまま動く事ができなくなっていました。熱い何かが目頭の奥から何かを突き上げてこようとするので、それを抑えるのに苦労した。

エアリア・ロキメンに死をと叫んでいたカレン・マニ。彼女の言葉をかかなりの確率で聞くイルデイスには珍しく、一人の町娘の死でウィルディーンの『影』を務める者を死罪には出来ないと退けていたことに、初めて納得がいった。ダンの息子を誰よりも守りたかったのだ。イルデイスは……決して、かつて友と呼んだ男への想いを非情に捨て去った訳ではなかったのだ。

「それに……。アル・マーショに、ダンの息子は勿体ない。あれほどに人を惹き付けることが出来る男だ。『影』の役から解放される事で……、きっと、もう少しマシな人生を歩むだろう。己が人生さえ私有することを禁じられている『影』などという役目から解放されれば、愛する女性を見つけ伴侶にして、子をなすことも出来るだろう」

あの青年は……それは、できないのです。人を愛する事は出来たとしても、子を生し、未来に繋ぐ事は永遠に出来ない。貴方の母上が……セレン殿が……、エアリア・ロキメンをと望んだときに、

その全ては奪われてしまっているのです。イル。貴方はご存じない。  
あの青年には……、そういう未来はないのです。

平伏したままクラウディオ・エマヌエルは心の中で叫んでいた。  
自分の目頭を突き上げる何かが、誰のために暴れているのか、良く  
分からないまま、叫び続けていた。

## 第十二章 セレン宮の邂逅

エアリア・ロキメン。自分よりたった二歳年長なだけの少年。彼がやって来る前の生活は灰色と言うより色彩そのものが無かったような記憶が、ウィルデーンにはある。毎日が変化もなく、同じことの繰り返しとして繰り返され続けるだけだった。起こされて、着替えさせられて、出された食事をただ食べ、形ばかりの教師による勉強の時間と、午睡。そして、また食べて、出すものは出して眠る。

周りにいた者たちは、ただ毎日の日課に遺漏が無いよう気配りをするが、それだけだった。癩癧も我が儘も、誰もがそれを我慢ならないと感じて居ただろうにもかかわらず、<sup>ただ</sup>糺そうとも矯めようともしなかった。

それが、自分の側近として祖母の居室で引き合わされたエアリアはまるで違っていた。最初の記憶はコップの水をかけたら、中庭の池に引きずり込まれたという恐怖で始まる。お側付きとしてこれらの生涯を共に過ごすのだと祖母から言われたときも、どういう意味かわかっていなかったと思う。あの頃の自分は、ただ癩癧を起こすために爆発するのが常で、食事を運んでくる者に皿の中身を浴びせかけるのがお気に入りの遊びだった。皆が右往左往することを発見して、楽しかったのだ。だから気さえ向けば毎食でもそうしていた。

聞いていても聞いてなくても、広げたまらない本の中身をクドクド講釈する教師も気に入らなかったし、汚しても壊しても、さつと片づけられて何もなかった事になるのにも辟易していた。けれど、直接人間になにかやらかすと、少なくともやられた本人だけは面白いほどに表情を変える。ただ、それが面白かった。遊びの種類として、なんとも貧相だったが、それほどに退屈な毎日が常にあった。

年が同じ頃の男の子。それは珍しいものだったが、他の全てと一緒だと思っていた。

だから、自分が昼間過ごすことになっている部屋に戻ったとき、当然のようについてきて、他の連中みたいに時間がきても居なくなる気配がない、それも太々しい面構えの少年に、たまたま手元にあったコップの水をかけてみたのだ。それで彼がどう反応するか気になっただけだ。それが皿だったら皿の中身をあげたろうし、燭台だったら服に火をつけてみたかもしれない。

何事もなかったかのように一旦どこかに消えてから着替えてくるのか、それとも単純に怒るのか……。想像できたのはその辺りまでだ。

「デインさまには、私が好きなようにしていいと、奥さまに言われています」

そう言っただけで彼は、剣呑な笑顔になった。それから徐ろに自分の手首を掴んで、窓から中庭に歩きだしたときも、余りにもその行動が思いがけないもので、ただ、いつもと勝手が違う成り行きに吞まれていた。あのあと、あんなことをされるとは思いもせずに。

皇太子宫は、この国の王の正妃である母とかいう存在が住んでいるらしい（会ったことは無い）ロイゼ宮と向かい合って、バラ園の風景を分け合っている形になっている。作られた人工の庭園風景の一つの要素としてある小川と池。エアリアはその池に自分の手首を掴んだまま入って行ったのだ。水の冷たさに抵抗しようとした自分が頓着せず、エアリアはそのまま自分を引きずり込んだ。鼻から水が入り、水草の味がする水で喉が満たされた。苦しさで冷たさが単純に怖かった。怖いという感情を知ったのもその時が初めてだった

かもしれない。

「いきなり、水をかけられて……嬉しい者はいないと、わかっていただけました？」

平然と年に似合わない諭すような口調で言ったエアリアの笑顔の印象は強烈だった。

笑顔を投げかけられるという事は、それ以前の生活には無かった。苦しさと恐怖と、笑顔の組み合わせ。それは新鮮で、抗しがたく魅入られてしまったのだ。だから、傍からどう見えようと、事実は自分がただ生まれ持った血筋のみで彼の人生を支配しているだけなのだとしても、あの時から自分にとっての主はエアリアなのだ。そう。エアリアが自分より強い存在なのだと、本能が認めてしまったから、強いオスに敬意を払うのは当然の成り行きだった。

今まで誰も助けてくれなかったのと同じように、誰もこの少年から自分を守ってはくれないということも、水に引きずり込まれた自分を誰も助けてはくれず、そうしたエアリアを誰も咎めなかった事が教えていた。

自分は彼の人生の暴君であると思い知らされることになったあの日まで、いや、多分今でも、自分のなかで鮮やかに色彩を持っていたのはエアリアだけだった。

思えば最初から、彼は自分のことをディーンと短くつめて呼んでいた。そして今に至るまで、イサクではごくあたりまえに見受けられる、親しみを込めたその呼び方で自分を呼ぶのは、未だに祖母であるタチアナと彼しかない。

それに引き替え、彼をエアと呼ぶ者は数えきれないほどに居た。自分には彼しかないのに、彼を独占できはしないというのは、なかなか受け入れがたい事だった。

エア      エアリア・ロキメンが罪を犯したと断罪された。そして問答無用の勢いで父の裁断がくだり、国外追放という命を受けた。余りにも突然の出来事だった。

あの日。エアの血に自分が染まったあの日から、距離を置こうとしていたのは自分だ。彼には自分とかかわらない人生の方が相応しい。その思いは今も変わらない。それでも、彼の姿を遠くから窺い見ることもできないという事は、なんという喪失感だろう。

自分の身一つ自由にできない鬱屈から、傍迷惑な不機嫌が常態の自分だが、それでも鮮やかに光彩を放ちながら人の輪の中心にいるエアを見ることは、自分にとってある意味の救いだった事を思い知らされた。

結局今に至るまで、自分の目に映る景色の中では、彼しか色を持つていないのだ。距離を置こうとしても、自ずと視界に存在するのと、見る事が永遠にできないというのは、全く違う。喪失は耐えがたいものだった。

彼という存在は自分の中で余りにも大きすぎるのは分かっていたが、ここまでだったとは驚く。辛すぎる。

ウィルデーンは、この数日、癩癩を爆発させることすら忘れるほど、何もかもに絶望していた。

周りにとっては平和な日々だったろう。気難しく愚かな貴人に振り回されずに済んでいるのだから。タチアナの使者が、大切な用件があるので必ず出向いてくるように言ってきたのにも、いつものように不平を訴える気力さえ無く、素直に諾と応えた自分が居た。

もう、何もかもどうでもいい。次にマヴァルの祖父からの刺客が

やってきたら、殺されてやるのが一番、世のためになるという気さえする。国内に存在する全ての人は、自分などより兄サーシアがアル・マーシヨであることを望んでいる。自分に国王になるほどの器量も、気概も無いことは己が誰より知っている。

あの日以前にそう望んでいたように、本当はエアさえ側に在ってくれば何も要らないのだ。自分が彼の呪いなのだと思い知らされることさえなければ、何時だって自分はエアを見ていたかったのだ。

あの日。

「デーン。静かに」

エアリアが厳しい口調でそう言った。皇太子宮の寝室では、体に不必要なほど大きな自分専用の寝台と、従者であるエアが使すべき簡易寝台が在ったが、子ども同士のささやかな秘密として、二人はいつも大きな方に一緒にめぐり込んでいた。朝、身支度を手伝う女たちのノックが聞こえるまで、エアリアの温もりを存分に味わっていい時間だった。大人たちの目があるところでは、エアリアはいつもこんな時間など持ってもいないというようにそよそしい距離を保つのが常だった。

「……エア？」

「いいですか。デーン。何があっても、絶対に声を立ててはなりませんよ」

大人びた口調でそう言ったエアリアは、自分を寝台の下に押し込むようにしてから、大丈夫というように手で自分の肩を数回叩いてから、自分だけ寝台に戻った。大きな寝台に押しつぶされるようで息苦しく、不安のためか、自分の心臓の鼓動だけがやけに耳障りに響いた。



寝台の足から、大人の大きな足が行き来するのが窺えた。夜の子供部屋に大人が立ち入ることは普通ない。誰だろう。

ただならぬ緊迫した様子。エアリアの命令は、自分にとって絶対だったから、ウィルディーンは何が起きているのか知りたい気持ちを押し殺して、息を詰めていた。異国の言葉が聞こえる。たしかにエアの声なのに、何を言っているのかさっぱり分らない。そして聞いたことすらない恐ろしい獣が吼えるようなうめき声。風の音のようできて、聞き慣れない何か。静けさが再びやってきて、エアの言葉による呪縛から漸く逃れたのは、どれほど経ってからだったろう。

寝台の下からそろそろと這い出て、寝台によじ登って、その悲惨な光景が目飛び込んできた。刹那、喉から悲鳴が溢れだすことを止めることができなかった。

自分たちがいつも寝ていたそこは、血の海だった。灰色のような赤茶のような、闇に融ける色の服を着た男が、喉から短剣を生やして仰向けに寝ていた。そこでは赤黒い液体が風のような音と共に噴き出るのを止めていなかった。そして、大好きなエアは、その隣に添い寝するように横たわったまま、腹の辺りを中途半端な長さの剣で刺し貫かれていた。彼の腹から溢れ出た大量の血は、事切れた見掛けぬ大人が溢れさせているそれと混じりあって、どれほどの量がエアリアが流した血なのかまるで区別がつかなかった。そして、狂ったように叫び声を立てるしかできなかった不甲斐ない自分。

大好きなエアの血も、今の自分よりずっと幼かった少年が刺し違えた、記憶に残る限りにおいて最初の刺客の血も、同じ色なのが不思議だった。どんな人間 敵でも、味方でも でも、同じ色の血が流れ、同じように温かい。途轍もなく不思議だった。

エアが生死の境をずっと彷徨っていたとき、恐ろしい一つの実事を知った。

それは、自分などと違い、エアには彼を愛して止まない家族がいることだった。本当に彼の命は消え去る寸前まで行ってしまうたのだろう。ウィルディーンはエアから魂が逃げていかないように祈りながらずっと手を握っていた。エアを挟んで反対側に、彼とそっくりの女性がいつの間にか居て、そのもう一つの手を自分と同じように握っていたのだ。

女性は小柄で華奢なものだという先入観を打ち砕くように大きく遅く太い腕をもちながら、その瞳はあくまで柔和で優しくかった。

影として召し上げられた少年の母親が呼ばれたということは、あの時の怪我は間違いなく深刻なものだったということだ。

あの女性ひとが、エアリアを愛している母親だということは、何故か母親という存在を知らない自分にも、すぐに分かった。そして、彼がその母親から引き剥がされて、自分と起居を共にしているということが、どういうことを意味するのか位は、あの時の自分でも分かったのだ。その実事は衝撃的ですからあり、どこまでも後ろめたく、どこまでも苦しかった。その自分のために死にかけている息子の手を握りながらも、あの女性は自分を責めるどころか、優しい眼差しで見つめていた。そしてほかの大人の女性から、一度も受けたことがない、紛れもない贈り物として……抱きしめられた。温かく、強く。

可愛い子。アンヘラさまは何故あなたを……。

母だという人を、皆はロイゼ殿と呼んでいる。それなのに、あの日、エアリアの母である人が、自分の母を名前で呼んだことに、ど

んな疑問も抱かなかった。この目の節穴加減に自嘲さえおきる。長じて人伝てに薄々知ったことは、エアリアの母は己の母である王妃が輿入れしてくる前に、その付き人だったということだけだ。幼い日に一度きり会っただけの女性なのに、その印象は忘れがたくある。エアリアに似ているからだけでなく、あの憂いを含んで尚優しかった瞳が忘れられないのだ。

そしてもう一つ、自分に楔を打ち込んだ言葉がある。あの時、燃えるように熱かったエアリアの手を握って、離そうとしなかった自分に、長身の祖母のお側付きであり、エアリアの師範であるというマグダレーネが、誰に向かってともなく、ぼつりと言った。

このままいけないことになっても、お守りできたことを、この子は誇るでしょう。

何故自分の命を差し出してまで、彼は自分を守ってくれたのだろう。人の命を絶つという子どもには重すぎる罪まで犯して。それはエアリアが自分を兄弟のようなものとして大切に思ってくれているからではなく、お側付きの当然の責務として、そうしているに過ぎないのではないか。その現実を直視することは耐えきれないと思えるほど辛かった。

もし、自分がエアリアにこんなにも依存していなければ、その与えられていた仕事を当然の事としてこなしたエアリアが負担では無かっただろう。けれど、自分にとってのエアは既に、お側付きとして召し上げられた単なる従者などではない。宝玉に等しい、たった一人の家族だった。そのエアの命を自分の為に軽んじることがどうしてできるだろう。全て自分が居てしまうから悪いのだ。自分という存在が堪らなく厭わ<sup>いと</sup>しかった。

エアに嫌われよう。

幼い日の自分はそう決心した。自分は彼が好きなのだ。だから、せめて彼が自分を嫌えば、次に同じような事態が起こった時、彼は自分を見捨てるだろう。それが一番いい。

エアリアは自分の浅い考えなど見透かしたように、変わらなかつた。いつも微笑んで、つまらないことを論<sup>あげ</sup>つては癩癪玉を破裂させる自分を、いつも大切に扱ってくれた。何故、こんなちっぽけで、取るに足らない、こんな己を捨てないのだろうか。

捨てられたら、恨んでしまったかもしれない。けれど、エアリアはいつも辛抱強く傍にいてくれ、だからこそ、彼から危険を遠ざけるためには『嫌われなければならない』という強迫観念は、消えることなくいつもあった。

堂々巡りだ。

そのエアリアは王命を諾として受け入れ、国境を越えたという。剣の会の重だつた面々が、真玉関まで送つたらしい。学校内でほっそりと華奢なエアといつもつるんでいた、頑丈な体躯をしていたカイ・ユリウスの断首も、滞り無く行われたそうだ。

何かの祭りやお祝いで特赦があれば、国外追放の命も解け、エアがイサクに帰ってくることも有るかもしれないが、そうでなければ、二度と会えないのだ。自分の命は常に狙われている。エアが自分を助けるために奪った命も、あの一っだけではないだろう。何故、自分はこんなにも……居るだけで、周りの負担なのだろう。

ウィルディーン・アル・マーシヨ。この国の皇太子でありながら、その一切が彼の人生を益することがない不遇の少年を主とすることに、最初から疑問や不満が無かった訳ではない。家族　特に母親と引き離されることに憤りもあった。

白い荒野で泣いていた、儚く美しい人を泣かせないために『なんでもする』と安請け合いました自分に何度後悔しただろうか。自分はどうも情に流されやすい面がある。どんなに益にならないと分かっているても、自分が何かを呑み込むことで誰かの役にたてるなら、なんでもすると直ぐに口走ってしまう悪癖が、どうやら自分にはあるらしい。

問題山積な人だという情報のもとに厳しいマグダレーネ師の薫陶を受け、その泣きそうなほど厳しい教えを何とかして呑み込み続けようとしたのも、一重にあの唇の柔らかさに誓ってしまったからだ。

だからこそ、主となる少年が普通に育ってきていない理由も知っていたし、何をおいてもその人を守るという誓いを立てた以上、それを反故にすることは性分上できないことだった。

それでも、表情がちぐはぐで（泣くべきところで笑っているような）、覇気のない彼を初めて見たときの失望は……、言い得ないほど強かった。こんなだらしのない顔の持ち主の命を自分よりも生涯かけて大切にしていかなければならないという理不尽に、絶望しそうになった。

少年が何の前触れも無く、いきなり初対面でコップの水をかけてきた。腹が立って、子どもの裁量に任せるとした大人の目がないこ

とを良いことに、庭の池に引きずり込んだ。今までの鬱屈の全てが、瞬時に沸騰したのだ。無様に水の中でもがく豚。泣いて暴れて、恐怖に引き攣った顔が……、あの時、支配する快感を自分にもたらしただ。

面白いほどに、彼は自分に懐いた。それはそうだろう。今まで彼の前には、彼をモノとして丁寧に扱う人間しか居なかったのだ。今までの厳しい訓練の中で、知らずに溜めていた澱のような感情が、残酷な行動になって滲みだすのを、自分の闇が喜んで堪能していた。大人の目があるところでは、ラジェイラの教えを体現する、よくできた従者を演じ、人目がないときに陰険な仕打ちを加える。

特に水練は楽しい遊びだった。夏に冷たい水の中に入るのは、もとと性に合っていた。最初のあれが余程堪えたのか、ウィルディーンは水に入れようとすると恐怖に顔をひきつらせて後退るのだ。それを水に突き落とす。深い方に追い立てる。溺れようがない浅さにも関わらず大袈裟に怯える。もがいて、暴れる。全く笑わせてくれるガキだった。

まあ、やりすぎたのか、いつの間にか泳げるようになってしまった、それほど長い期間は遊べ無かったが。

お仕置きと称して、物差しで、利き手でない掌を叩くのもよくやった。左手の掌など痛んでも日常生活になにも差し障りないし、着替えさせたり清めさせたりするお役の者たちにも、決して気付かれないところにある。問題を上手く解けなかったといつては叩き、何をやるのも上手くないといつては叩き、気に入らないというだけでそうしたことあったような気がする。

だけど、ウィルディーンは、全くのバカで……。本当に、愚かで、救いようがなく何も見えていなかった。自分が、憂さ晴らしの捌け口として不当な扱いを受けているということに、全く気付いて居なかった。

一つ一つは些細だけれど、陰湿な虐めでしかない自分の行為にすら、バカそのものの笑顔で後をついてくる。邪険にしても、不機嫌をぶつけても、いつも極上の笑顔でついてくる。

ごめんなさい。今度は上手くやれるようがんばるから。

水から這い上がって、気管に水でも入ったのか苦しそうに咳き込みながら、水練が上手くならない自分に付き合ってくれて有難うと微笑む。これだけ露骨な悪意に気付かないなんて、普通あり得ないちゃんと愛されたことがないガキは、悪意にさえ鈍過ぎる。

あいつがちゃんと息していれば、大人は何も文句は言わない。奥さまは何故、こんなバカのために、泣くのだらう。なんで、こいつはこんなに愚かなのだらう。

ごめんなさい。もっと頑張るから……。

力任せに叩いたのだ。痛かっただろうに。掌を握りしめて、右手で手首を掴んで堪えながら笑うのは何故だ？

あの頃、加虐者であることを自覚していた自分に、あの全てを任せきったウィルディーン的笑顔は忌ま忌ましかった。我慢ならないほど嫌だった。媚びてくる笑顔。付きまとってくる足音。何もかもが嫌だった筈だ。こいつの所為で……。

いつの間にか水に浮かべるようになっていたウィルディーンは、夏になると水に暇さえあれば入ろうと持ちかけてきた。自分も何故か水遊びが一番好きだったから、昼寝を強制される昼下がりに、よ

く窓から抜け出してロイゼ宮の人工の流れに飛び込んだ。服を濡らしていると昼寝をサボったのがバレるので、もちろん素っ裸になっただ。

足首を掴んで水に引き込もうとする遊びを、ディーンから仕掛けられたときの驚き。潜ることも泳ぐことも、易々とこなすようになっていた。

勉学の教師の講義と一緒に聞くと、エアリアがどちらかというと苦手な算術の問題を楽しそうに解いては、偉そうに自分に見せびらかしてくる。苦戦しているとさっと手が伸びて解き方を見せることで教えてくれようとする。人との関わりが薄く、言葉に未熟な故に、そういう形でしか説明できなかったのだらう。ウィルディーンの兄のサーシャが、数学府なんぞという理解しがたい趣味の集まりに参加しているのと同じで、この血筋は理論的思考というものに適性があるらしい。

あの頃のエアリアは夜が嫌いだった。彼は家に居たころはずっと母の寝台と一緒に寝ていたのだ。イサク貴族の流儀では決して無いが、彼の母はもともとがマヴァルに併呑された馬を扱う遊牧民族の出だ。彼女には、自らの腹を痛めた我が子を抱いて眠れないなど、あり得ない選択だったのだらう。

馬車に乗せられて家から連れ出されてずっと、エアリアは枕を抱きしめて眠っていた。寂しかった。独り寝は辛かった。母は今は小さかった弟に添い寝しているだらう。そうすると今では「嫉妬」という名前が付いていることを知っている、あの腸が焼けるはらわたような居たたまれない感覚がやってくる。だから夜は大嫌いだった。

それでも、雷が酷かったある夜、寝台で啜り泣いていたウィルディーンを慰めるために寝台に忍び込んで抱きしめてやったのは、ほんの出来心だった。

ウィルディーンは枕よりあったかかった。抱きしめ返してくる手



がなんとも言えない感覚だった。枕は絶対に抱き返してくれない。

こいつのことは大嫌いだけど……、あつたかいのは……いいな。

嫌いな筈だった。居なくなればいいのと思ったことも一度や二度ではなかった。あの夜。マヴアルからのお客さんを、丁寧にあの世にお引き取りいただいたあの時。不覚にも死にかけたあの時。

なんで、自分は命をかけてしまったのだろうか。それがずっと長いこと不思議だった。思うより先に体が動いた。ウィルディーンを安全なところに隠さねばならない。その想いが沸いた時、一瞬の迷いさえなかった。ただ、自分のすべき事は、自分だけが苛めていい存在を守る。それだけだった。

不思議なものだ。ウィルディーンを考えている事など手にとるようにわかる。生還した後、彼は自分にとってさえ扱い難い人間になっていた。最初の頃の無表情ではなく、我が儘を通す事で深く傷ついているような苦渋に満ちた表情で理不尽を重ねていた。

皆はあきれていたが、エアリアには分かっていた。自分が情けない事に死にかけた。その時に自分が彼を守る事を役目として言いつかっていることを知ってしまった。だから、自分が次に同じ目にあつたとき、自分が見捨てやすくするように……ということだろう。

バカなガキは相変わらずだ。心と裏腹で頑なな態度。良く考えれば、十年近くをずっとウィルディーンと一緒に居たのだ。何を考えでそうしているかなんて、自分には丸分かりだ。その場に及んで自分があつさり見捨てたら、きつと恨んでくるような性分の癖に、妙に他者を益するような希みを持つからやることがちぐはぐになる。

まったく理不尽なことだが、学校の寮に入るまで、文字通り起居を共にしていたのだ。いつも傍らに居て、二人だけの時間を重ね、夜には肌を添わせて眠っていたのだ。

ウィルディーンにとって、自分が唯一無二のかけがえのない存在だというのなら、自分にとっても、いつの間にかそう言う存在にまで育ってしまったって何の不自然もない。そうでも考えなければ、あの時、全く悩まなかったことの説明がつかない。

刺客との間に自分を差し出して、盾になることにまったく躊躇いも迷いもなかった。信じ難い事だが、自分もウィルディーンを愛しているということなのだろうか……。エアリアが彼にとって忌まわしいと感じるその考えを受け入れるまでには、随分時間がかかった。

実際にやってきた死神との間に立てる以上は、間違はなく好きなのだというたった一つの事実。それに気付いてしまってから、自分に嫌われようと必死の不機嫌を演じて、周囲から疎まれる一方のウィルディーンがますます愛しくなっていた。不思議な感情だった。

少し後ろに控えて膝を折り、不機嫌の嵐が静まるのを待つ間、癪かんが強そうな眉毛の引き攣つりが見えなくても、どんな顔をしているか分かる。その不細工な表情の下で、無垢な少年がべそをかいている。見捨てられる訳がない。

\* \* \*

キュツキュツと小気味よい絹鳴りの音は、聞き慣れたものだ。あの光沢豊かで目が詰まっている布は、冬暖かく夏涼しく、その美麗さにおいても比類なく、水に弱い欠点があつてさえ上流階級の女は争つて身に付けるものだ。勿論、男にも好む向きもあるがあの音は幾重にも重ねて膨らませた女の衣装から生み出される音だ。

大切な用件とは笑止。

ウィルディーン・アル・マーシヨは、沸騰するほどの怒りを感じた。エアリアという箍<sup>たが</sup>がはずれ、ますます制御不能になる前に、さつさと、女をあてがつて、この喪失感に折り合いを付けさせようとの企みか。

エアリアの不在で空いたこの穴が、女に欲望をねじこむ位で何とかなると言つのだらうか。それほどに自分は見くびられているのか。

けれど……。扱い辛い癩癧<sup>らいげん</sup>で有名な、皇太子を籠絡<sup>ろうらく</sup>せよと言われて頷くような女というのも、ある意味大したものだ。国民から慕われ、重臣たちから恐れと尊敬を勝ち取り、絶対の権力の象徴である父が、兄を正当なる皇太子にしたいと思つてゐることは、誰の目にも明白である。今日か明日かに父が事故だの流行り病だので死なない限り、母方の祖父であるマヴァル王が健在である間のみ、許されている地位だ。

変わった女だ。

顔くらい拝んでみてもいい。

衣擦<sup>きぬす</sup>れの音が静まり、部屋に入ってきた女が静かに跪<sup>ひざまず</sup>くのが分か

った。目の端で見やると、エアリアと同じような闇色の豊かな髪が見えた。全く、結局お婆さまは何も分かっていない。溜息が出そうになる。しかし、それにしても変わった女だ。膝の折り方がまるで男のそれだ。

女が顔を上げる。その顔のなんとエアリアに似ていることか……。どこから見つけてきたのか、息をのむほどに整っていて、いや、整いすぎていて冷たささえ感じさせるほどの彼の容貌と瓜二つだ。たしかエアリアには妹が居るといつていた。それか？ いや、まさか彼の妹はキリアンより年少だった筈だ。このように臍<sup>へうた</sup>長けた女であるはずが無い。

まじまじと顔に見入っている前で、ほっそりした腕を上げ、女はいきなり髪を解き始めた。忌ま忌ましそうな手つきで髪を留めているピンを外して行く。バラバラと驚くほど多くのピンと彩りを添えていた飾り玉が零れ散らばる。多すぎて上手く外しきれないのだろう、途中で荒つぽくかき乱した所為で、滑稽なまでに歪んでボサボサになる。完全に解くのを諦めたのか、女は照れ臭そうに微笑んで口を開いた。聞き慣れた声でした。

「……ディーン。見苦しい姿でのお目汚し、何卒、ご容赦ください」  
まさか。

この柔肌<sup>やわはだ</sup>の滑らかな艶。丸みを帯びた肩の線。どれひとつとっても自分が知っているエアリアとは似ても似つかないが、顔と声は彼のものだ。彼なのか？ それともエアが実は女だったとでもいうのだろうか。あり得ない。自分はずっと奴と居た。彼の裸なんか見飽きるほど知っている。女であった筈がない。いったい、何をどうやらかしたら、ここまで女を装えるのだろうか。

彼は絶対者である父の命に従って国を出たはずだ。ここに居るは

ずがない。ここに、居るはずが……。

「ディーン」

黙りこくったままの自分にエアリアが断固としたいいつもの口調で続ける。格好が格好だけに、全然迫力はないが、この喋り方を、二人だけのときには従者から従うべき目上へと豹変するエアリアの口調を、どんな女が真似できるというのだ。

「……エ……ア？」

声をなんとか絞り出す。こいつは……こいつは、いったい何ものののだ？ 足が勝手に歩きだす。この声は自分の判断力を麻痺させる。女でしかないのに、エアリアだと魂が分かってしまっている。永遠の喪失だと思っていた彼という存在を感じて、魂が勝手に歓喜して、勝手に揺さぶられている。足が、止まらない。

ウィルディーンは駆け寄って、その異形の存在を体ごと抱きしめた。女たちが付ける香水の匂い、柔らか過ぎる肩。女を抱いているようで、体の芯が不覚にも熱くなる。自分はエアを抱いたことなんか一度もなかった。学校の寮に入ってからはずいぞ縁がなくなったが、寂しさに嚙り泣きが止まらない夜、抱いて眠ってくれたのはいつも彼だった。なぜ、こんな……。女みたい……。女みたい……。女みたい……。

エアリアは苦勞してウィルディーンの腕を解いた。こいつに抱きしめられるのは、順番が違う。こいつを苛めていいのは自分だけだ。腕を無理に解かれて、一瞬泣きそうになった顔のウィルディーンを、今度はエアリアが抱きしめた。学校という空間に住いを移してから

数年、抱きしめることなど絶えて無かった少年の体は、既に男の氣配が濃くなつてきて遅しさが滲んでいる。

エアリアは苦く思う。自分もこんな風に大人の男へと当然のように続いている道があった。自分たちの命を繋いできた小技に執着して自ら捨てたものへの大きさが、今更ながらに自分を焦がす。それでも、この存在から抱きしめられるのだけは不本意だ。

「デイン」

もう一度だけ口に出して呼ぶ。この数年間、ずっとできなかった一つのこと。ずっとしたかった一つのこと。幼いころから寄り添ってきた一つの存在と、隔たっていた時間の長さがそれで埋まるとは思えなかったけれど、それでも心が喜んでいた。再び愛していたものを抱けるという至福感は酩酊を感じるほどに心地よかった。

## 終章 孤舟流れる

親しくあることを頑なに拒否していた数年間。その間に、自分はいつの間にもこの人よりも大きくなってしまったのだろう。いつも、打ち解けることが無かった所為で、側に普通にあることを許さずにした所為で、彼はここのところ、自分の側にある時はいつも膝をついて居た。だから、気付かなかったのだろうか。エアリアはいつもでも自分より強く、当然、自分より大きな男だと思っていた。

ウィルディーンは何かとても不思議な心地がしていた。母の住居するロイゼ宮の名に相応しい見事な薔薇園には、鬱陶しいまでの香りが充満していた。この半歩ほど後をついてくる女の形をした者が自分のエアであるとは未だに信じられない。

セレン宮やロイゼ宮といったいわゆる後宮で働く男たちの殆どが宦官であることは当たり前だった。女官たちとは完全に違う空気を纏わせている彼らを、ウィルディーンは男という存在は認識していなかった。生まれながらに男でも女でもないそういう種族として存在しているのだと思っていた。

エアリアが彼らと同じモノになっていたというのは、あまりにも衝撃が強すぎて、まだどのようにも感情が動いて来なかった。なぜそうする必要があったのだろうか。普通の男にとって、あれを切り落とすというのは信じ難い暴挙に決まっている。

ウィルディーンはセレン宮の祖母にいつも心配りされていた所為で、宦官になった男たちを当たり前に目にしてきた。

髭が抜けてつるりとした肌。だいたいがぶよぶよと太って、耳障

りな甲高い声で喋る彼ら。中にはどういう神の悪戯か、祖母に仕えているアルントのように女性としか思えない優雅さを身につけるものがある。一方で、まさに異形としか言えないような不気味な連中も存在する。

アルントを師としたからなのか？ けれどアルントの仕えるべき人は、往時には王妃であつたタチアナだから、男の身で後宮に勤めることを命ぜられたのならば、当然の手続きとして説明がつく。何故だろう。どうしてだろう。あのような形を自ら選ぶことが可能なのだろうか。後悔はしてないのか？

エアはアルントとは立場が違う。仮とは言え、皇太子である自分付きなのだ。しかも自分の側近にさえ選ばれなかつたら軍事を専門にするロキメン家の長子として当然のように軍人として歩いただろう青年なのだ。幾重にも何故がまわりついて来る。酷<sup>むじ</sup>すぎる。いったい何時からだ？ そして、何故自分は気付かなかつたのだ。

\* \* \*

結い上げた髪を解いてさっぱりしたが、流石にここでウィルディーンと共にいるのに女装は解けない。恐らく女官たちは、側近であつたエアリア・ロキメンの不祥事によって深く傷ついた皇太子を慰めるために、皇太后が見繕ってきた、エアリアに面差しが似た、どこぞの女と自分を認識しているだろう。アルント師に呼ばれて、乱れた髪を整えてくれた女は、笑えることに自分が皇太子に速攻でお手付きになったと勘違いしていた節すらある。ウィルディーンと自分がそういう仲になるのは、想像を絶するというより悪趣味に過ぎ



て笑いとばすしかない。それでも、アルントはそういう誤解の方が、自分がエアリア・ロキメンそのものであると発覚するより余程マシと思っているのか、放置するどころか煽っているようですらある。不満の意思表示を視線に込めたところで、全く平然としているのだから、何枚も上手だ。

エアリア・ロキメンがここにはならないという自覚さえなければ、今すぐにでもこの女の皮を剥ぎ取っている。幾重にもなった衣装の重さと、腰を細く見せるために締めつけている拘束具並の下着の息苦しさときたら、拷問に等しい。女という連中が直ぐに気絶する本当の理由がここでよく分かった。

少し前を無言で歩いているウィルディーンは、異形と成り果てた上に、刺繍や宝石が散りばめられた無様な様子の自分に嫌悪でも感じていたのだろうか。黙ったまま言葉どころか溜息すら発しない。

自分としては感動の再会を果たしたという手応えが有っただけに、肩すかしを喰らった気分だ。色々と言りたい事が有った筈なのに、沈黙の支配に抗する術を持たない。

どうしたのだと聞かれたから、言葉を飾らずに応えただろう。何故と聞いてくれば、色々言葉をかき集めて説明くらいはしただろう。幼い身で大人と対等に渡り合うために覚えた手業を、使い続けるための代償としての選択だということを。この激しく変化する体を持て余して些かならず後悔もしているが、「影」にはもともと妻帯も財産の私有も認められていない。戦場で武功をたてたかったり、男らしさを乙女たちにアピールする必要がないのだから、そのうち落ち着ける筈だと。

全てを晒したあとの今なら、異形である事を身が疎<sup>すく</sup>む思いで隠さなくても済む。カイに悟られていたと知ったときの、全身が熱く焦がされるほどの羞恥心と戦う必要を自分は感じていないのだ。なのに、ウィルディーンは言葉を発しない。

次の言葉が無いから、今までどおりの慣性で庭を散策しだしたウィルディーンのをあとを、半ば習慣従って追いかけている。女物の衣装の扱い辛さで、きびきび歩けないのが、なんとも業腹だ。間が開きすぎると、少しの間ウィルディーンは立ち止まる。それにやっと追い付いても、ウィルディーンは、何も喋らずに再び歩きだす。だから、エアリアは仕方なくついていく。

そうやってどれほどの時間が経っただろうか。立ち止まったウィルディーンが、エアリアが追い付いてきても歩きださず、けれど振り向きもせずに問い質した。<sup>ただ</sup>

「誰かに強制されて……か？」

首を振っても見えないだろう。エアリアは言葉を使っしかない。

「いいえ」

本当に『いいえ』なのだろうか。答えながら自身で疑問だった。

「後悔はしてないとしても、言うのか？」

「いいえ」

これは心からの『いいえ』だ。ウィルディーンがついた溜息は、不思議とほっとしたというような気配を滲ませていた。

「私に会って、何が言いたかった？」

これには即答できなかった。こんどはエアリアが沈黙してしまい、随分と長い間が空いた。

「……ただ、お会いしたかったでは、いけませんか？」

言ってみて、エアリアは発した言葉がずっと自分に納まるのを感じた。これが正しい答だった。偽りも何も無い一つの真実だった。その答えで再び長く沈黙したのはウィルディーンだった。

「何故だ？ お前はいつも私には十分すぎた。私に何もかも奪われて、これ以上無いほどに奪われ尽くして、恨まれるなら分かる。父上の理不尽なご裁定への当てつけに、私を殺しに来たというなら、無理もないと納得できる。……なのに、何故だ？ 何故、お前は微笑んで……くれるのだ？ こんな私に……」

ウィルディーンがどっかりと腰を地面に落とすと、丈高い薔薇の木は、深い森の老木のように鬱蒼と聳えて彼を包み込んだ。まるでこのまま地面に融けて無くなってしまいたいと、彼が思っているかのようだ。

「何故でしょうか」

エアリアにしては珍しく素直に言葉が出た。

「私にも分かりません。ただ、このまま陛下の言いなりになって、お会いできないままお別れして……国を出たくはなかった……のです」

不思議なほど気持は凪いでいた。あの日から今まで厳然としてあった垣根のような隔たりが、この時間には雲散していると感じられることが、ただ心地よかった。

再び、気が遠くなるほどの間。沈黙という言葉で呼んで良いほど

に……長い。

「どうするのだ？　これから」

ウィルディーンの中から発せられた言葉は、問い詰めるといいうり、行く末を気づかう優しさに満ちていた。エアリアはそれに穏やかに身を任せた。

「カイの故郷のネルガルを目指そうかと思っています。カイにはエアリア・ロキメンの看板を下げて……国境を越えてもらいました。カイ・ユリウスは断首されましたし、手形もロキメンのものしなければ、普通に街道を旅をして故国に戻るには、ロキメンで通すしか無いでしょう。それに彼は私がここに残ったことを負い目と感じていると思います。王命を遂行することだけに妄執するこの国が、カイを犯罪人として処刑してしまった事実が、どのような形でネルガルに届いているのか……気がかりです。彼の名誉のためにも……親友の妹を惨殺したなどという汚名はそそいでやりたい……」

「……お前たちの罪ではやはり……なかったか」

やはりという言葉がエアリアには嬉しかった。自分がここに来るまでもなく、ウィルディーンが自分を信じてくれていた。信じてもらって当然という気持ちするけれど、しっかりとそう言葉で念押しされるのは悪いものでない。

「恐らく……ディーンにロキメンの後ろ楯がつくことを好ましく思わない何方かが、警戒なさったの、ご仕打ちと思っています。私がおう少ししっかり愚鈍を示しておかなければ、こうなることは予測が付きましたのに、学校というものに酔って……、はしやぎすぎました。本当に……愚かでした」

悄然と落ちたエアリアの肩は、その丸みの所為でいよいよ頼りない女性のような風情になる。ウィルディーンはもう一度妙な疼きを感じてしまい、苦笑するしかない。全く、男というのはやつかいな造りをしている。周囲を欺くためとは言え、似合いすぎているのは困ったものだ。やはり兄と慕っていた男が女装した色香に迷うのは、正直なところ本意というものから程遠い。

なのに、彼には後宮にいる、美しいことが最低条件の女たちよりも、妖艶な魅力を纏わしている。言葉にできない、妖しいまでの何かがある。恐らく、彼の心の有り様を彩っているのが強い男であり、その激しく熱い液体が、儚くも薄いギヤマンの器に無理に押し込められていることで生ずるような、今にも壊れそうな危うさが傍目を否応なく惹き付けるのだ。華やかさしかない女とは隔絶した何かがある。ウィルディーンは己の芯を居心地悪いものにした疼きを抑えつけて、頭を上げた。

「分かった……。エア……。一つだけ命令しておく」

命令という言葉を、かつてウィルディーンがこんな風に露骨に使った事があるだろうか。骨の髄まで染み込んだ、ラジェイラの習性がエアリアの膝を折らせた。深く首を垂れて<sup>しん</sup>拜命の姿勢になる。耳が息づかいさえ聞き漏らさぬように構える。

「死ぬな……。以上だ」

あまりに予測できなかった命令だった。生死は人間の自由になるところではない。誰だって、自ら喜んで死ぬものはいない。一日でも長く命があるように人が望むことと、死なないでいられることは全く別だ。できない命令は受けない。それがラジェイラのやり方だ。仕える主に遂行不可能な命令をされたときは、実現可能なものになるまで意見を言い続けることを教えられている。だから、自分の裁

量でどうにもできないこんなことを「命令」と言われると……正直困る。無茶だ。どこをどう弄ったら、実現可能な命令になるのだろう。エアリアは顔を少し上げ、真意を量るべく座り込んでいる主を見つめた。

ウィルディーンはその視線を受け止めて、意地悪く唇の端に微笑みを乗せた。この無茶を命令と押し通す気で居るらしい。

「その……ご命令は……いつまで？」

明日あたりまでなら、なんとかできる。ラジェイラの習性に、その不可能な命令を料理させたとき、こんな言葉が勝手にでてきた。素直に『できません』と言えば良いものを、可能性を探るという習性は変えられないらしい。

「次に会うとき……まで……でよい」

生きて……この国に戻れと。彼はそう自分に言うのか。

「ご命令……。確かに承りましてございます」

\* \* \*

厳しい顔のマグダレーネ・アルントを久し振りに見た気がする。苦虫を噛みつぶすといったそのままの顔だ。

「愚かな……」

そう言っただけ、何も続く言葉がない。あの人が言いたいことは分かっている。生死は人の子の裁量に委ねられた問題ではまるでない。できないことはできないと言う。それが、ラジェイラで徹底的

に叩き込まれる考え方だ。「死ぬな」という無茶な命令を安請け合  
いした愚かさをそう言ったのか、この状況においても一度イサク  
に戻ってくる気で居る自らの能天気を愚かと言ったのか、エアリア  
には正直分からなかった。師は単に「愚か」と烙印を押したあと、  
随分長いこと黙っている。

「見なさい。ディーナ」

唐突にマグダレーネ・アルントが言った。その視線の先にあるも  
のは、ロイゼ宮の人工のせせらぎに浮かんで流れていく、無数の薔  
薇の花びらだった。

「それぞれが舟のように……見えませんか？」

確かに、軽く掌で滴を受け止めているような花びら一つ一つが、  
小さな舟のように見える。

「あれらは、好んで流れに浮かぶ舟となった訳でない。それぞれが、  
それぞれの関知しえない力によって流れに投げ出され……、流れて  
いくために、流れている」

流れていくために……流れている。

エアリアは師の言葉をただ心の中で反芻した。マグダレーネ・ア  
ルントはエアリアの反応を欲していないのか、言葉を続けた。

「止めようとしても、止まらぬ。流れにあることを知らねば……止  
めようとさえ思わぬでしょう。しかし、止めようと思わなくても止  
まらぬ。流れていくことは……流れに投げ出された以上の必然……」

必然……。

「それぞれが……孤独な……たった一つの存在の舟。それぞれは、

他の舟には決して成れぬ。自らで在り続けるしかない寂しい孤舟に過ぎぬ」

孤舟？

「舟はただ流れる。……ですが、……ご覧なさい。たくさんさまの孤舟が寄せ合って、離れあって、色とりどりに流れていく様は、美しい……。そう思いませんか？」

美しい。ただ流れに任せているだけの頼りない花びらたちも、錦を織りなしたかのように、ただ哀しいまでに美しい。

「朽ちて、流れに沈むまでの泡沫うたかたの彩りであっても……、なんと見事なことでしょうね」

マグダレーネ・アルントは流れに視線を奪われたエアリアを残して、歩き去りながら付け加えた。

「愚かでも……、己の力で変えようがなくても……、自然に朽ちるまでを流れていくのが、人にできる唯一のことかもしれないね……。神の目には……美しいと……映っているのだと……信じて……」

流れる孤舟として……流れていけと。朽ちるまで……、他にある孤舟たちと共に流れの中で、時に寄せ合って、時に離れあって……ひたすらに流れていくために……。

師の言葉を穿って理解するならば、孤舟として流されることは……愚かで無力だからではなく、人という存在の逃れ得ぬ運命だから、流されているのだ。だからこそ、それを俯瞰する神の目には、この流れを見る自分のように、儂くも美しいと映っているのだと……信



じて良いということなのだろうか。

国を出る流れに乗って、主とされた人から離れるのも、また此処に帰って来るのかも、己の意志でどうなるものでもないが、自ら絶つことなく、流れ続ける限り流れていけと、師はそう諭してくれたのだろうか。

エアリアはいつまでも、流れゆく孤舟たちを見つめ続けていた。いつまでも。いつまでも。いつまでも……。

\* \* \*

馬車の車輪が軋む音がずっと続いていた。肩は柔らかい方だったが、それでもきつく後ろ手に縛り上げられているので、最初の頃は肩が外れてしまうのではないかというくらい痛かった。今ではもう痛みを感じる力も鈍くなってきた、ただ痺れを感じるだけになっている。このままずっと縄を弛めてもらえなければ、壊死をおこしてしまうかもしれない。針使いには、ちょっと勘弁してくれな状況だ。足首だけでなく、膝の上も同じように縄で拘束されているので、荒っぽい馬車の揺れを体の動きで宥めることもできない。大きく揺れる度に、自分では予想できない方向からぶつかった衝撃が来るので、気絶しそうだ。まあ、その方が体は楽になるかもしれない。

目を開ける。大きな袋で上半身を完全にくるまれているので、闇はそのままだ。猿轡ゆんべつわを噛まされてるのは、大いに不意だが、この揺れでも舌を噛む心配がないのは有り難いとするべきか。

マグダレーネ師は、流れるままに流れることが大切と旅立つにあたって、<sup>はなむけ</sup>餞の言葉をくれたが、こんな流れにも流されていていいのだろうか？

エアリアは旅支度に当たって、野や山を歩く下々の青年のような服を選んだ。すこしゆとりのある上着と大きくふくらんだズボンの脛と袖を皮紐を編み上げて括り、動きやすくしているものだ。長い髪はそのまま頂<sup>うなじ</sup>で結んだが、長髪の男など掃いて捨てるほどいる。持ち物は大げさでない半弓と腰には切れ味のよい小刀をさした。どこからどう見ても、狩りで身を立って獲物を町に捌きに来る青年であるはずだった。懐には貴重品としての貨幣を少しと、マグダレーネ師から譲り受けた針一式。これがあれば、鍼治療師として日銭を稼ぐことも簡単だ。

けれど、ザッティバークの城門を出て街道沿いに歩きだして山道に差し掛かる前に、心外なことに「勾<sup>かどわ</sup>かされ」た。野卑で屈強な大男たちに有無を言わず幌<sup>ほろ</sup>付きの荷馬車に引きずり込まれた。女なら悲鳴の一つも上げるか、気でも失うのだろう。けれどエアリアには、なぜ自分がそうされるのか全く理解できないだけで、（恐れていたのはエアリア・ロキメンであると指摘されて警備兵などに拘束されることだった）理不尽で圧倒的な暴力にあっけにとられていた……というのが正直なところだ。

口に臭いボロ布を押し込まれて、上から更に布で抑えつけられたので声も出ないし、なんとも鮮やかに手慣れた分担で、一気に足と手を一度に縄で拘束されてしまったのだ。逃れようとくねくね身を振<sup>よじ</sup>るのも、女が魚みたいで馬鹿馬鹿しく業腹だったから、そのままじっとしていた。明るい日差しから暗い幌馬車の中に移動したことで一瞬失われていた視界が戻ると異常な風景が広がっていた。

あちこちに転がっている芋虫は、大きさからすると女や子どもたちだろう。力なくもがいていたり、ぐったりと動かなかつたり。用足しなど許されていないのか失禁するままに放置されているらしく、酷い悪臭が鼻を突く。とつさに胸を突いたのは、おぞましさより哀れみだった。自分も結局彼らと同じ待遇なのだから、暢気に哀れんでいる場合ではないのだが、自分は既に日常というものを失っているのだ。多少波瀾があろうが、波に吞まれて儚くなるうが、まあ、多少味があつて良いくらいだ。むしろ、この最低な連中にイサクの国境を越えさせたいただけるなら、渡りに舟といつても過言でない。

芋虫状態の憐れな人たち以外にも、幌馬車の中には数人の荒くれという看板を下げているような男たちがいた。勾かしのような汚れ仕事とは別の分担の連中なのだろう。皆が得物とおぼしき長剣や短槍をいつでも手にとれる位置に置いている。中でも一際デカイ男が筋肉の付き具合といい、さりげない視線の使い方といい、随分な手練だれと思われた。多分、傍らに寄せているフレイルを振り回して戦場に立てば、一角の武勲を上げること間違いなさそうだ。それから、線は全体に細いが肩から背中中の筋肉が見事に鍛えられている弓使いの男。彼と速射を競つたら、どちらが上手うわてだろうか。試みに挑んでみたいが、こちらは哀れにも芋虫寸前だ。

額と頬に深い傷があり、なるほど、正面から刃を受ける程には豪胆だったが、刃を逃れるほどの使い手で無かつた時代があるということだろう、一番の使い手と見える男が、妙な生き物を見るような視線をぶつけてきた。きつと冷静にこの中を観察している自分を見て、想像力に欠ける愚かな男に呆れているのだろう。彼のその明るく突き抜けた青空のような瞳が見事にこの陰惨な闇に似合わなかつた。

「神妙すぎて気持ち悪い女だな。ちつとは泣いてみるよ」

そういう声が聞こえた途端、突然、鳩尾みずおちを下手に殴られた。胃の中身が戻りそうになる。自由が効かないのでえづくこともできず、流石に体を「くの字」に曲げ、目を閉じて苦痛に堪えた。こんな状態で戻したら窒息して死にかなない。全く、考えなしの馬鹿な連中だ。少しは予測というものを立ててくれないと困る。片目を薄く開けて、どこのどいつが、ヘタクソな当て身を喰らわせてきたのか見定めようとする。

チツと下品に舌打ちしたのが、弓使いの体をしたひよる男だ。

（こいつか……ヘタクソな筈だ）

見掛け通りに接近戦や肉弾戦は数をこなしてないと見える。止めておけばいいのに、口の端に冷笑が浮かんだ。途端、大きな平手で頬を殴られる。

（ついでに、沸騰しやすい……）

そう思う間に、大きな袋状のものを被せられる。めでたく芋虫の仲間入りだ。その中も、この幌馬車と同じく、いろんな人間の涙と汚物を染み込ませて発酵させたようにすえた、酷い臭いがした。猿轡さるわついでに鼻も覆って欲しいもんだと思いつつ、そんなことされたらそれこそ速攻で窒息だと自分で突っ込みをいれてしまい、可笑しくて笑いそうになる。いけない、これ以上短絡的な連中を刺激してもろくなことになる。女と勘違いされて勾かどわかされたのならば、男の一物に気付かれたら、即、半殺しに……いや、ちゃんと殺される恐れもある。大人しくしておくに越したことはない。

己の力で変えようがない流れに朽ちるまで身を任せて……

神の目には、美しいと映っているのだと……信じて……

（マグダレーネ先生。女と間違われて、芋虫にされて、荒っぽい馬車の動きに打ち身を拵えながら運ばれていくのは……、流れに身を任せるにしても……ちよつと、どう思われます？ 少なくとも、美しくはないですよ……）

師の耳に届くことがないと知りつつ、エリアはぼやいた。男の力の源であるタマを抜いて、その方面にはどうもやる気が激減した自分が、親友の妹を犯して殺したなどというかなり男らしい（？）罪を得て、国外追放を言い渡されたのも相当に滑稽だが、男の装束でいて尚、女と勘違いされて（多分）人買い連中に狩られてしまつて、どこかのその手の商品売り買いすることが普通に行われている国に運ばれていくのも、人生を孤舟<sup>こしゅう</sup>と譬<sup>たと</sup>えたマグダレーネ師の詩的表現を足蹴にしている。

流れていくために……流れている……

（それだけは多分正しいですけど……、絶対に、美しくはないですよ）

痛みに気絶することもできぬまま、朦朧とした意識の中で、エリアはしきりにぼやいていた。イサクでは人売り買いすることは表向きは罪だから、十中八九、このまま何処かへ運ばれていくのだろう。国境を越えるときは、感慨深く王都を見やって、風に想いを運ばせるつもりでいたのに……人生つてやつは、一から十まで自由にならない。それでも、孤舟は流れる。

全く、最低な旅立ちだ。  
。

## 終章 孤舟流れる（後書き）

男はもう失った。だからといって、女でもない。

性の狭間に異形としてある青年エアリア・ロキメン。

罪無くして追われ、意志無くして流れ行く彼の人生に、他の孤舟が  
いかにして寄り添っていくのか。

『第二部 邂逅―女神誕生編』をどうぞお楽しみに！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0123e/>

---

流水の宴（一） 旅立ち～イサク編

2011年10月3日06時14分発行